

歌を贈つたのに對して答へた歌である。一首の意は思ふことも十分に書きつくせないといふが、しかし、言ひ出でないで、心にばかり思つてゐるのではこちらでは知り得ないから、文に残りなく書きあらはしてくれよの意。陸奥、磐手、信夫、壺の碑などすべて陸奥の名所に寄せてよんだ歌「陸奥の」は「いはで」を言ひ出す序で、陸奥の地名の磐手と言はでを掛けてゐる。「いはでしのぶ」は言ひあらはさずに心に思つてゐること。「しのぶ」に陸奥の地名信夫をよせてゐる。「えぞ知らぬ」は知る事が出来ない。「えぞ」に蝦夷の地名をかけてある。「壺のいしぶみ」は單に文といふべきのを陸奥の名所にかけてのである。「壺のいしぶみ」は陸奥國北上郡天間林村にあつたと傳へる古碑で、坂上田村麿が征夷の時、弓弭で石の面に、日本の中央の由書きつけたから、石文といふと傳へ

てゐる。陸奥多賀の城址の碑を、壺の石文といふのは訛傳である。顯昭の歌に「思ひこそ千島の奥をへだてねどえぞ通はさぬ壺のいしぶみ。」

西行法師との談話云々 西行法師が鎌倉に行つたとき、頼朝は祕藏の銀の猫を與へた。西行は門を出るや市上に遊んでゐた子どもらを見て、惜しげもなくその銀猫を與へてしまつた。その時の對面に西行は歌人であり、頼朝にも幾分歌の素養があつたから、いくらかは、風流に關した話もあつたのであらうと推測するのである。このときは上田秋成の「藤篋冊子」の卷四に「月の前」と題して詳しく出てゐる。

實朝 頼朝の次子。建仁三年從五位下に敘せられ、鎌倉第三代の將軍となり、後累進して正二位右大臣、左近衛大將に至つた。永久元年正月二十七日右

大臣拜賀の式を鶴岡八幡宮に行ひ、この日、甥公曉に殺された、年二十八。早くより和歌を好み、定家について學んだ。が、後に萬葉集に心酔し、よくその眞髓を把握し得た。家集を「金槐集」といふ。

※ 曩祖 先祖のこと。曩はむかし、又はさき。

※ 三代 頼朝—頼家—實朝。

※ 武家の家訓として云々 武田氏、北條氏、長曾我部氏等の家訓をあげてみると、武田氏の家訓は信玄家法で、その中に「歌道可嗜事、手跡可嗜事。」等が見え、北條氏のは早雲寺廿一箇條で、その中に「歌道なき人は無下に賤しき事なり、學ぶべし。」「文武弓馬の道は常なり。記すに及ばず。文を左にし、武を右にするは古の法、兼ねて備へずんばあるべからず。」等見え、長曾我部元親式目に消極的ではあるが、「爲侍者、歌道之寄合不苦事。」と見えてゐる。

承久の役 承久三年五月、後鳥羽上皇が北條氏を滅さうとされた時の戦亂をいふ。これより前、鎌倉將軍實朝が弑せられて、源氏の正統は絶えたが、北條義時は幕府の執權として専横甚だしく、救命を奉じなかつた。そこで後鳥羽上皇はこれを滅して朝權を恢復しようとして、承久三年四月、順徳天皇をして位を仲恭天皇に譲らしめ、後鳥羽、順徳兩上皇は相謀つて兵を集め、義時追討の院宣を下し、諸國の武士を召された。然るに北條義時は弟の時房、子の泰時を將として、兵を東海東山北陸の三道から進めた。官軍は一旦、美濃路において、これを防いだが敗れ、退いて宇治、勢多に於て防戦大いに努めたが遂に大敗し、その結果、後鳥羽上皇は隱岐、土御門上皇は土佐、順徳上皇は佐渡に遷幸あつて、なほ仲恭天皇は位を後堀河天皇に譲られて終結をつげた。

※北條氏康 小田原の城主。いはゆる後北條氏の始祖。早雲の孫で氏綱の子である。兩上杉氏を滅して關東八州を領有し、元龜二年十月三日、五十七歳で歿した。氏康は、又、性、和歌を好み詩をよくし、名作が少くない。その一例をあげると、「なか／＼に清めぬ庭は塵もなし風にまかする山の下庵。」又、讀書を好み藏書も數千百卷に達したといふ。扶桑拾葉集にこの人の「武藏野紀行」が收めてある。

※毛利元就 小字は松壽丸。安藝の人。勤皇の志があり、常に皇室を尊重し、正親町天皇御即位の時に當つて、一千石を獻じて費を助けた。從四位下大膳大夫を授けられた。永祿中、尼子氏、大内氏等と戰つてこれを敗り、山陰、山陽の十三州を略有した。元龜二年歿、年七十五。和歌を好んで、「大江朝臣元就詠草」といふ家集が傳はつてゐる。

※太田道灌 名は持資、扇谷上杉定正の臣。康正二年江戸城を築き、長祿元年に成つた。今の皇居の地である。後、長尾意玄の逆謀を惡みこれを除かんとし、反つて反間に遭ひ、文明十八年浴場で刺殺された、年五十五。兵法に精しく、又、和歌に巧みなことは最も知られてゐる。「慕景集」・「平安紀行」等の著がある。

※吉野の花見 文祿三年二月二十五日、秀吉は秀次、徳川家康、前田利家等とともに大阪から吉野に赴き、花見の壯遊を試みた。二十九日に吉水院に宿して、五首の題に就いて歌の會を催した。秀吉の歌を二三あげると「いつしかと思ひおくりし芳野山の花をけふしも見そめぬるかな。」「春風は吹けども花はかつ咲きてしづ心にしながめけるかな。」「乙女子が袖ふる山に千年へてながめにあかじ花の色香を。」「吉野

山誰とむるとはなけれども今宵の花のかけに宿らん。」

※霜滿軍營 天正二年昌山義隆の將、游佐彈正等が主なる義隆を毒殺し、能登の七尾城に立籠つて、織田信長に降つた。そこで上杉謙信はその七月に出兵し、加賀、能登を平定し、九月、七尾城を陥れて游佐等を誅し、二日間休兵した。時恰も九月十三日の夜だつたので、感興しきりなるあまり作つた詩。霜は陣營に滿ちて秋の氣は清く澄み、過雁數行月夜半ならんとしてゐる。見渡せば越の國の山々と、能登の風景とを併せて、雙眸の中に收め得たのは、男兒の快心の極であるから、まゝよ故郷の家族どもが我が遠く征伐に来てゐるのを氣遣つてゐるであらうが、どうしてこの好景を見捨てて歸られようか。

※信玄云々 武田信玄の詩に偶作と題して「鑿殺江南

十萬兵、腰間一劍血猶腥、豎僧不識山川主、向我慇懃問姓名。」といふのがあるが、これは明の太祖の詩を剽竊改竄したものといはれてゐる。

※直江兼續 上杉景勝の老臣。樋口惣右衛門の嫡男。初め上杉謙信に近侍して非常な寵遇をうけた。秀吉にも厚く遇せられた。秀吉の薨後、三成と謀り、景勝を勸めて家康に抗して成らず、後、主従家康に屬して、米澤六萬石を分封された。元和五年十二月十九日、六十歳で歿した。兼續は武勇に練達せるのみでなく、學問を好み、詩歌に達し、曾て文選を印行した。これがいはゆる要法寺版である。

※梶原景時 源頼朝の臣。名は平三。鎌倉景政の裔、景清の子。族人大庭景親に従つて、頼朝を石橋山に攻め、故意にこれをたすけて後頼朝に降つて寵せられた。勿論武勇にも富んでゐたが殊に和歌の才に至

つては當時の武將中比肩するものがなかつたといはれてゐる。景時の連歌は源平盛衰記にも載つてゐる。頼朝が奥州征伐の時、「われ獨りけふの軍に名取川」と言つたが、誰も附ける者がなかつた。その時景時、「君もろともにかちわたりせん。」又相模の鞠子川（今の酒匂川）を渡つた時、景時の馬のはね上げた水が頼朝の身體にかゝつた。頼朝の腹立つた様子に、景時「まり子川ければぞ波はあがりける」といつた。頼朝これに感じて「かゝりあしくも人やみるらん」といつた。「かゝり」といふのは、蹴鞠の場所である。蹴鞠の場所が悪かつたので波があがつたのだと人は見るであらうといふ意。

※回天詩 東湖が江戸の水戸藩邸に幽閉せられてゐた間は、待遇酷薄を極め、僅かに朝夕の飲食が出来るくらゐに過ぎなかつた。入浴等は勿論出来なかつた

る。七十四句より成り、序がついてゐる。  
「天地正大氣、粹然鍾神州。秀爲不二嶽、巍巍聳千秋。注爲大瀛水、洋洋環八洲。發爲萬朵櫻、衆芳難與儔。凝爲百鍊鐵、銳利可斷鑿。蓋臣皆熊羆、武夫盡好仇。神州孰君臨、萬古仰天皇。皇風洽六合、明德伴太陽。世不無汚隆、正氣時放光。乃參大連議、侃々排羅臺。乃助明主斷、猷々焚伽藍。中郎嘗用之、宗社磐石安。清丸嘗用之、妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍、虜使頭足分。忽起西海颶、怒濤熾胡氣。志賀月明夜、陽爲鳳輦巡。芳野戰酣日、又代帝子屯。或投鎌倉窟、憂憤正情々。或伴櫻井驛、遺訓何慙慙。或殉二天目山、幽囚不忘君。或守伏見城、一身當萬軍。昇平二百歲、斯氣常獲伸。然當其鬱屈、生三十四人。乃知人雖亡、英靈未會氓。長在天地間、

が、東湖は文天祥の土室よりは優つてゐるといつて、終日兀坐して、平生の出處進退より國家に對する感慨を録して八韻十四句を得、その句を分つて十篇とし、前後の事歴を敘し、四月十六日稿を起し、六月朔日脱稿した。名づけて回天詩といふ。實に一個の自敘傳である。その詩は「三決死矣而不死。二十五回渡刀水。五乞閒地不得閒。三十九年七處徙。邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。自驚塵垢盈皮膚。猶餘忠義一骨髓。嫫姚定遠不可期。丘明馬遷空自企。苟明大義正人心。皇道爰患不興起。斯心奮發誓神明。古人有云斃而已。」

※正氣歌 「和文天祥正氣歌」といふので、東湖が幽閉せられてゐる間に、支那宋の文天祥の正氣歌を誦し遂にこれに和して、我が國の忠臣義士の事蹟を詠じ、天地正大の氣の萬古不變なるを述べた詩であ

隱然敘彝倫。孰能扶持之。卓立東海濱。忠誠尊皇室。孝敬事天神。修文與奮武。誓欲清胡塵。一朝天步艱。邦君身先淪。頑鈍不知機。罪戾及孤臣。孤臣困葛藟。君冤向誰陳。孤子遠墳墓。何以謝兩親。荏苒一周星。獨有斯氣隨。嗟予雖萬死。豈忍與汝離。屈伸付天地。生死復安疑。生當雪君冤。復見張綱維。死爲忠義鬼。極天護皇基。」

※梅田雲濱 通稱源次郎。若狹小濱藩士。初め江戸に學び、後、京都に山崎闇齋の學を奉じて子弟を教育し、憂國の志深く尊攘の大義を唱へた。安政元年、長州志士と兵庫に露艦襲撃を企て、徳川齊昭を將軍に擁立せんことを謀り、事漏れて同五年捕へられ、江戸に投獄されて、六年九月獄死した、年四十四。後に正四位を追贈された。

※妻は病床に臥し云々。これは「袂別」の句で、全詩は「妻臥ニ病牀ニ兒叫レ飢。挺身直欲レ當ニ我夷。今朝死別與ニ生別。唯有ニ皇天后土知。」である。この詩はいはゆる安政の獄に捕はれ、京都から江戸に送られる時、妻子に向つて別を告げた詩である。即ち、妻は病床について、兒は飢に泣いても、この自分の心は、誓つて攘夷を決行しようと思つてゐる。今朝捕はれて、生別をするけれども、やがては死別となることであらう。よし、たとへ刑罰に處せられるとも、唯天地の神々がこの心を知り給はば、それで十分であるとの意。

※橋本景岳 通稱左内。越前福井の人。安政の大獄に坐し、同六年十月、斬られた、年二十六。

※誰か知る松柏後凋の心 頭註参照。松柏後凋とは極寒の時、多くの樹木は枯れしほんで、松柏ひとり

青々としてゐる如く、無事の時君子も小人も區別はないが、一旦事あると、君子は流俗に従はずその節を守り、小人との區別のきは立つてみえることをいふ。論語に「歲寒然後知ニ松柏之後凋也。」彫は凋に同じ。

※頼三樹三郎 名は醇、字は子春、鴨屋と號し、又古狂生と號した。頼山陽の第三子。文政八年、京都三本木町に生れた。十七の時大阪に遊んで後藤松蔭の門に入り、翌年江戸に遊んで昌平齋に入り、傍ら佐藤一齋、菊池五山、梁川星巖と交を結び、詩文を精研した。上野東叡山寛永寺に遊んだ時、その莊麗なのに憤慨し、石燈籠を倒して快を叫んだといふ。梅田雲濱等と謀り、攘夷の詔敕を水戸に賜ふ議を起し、百方周旋して事殆んど成らんとして捕へられ、安政六年十月七日小塚原で斬られた、年三十五。著

に「鴨屋頼先生一日百詩」がある。

※誰か題す日本の古狂生 頼三樹三郎の辭世で、その全詩は、「排レ雲手 欲レ掃ニ 妖燧。失脚墜來江戸城。井底痴蛙過ニ憂慮。天邊大月缺ニ高明。身臨ニ湯鏡。家無レ信。夢破ニ鯨鯢。劍有レ聲。風雨他年苔石面。誰題日本古狂生。」この詩は安政五年捕へられて獄に投ぜられたことから、今の當務者が宇内の大勢に通じてゐないことをいひ、自分が死んでも誰も弔ひ悲しんでくれるものはないであらうといふ意味を敍したのである。又、和歌を詠んだが、「浮雲のおほふ姿はかはれども萬代おなじ天つ日の影」などはその一例である。

※佐久間象山 名は啓、通稱は修理、象山はその號である。信州松代の藩士佐久間一學國善の子。文化八年二月、松代城南の象山の麓に生れたので象山と

號した。象山の號に就いては、よく「しやうさん」が正しいか、「さうさん」が正しいか問題になるが、象山自身郷里の象の形をした山に因んで號としたといつてゐるから、「さうさん」と呼ぶ方が正しい。幼時より聰明で學を好み、その人となりは豪邁不羈で、漢文、漢詩に長じ、又書蹟を善くした。長ずるに及び、江川太郎左衛門の門に入つて西洋の砲術を講究し、次いで蘭書によつて西洋の砲術、築城法、兵學等を研究し、西洋真傳と稱する一派を起し、江戸木挽町に塾を開いて教授した。嘉永六年米艦の來朝するや、象山は急務十條を幕府に呈して軍艦兵器の製造、砲臺の築營、兵學校設立等のことを論じた。安政元年その弟子吉田松陰の事に連坐して傳馬町の獄に繋かれ、次いで郷里に蟄居を命ぜられた。元治元年京都にあつて公武合體して國難に當るべきこ

と、開國貿易の止むべからざることを唱へたために、深く攘夷論者の惡む所となり、同年七月十一日京都三條木屋町の途上に於て浪士に斬られた、時に年五十四。後正四位を贈られた。その詩は愛國至誠の心を詠じたものが多い。

※吉田松陰 名は寅次郎。二十一回猛士とも號した。

萩の藩士。専ら意を海外の事情に用ひ、江戸に出て佐久間象山の門に學んだ。象山は松陰に説くに、海外に航して形勢を審にすべきことを以てしたから、嘉永六年露艦の長崎に入港するや、意を決して西下したが、既に露艦の去つた後で空しく江戸に引返しした。その後安政元年米艦が下田に碇泊するや、夜陰に乗じて米艦に赴き、米國に伴なひ行かんことを懇請したが、ペリーは日本の國法は犯し難しといつて拒絶した。このことが端しなくも幕府に聞え、江戸

傳馬町の獄屋に繋がれ、次いで郷里に幽せられた。その後松陰は郷里に於て松下村塾を開き、俊才の養成に努め、又屢々公卿や藩士に書を奉つて尊皇攘夷のことを論じたが、安政の大獄が起るや捕へられ、江戸に於て斬に處せられた、時に年二十九。その著作には、「幽室文稿」・「武教講録」・「講孟劄記」など澤山あるが、今すべて「吉田松陰全集」(全十卷)に收められてゐる。

※僧月照 名は忍向。京都清水寺成就院の僧。尊皇の

心厚く、西郷隆盛と親交があつた。その爲に幕府に忌まれて追捕せられようとしたので隆盛と投身を約し、安政五年十一月十六日(十一月ともいふ)隆盛、平野國臣及び僕の重助とともに、月明に乗じて薩摩の御船崎から舟出し、隆盛と相擁して投身した。國臣等はこれを救つた。が、隆盛は蘇生し、月照は絶

命した、年四十六。辭世の歌二首。「大君の爲には何か惜しからん薩摩の瀬戸に身は沈むとも。」「曇なき

心の月の薩摩濁月の浪間に今ぞ入りぬる。」

※伴林光平 通稱は六郎。攝津の人で、初め東本願寺

の僧であつたが、後、還俗して大和國斑鳩村に住んでゐた。夙に尊皇攘夷の大義を唱へ、文久三年八月十二日、夷狄親征の擧を聞いて大いに喜び、同志と謀つて義兵をあげたが、事成らず、幕吏に捕へられて元治元年二月十八日刑に處せられた、年五十二。明治二十四年十二月從四位を贈られた。和歌に長じ、神樂の舎五百言の歌集がある。「ますらをの屍草むす荒野らに咲きこそ匂へ大和なでしこ。」「黄金もて月日をうちし高旗になびかぬ國はあらじとぞ思ふ。」「うねび山そのいでましを玉褥かけて待ちしは夢かあらぬか。」などは有名。大和義擧を記した「南山

踏雲録」がある。

※望東尼 野村もと。出家して望東尼といふ。幕末維

新の際の女丈夫で、歌を大隈言道の門に學び、家集に「月桂一葉」と「桂芳院遺草」とがある。福岡の人で、父を浦野十兵衛勝幸といつた。二十四歳で野村貞貫に嫁し、五十四歳で夫を失つたので剃髪した。慶應元年福岡藩の俗黨が勝つて、志士が禁錮せられた時、望東尼も咎を蒙つて幽閉せられた。そして十一月二十一日同國志摩郡姫島に流された。孫の野村助作は獄中で死し、その他志士が多く刑せられたことを聞いて、痛憤の極、指を傷つけて老血を絞り、般若心經を書し、自詠の和歌を添へて、ひそかに志士の許におくつた。その歌に曰く「おくれてゐてかくもかひなし法のふみよみかへり來むつてならなくに。」「御世のため心つくしのものふの命にかはるわが

身なりけり。」又、幽閉から姫島に流されるまでのことを「いきのわかれ」「ながれき」「うぐひす」の三卷に別記し、名附けて比賣島日記といふ。慶應三年九月、高杉晋作の援助によつて姫島を出で、馬關にとどまり、後、三田尻に移る。同年十一月六日遂に病歿した、年六十二。辭世に曰く「花浦の松の葉白くおく霜と消ゆるはあはれひとさかりかな。」「雲水の流れまどひて花浦の初霜とわれふりて消ゆなり。」  
◎天下の憂に先だつて憂ふ 范仲淹の岳陽樓記に、

注意

かういふ文章は引用の源を心得てゐないと興味が削減されるから、教へる上には一度バラ／＼に解體して、引用の源を明かし、背景をはつきりさせてから、再び纏める必要がある。さてその論旨といふものは、風流を中心とした文學が人品を造る上に必要であるといふので、風流を中心とした文學といふのは、つまり古典的文學の教養である。それ故一概に文學とは言つてあるが、文學と名の附くものなら何でもよいと言ふわけなく、古典的な、傳統的な國文學、漢文學の教養がよいと言ふのであつて、この局限した意味を掴まへさせることが大切であらう。この意味に於て、前々課の「詩の心」とは少し論點が違つて来る。「詩の心」の論點はこれよりも少し廣いものであつた。

「嗟夫、予嘗求<sup>ムルニ</sup>古仁人之心、或異<sup>ハナレハ</sup>二者之爲<sup>ニ</sup>何哉。不以<sup>レ</sup>物喜、不以<sup>レ</sup>己悲、居<sup>ニ</sup>廟堂之高、則憂<sup>ニ</sup>其民、處<sup>ニ</sup>江湖之遠、則憂<sup>ニ</sup>其君、是進<sup>ニ</sup>亦憂、退<sup>ニ</sup>亦憂、然則何時<sup>ニ</sup>而樂耶。其必曰<sup>レ</sup>先<sup>ニ</sup>天下之憂<sup>ニ</sup>而憂<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup>天下之樂<sup>ニ</sup>而樂<sup>レ</sup>上<sup>ニ</sup>歟。噫、微<sup>ニ</sup>斯人<sup>ニ</sup>吾誰與歸<sup>ニ</sup>。」とあるによつたのである。又蓬窓日録には「先憂<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>者後樂<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>、先樂<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>者後憂<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>。此曾子立事篇語、大戴禮所<sup>レ</sup>載、范文正公語本<sup>レ</sup>此。」と見えてゐる。

一三・一四 小松内府

解説篇

引用書

平家物語卷二「教訓の事」から次の「烽火の事」に互つて採つてある。平家物語の解題は、第一課日本文學の解釋の項参照。

教材

「忠ならんと欲すれば孝ならず。」と、血涙をふるつて父を諫めた重盛の事蹟は、我が國民の胸に過くしみ渡つてゐる。本課はその息づまるやうな場面を描いた平家物語の一節である。行文、對話よく實情を髣髴せしめ、千古の下、純忠に泣かしめられるものがある。

指導篇

扱方

内容的には重盛の國家意識及び忠孝兩全の態度に感銘せしめたい。重盛の言に「普天の下王地にあらずといふ事な

し。」といひ、「それ日本は神國なり。」といふは、國家意識の現れに外ならない。この國家意識を基礎に、大義名分論は組立てられ、堂々の論陣は展開されて行くのである。而してかゝる國家意識の上に立つ重盛としては、理性の上に於ては、執るべき態度は一定してゐるはずである。即ち、「大義滅親」で、問題は簡単に片附くのであるが、人情といふものは簡単に殺せるものではない。殊に重盛の場合は、情義全く相反するのであるから、世にも最も不幸な例であつた。人情といふものの力が根強ければ根強だけ、これを抑制するのが困難となる。ところが重盛は、身を抛つて、これを抑制しようとした。恐らく身を投出さなければ、もう抑制の仕やうもなかつたのであらう。このやうに抑制に骨が折れるだけ、側の見る眼には悲壯美が増す。重盛の場合はその最も美しい場合であるといへよう。ここには彼の苦衷が克明に描かれてゐる。解決は第二の問題として、ここに吾等は、どんなに苦しんでも情を殺して理に向はうとした雄々しい態度を學べばよい。その苦しみに共感すればよい。

外形的には既習の「源三位」と相俟つて、軍記物語の特色を知らせたい。軍記物語の文章上の特色を二三擧げてみれば、次のやうにならう。先づ第一に、漢文の剛健な要素と國文の優麗な性質とが相混和して全豹の美をなしてゐることである。漢語は促音、長音、濁音等が多く、單語として既に音の變化に富む。この漢語を豊富に駆使してゐるばかりでなく、句法の上に於ても、漢文訓讀その儘の形ものが少くない。これ文章が強く、力ある所以であつて、平安時代の文章には見られなかつた特色である。第二に、武人描寫と戦争描寫とに著しい特色がある。武人描寫は武人の装束や態度を寫したもので、概して靜的の部分である。戦争描寫は實戰の經過を寫したもので、概して動的の部分で

ある。本文でも見られる通り、武人の描寫は實に精しい。鎧に、冑に、太刀に、弓に、馬に、鞍に、その装束の一隅をも見落すまいと注意してゐる。「古事記」や「日本紀」や「萬葉」や「今昔」に見えた、武人や戦争の描寫とは比較にならぬ、委しく活き／＼したものとなつてゐる。それが平安時代文學に於ける束帶衣冠や、五衣や、御遊などの單調な生ぬるい描寫に厭いた時人に刮目された趣が想像される。第三に、これは小さいことであるが、作者の衒學的傾向が頭を出してゐることである。「我が朝は邊地粟散の境」とか、「世に四恩候」とか「普天の下云々」とか、「かの瀬川の水に耳を洗ひ、首陽山にわらびを折りし」とか、これ盡く、故事成句を引用したもので、作者の衒學的傾向の現れに外ならぬ。これは無學時代の讀者に、作者が説法し、教訓の資にしようとしたものであつて、本文の如きも、實は作者が、重盛の口を藉りて、忠孝の道を説法してゐるのである。これが極端に進むと、「昔は何、今は何」と比較し、或は「漢土の何は、天竺の何は、本朝の何は」と對照し、讀者をして古今東西の事例に、應接に追なからしめる。今日から見れば、興趣を殺ぐこと少しとしないが、當時にあつては、作者と讀者との境遇が、平安時代と全く一變した結果であつて、また已むを得なかつたのである。

## 展開

第一節——太政入道は（から）「貞能」と召す。（まで）  
清盛の不満。

第二節——筑後守貞能は（から）「……著背長取出せ。」とこそ宣ひけれ。（まで）

清盛が、法皇幽閉の謀略を、貞能に打明ける。

第三節——主馬判官盛國（から）西八條殿へぞおはしたる。（まで）

清盛の謀略を聞いた盛國が重盛に注進する。重盛は急ぎ車を飛ばせて西八條殿へ赴く。

第四節——門前にて車よりおり（から）殊の外にぞ見えられける。（まで）

重盛西八條殿に到着、物々しい勢揃ひの間を分けて静かに進み入る。

第五節——入道伏目になつて（から）大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。（まで）

重盛を迎へた清盛の當惑した様と、父子の對面。（以上その一）

第六節——稍あつて（から）君も思し召し直す事などか候はざるべき。（まで）

初め清盛から口を切つて法皇幽閉の謀を告げる。これに對し重盛は朝恩の大を説き、大義名分の上から、その不心得を諫める。全篇の主眼である。

第七節——これは尤も君の御ことわりにて候へば（から）皆袖をぞぬらされける。（まで）

諫言の続きである。前節は義理の上から説いたが、この節では子としての情から述べ、その苦衷と覺悟とを披瀝する。

第八節——入道頼みきつたる内府は（から）小松殿へぞ歸られける。（まで）

重盛の情理兼ね備へた諫言により、清盛は暴舉を思ひ止まる。よつて重盛は侍どもを戒めて、小松殿へ歸る。

解釋

※太政の入道　ここは清盛を指す。清盛は仁安二年

從一位太政大臣に陞り、隨身兵仗を賜ひ、輦車で宮中に入ることを許されたが、幾くもなく太政大臣、兵仗輦車を辭し、同三年病の爲剃髮して名を靜海（淨海）と改めた。

※人々數多縛め　人々は即ち六月一日に捕へた新大納言成親、近衛中將入道蓮淨、法勝寺執行俊寛僧都、山城守基兼、式部大輔正綱、平判官康頼、宗判官信房、新平判官資行等を指す。

※心ゆかず　不満足に思ふ。得心が出来ない。

※赤地の錦の直垂　鎧の下につける鎧直垂の地色が赤い錦で作られてあるもの、當時の大將の料である。鎧直垂は普通の直垂よりも幅も丈も小さく、袴亦短く袖と裾とに括りがある。

※黒絲絨の腹卷　黒色の絲で札と札とを綴つた腹

卷。腹卷は鎧の一種で、腹に巻いて背で引合はせるやうに作り、その背の隙を背板せいたでふさぐ。元來は狩衣かりぎぬ、直垂・鎧等の下に著るので、袖・障子板・弦走・梅檀板・鳩尾板などはなかつたが、鎧に代へて裝束の下にも用ひるやうになつて、背板・袖・杏葉ぎやうえがなどもつけ、その裝束の下に著たのを下腹卷といひ、その上に著たのを上腹卷といつた。ここは下腹卷である。

※白金物打つたる　銀製の金具（所謂胸金具）を打つた。

※胸板せめ　胸板（鎧の胴の胸に當る所の稱）をしつかり胸につけて著る。

※安藝守たりし　清盛は久安三年（四十二歳）に正四位下安藝守に任ぜられ、次いで保元の亂の功を以



て播磨守となつた。

※神拜 じんぱい ここは清盛の崇敬厚かつた嚴島神社の參拜を指す。

※銀の蛭卷したる小長刀 銀製の輪を以て柄を少しづゝ間をすかせて巻いた短い薙刀。小長刀は大長刀に對していひ、二三尺の刀に六尺ばかりの柄をつけたもの。

※常の枕を云々 平素いつも枕もとに置いて手放さなかつたとの意。

※中門 貴人の邸の表門と寢殿との間にある門。寢殿造に於て、寢殿の兩側にある對屋から南に續いてゐる廻廊の中程に、内庭を中にしてゐた門が中門である。即ち二つあつた譯で、當時客來の時は先づこの門で取次をした。

※廊 ここはいはゆる中門の廊。

※ゆゝしうぞ見えし 一通りでなく、何か重大げに見えた。「ゆゝし」は善きにつけ悪しきにつけ容易ならぬ意。

※貞能 筑後守平家貞の子。筑後肥後の守護となつた。後、剃髮して名を以典と改めた。世に肥後入道といふ。

※木蘭地 木蘭は染色の名。黄紅赤の雜色。黄楝きつるぼみともいふ。木蘭は梅谷遊うめやうに明礬を交へて染めた狩衣、直垂などの地。

※緋絨の鎧 鎧の札を綴つた絨しが、緋色のをいふ。平右馬助 清盛の叔父平忠正。正盛の子、保元の亂にその四子と共に崇徳上皇に味方して軍破れ、上皇と共に如意山に逃れたが、道で別れ淨土谷で出家入道して深く隠れてゐたが、後捕へられ、六條河原で斬られた。

※一門半ば過ぎて 一族の過半数を意味する。平家一族の半分以上が。

※新院 崇徳上皇。第七十五代の天皇。鳥羽天皇の皇子。五歳で即位せられたが、白河、鳥羽二上皇が院中で政を聽かれた。保元の亂に敗戦され、讃岐に遷され給ひ、九年その地におはして崩せられた。世に讃岐院と申上げる。

※一宮の御事 おんこと 一の宮様といふに同じ。「御事」は御方、様といつたやうな親みを帯んだ敬語である。一の宮は崇徳上皇の第一皇子重仁親王しげひと。美福門院（鳥羽法皇の女御で近衛天皇の御生母）の養子となり給うた。永治元年親王となり、久安六年、冠して三品に敘せられた。近衛天皇が崩御遊ばされた時、皇位に即き給ふ筈であつたが、遂に後白河天皇がお立ちになり、そしてそれが保元の亂の一原因となつたの

である。

※故刑部卿の殿 今は既に亡くなつてゐる刑部卿様。ここは清盛の父忠盛を指す。忠盛は貞盛五世の孫で正盛の子である。鳥羽上皇の命を奉じて得長壽院を創め、功をもつて但馬守となり、次いで刑部卿に擢でられ昇殿を聽された。が、群卿の猜忌を受け、豊明節會を期して辱かしめられるらしいのを悟り、木刀に銀箔を塗つて一見鞘卷のやうにして携へ、わづかにこれを免れた。これより益々上皇に親遇せられた。仁平三年薨、年五十八。刑部卿は刑部省の長官で正四位下相當官。刑部省は八省中の重職で、罪人を裁判し、刑名を定め、疑獄を決し、良民賤民の名籍及び負債のことを掌つた。

※養君 やしひぎみ にて云々 傳育し奉つた御子であるから。養君は「ヤウタン」ともよみ、傳育する貴人の子の

意で、ここは清盛の父なる忠盛が重仁親王の御養育係であつたことを意味してゐる。

※旁々見放ち云々 かうしたいろ／＼の理由——即ち保元の亂に叔父を始め一門の過半数が崇徳上皇の御方に参加したとか、その第一皇子が亡父の養君であつたとかが重なつて、重仁親王を御見捨て申すことは出来かねる事情にあつたのだが、「旁」はいろいろのことが重なる時にいふ語。

※故院 鳥羽天皇のこと。堀河天皇の皇子、御年五歳で位に即き、萬機は白河法皇が裁決された。在位十六年で、位を崇徳天皇に譲り、法皇となり、院政をきゝ給ふこと、崇徳、近衛、後白河の三代二十八年に互つた。美福門院を寵愛され、儀容を好み、衣服調度の制は華者を極めさせられた。保元二年崩御。  
※御遺誠 遺誠は臨終の際に遺したいましめ。ここで

は鳥羽法皇の御遺詔を指す。即ち鳥羽法皇がその生前に於て、既に早晚兵亂の起るべき事を察せられて、「内裏へ召さるべき武士の交名」(保元物語)を列記して置かれた——それが御遺誠のわけなのであるが、その中には實は清盛の名は見えてゐないのであつて、それをちゃんと御遺誠の中に入れてあつた事にして清盛を召したのは一に美福門院の策略である。  
※先を駆けたりき 先駆けをしたのであつた。

※平治元年十二月云々 平治の亂をいふ。二條天皇の元治元年十二月清盛が子重盛等をつれて熊野に參詣した留守に藤原道憲(信西)を怨む信賴は義朝と俄に兵を擧げ、その夜上皇の御所三條殿を圍み、上皇を内裏にお遷し申して、天皇と共に幽し奉つた。信賴は擅に大臣大將となり、義朝を播磨守となし、その他黨與の者に官階を加へた。その怨敵と目され

た通憲は逃れて大和へ奔つたが、追跡されて殺された。清盛は急を聞いて歸り、謀を以てひそかに天皇を己が六波羅の第に迎へ奉り、上皇もまた密かに仁和寺に御幸になつた。そこで信賴、義朝は二千餘騎を以て内裏を守つたが敗れ、遂に信賴は誅せられ、義朝は東國に奔る途中尾張に於て殺され、平氏の全盛期を將來したのであつた。

※信賴 藤原忠隆の第三子。後白河法皇の寵を受け、右衛門督となつた。藤原通憲と權を争つた。通憲は清盛と婚を結んで勢を張つたので、信賴は孤立の義朝と結んだ。平治の亂に敗れ、遂に平氏の兵に斬られた。年二十七。

※義朝 源爲義の長子。下野守となり、保元の亂には後白河天皇の召に應じて戰つたが、功を清盛の下に置かれたので内心平かならず、遂に信賴に誘はれて

平治の亂を起し、敗れて東奔の途次、平治二年一月長田庄司平忠致の爲に殺され、首を左獄に梟せられた。年三十八。

※院、内を取り奉つて 後白河上皇と二條天皇とを捕へ奉つての意。

※經宗 關白藤原師實の孫で、藤原經實の子平治の亂に信賴に黨し、亂中、變節して惟方とともに二條天皇を奉じて六波羅の清盛の邸に入つた。その後專權の罪で後白河上皇の御怒に觸れ阿波に流された。應保二年赦されて歸り、累進して右大臣となり、仁安承安の間從一位左大臣となり、皇太子傳となり、文治元年薨去し、ついで薨去、年七十一。世に阿波大臣又は大炊御門左大臣ともいふ。

※惟方 權中納言藤原顯賴の子。檢非違使別當。平治の亂に經宗と行をともして寵せられたが、後、や

はり經宗と同じく權を弄したので長門に流され、剃髮して寂信と改めたが、仁安元年赦されて還つた。世に小別當（惟方は小男であつた）又は粟田別當と云ふ。

※君の御爲に 後白河法皇の御ために。

※七代までは云々 同じく平家物語卷十にも「帝王の御敵うちたる者は七代まで朝恩盡きすと申すことは云々」とある。

※それに 然るに、それにも拘らず。

※成親 藤原成親。權中納言家成の子。平治の亂、信賴に黨して、軍敗れて奔つて仁和寺に入つたが、清盛に捕へられた。けれども重盛と重姻あるが故に罪を宣せられ、尋いで舊官に復し累進して安元中權大納言に任ぜられた。治承元年左近衛大將を得ようとして成らず、平氏を怨望すること甚だしく、法勝寺

執行俊寛、平康頼等と鹿ヶ谷の別莊に會して平氏討伐を謀つた。事漏れて備前に流され、更に難波に徙され、同年八月その地で殺された。年四十。

※無用のいたづらもの とるに足らない無藝な人間。役にも立たない亂暴者。

※西光 藤原師光。中納言藤原家成の養子。平治の亂に信西に従つて大和に行き、信西の臨終に際して薙髮し名を西光といつた。後白河法皇の親昵を得て加賀守となつた。後鹿ヶ谷に會し清盛を謀らうとして、却つて捕へられ、六波羅邸の前庭で清盛を罵り、爲に口を裂かれて梟首せられた。

※下賤の不当人 身分のいやしい無法者。不当人は道理に當らぬ、亂暴な行をするもの。人でなし。正當でない人。

※君のつかせ給ひて 後白河法皇には、さうした者

等の申すことに御同意あつて。

※動もすれば 何彼につけて。ともすれば。どうかすると。

※御結構こそ然るべからぬ 御くはだてが正當のことではない。御たくらみこそはふにおちないの意。結構は企て、たくみの意。「然るべからぬ」は然かあるべからぬの約。「ね」は「ず」の已然形で、上の「こそ」の結び、さうあるべきことではないの意。

※鳥羽の北殿 鳥羽殿の北殿。鳥羽殿には北殿、南殿、馬場殿、田中殿、洲濱殿等の御殿があつた。鳥羽殿は一に城南離宮。山城紀伊郡上鳥羽材に舊址がある。應徳二年十月、白河天皇が鳥羽の山庄百餘町をトして御院を造らせられたのに始まる。

※これへまれ御幸を云々 この西八條の邸（清盛の邸）へでも、後白河法皇の御幸あるやうに致さうと

思ふが、どうだ？ の意。

※北面のものども 北面の武士どもである。北面は院の御所の北方にあたり、北面の武士の伺候する所だが、また、そこに伺候してゐて院の御所を守護する武士——即ち北面の武士の意にも用ひる。で、これは白河法皇の御代に、始めて設置せられたもので、上北面と下北面との別があり、四位、五位を上北面、六位を下北面といふ。

※矢をも一つ射んすらん 矢の一つくらゐ射て敵對しようとするものがあるだらう。「射んすらん」は「射んとすらん」の約。

※その用意せよ云々 それに對する用意をせよと武士共一般に傳へよの意。

※著背長 鎧をいふ。貞丈雜記に「鎧に著長といふは鎧の腹巻、腹當、胴丸などよりも草すり長き故な

り。又著背とも書く。これは腹巻、腹當などは背の方にて合はする故、腹の方より當て著るなり。鎧は背の方より著る故なり。著長とは大將の鎧をいふ。平士の鎧をいふも誤にあらず、後三年記に「我が著たるきせながをぬぎ、のり馬どもを國府へやる。」とあり、これ諸卒の鎧の事をいへるなり。」

※主馬の判官盛國 盛國は平維盛(正度の子)の弟季衡の二男。平治の亂には、重衡に従つて内裏に向かつた。清盛に仕へて西八條にゐたが、特に重盛の恩顧を蒙つてゐた。東鑑によると、承久二年十月薨髪したといふ。主馬判官は主馬署、東宮坊に屬し御馬のことを掌る官所)の判官。判官は四等官で尉に當り次官の下で主典の上に相當する。

※世ははやかう候 世ははやく候の音便。世の中の事態はもうかういふ事になりました。

※大臣 「おほと」(大殿)の略轉。貴人の邸宅の尊稱から轉じて大臣又は公卿などの尊稱となつた。ここは内大臣重盛——を指してゐる。

※聞きもあへ給はず 話の終るを待たずに。十分おき、なさらぬ意。

※勿ねられたんな 「たんな」は「たりな」の音便。勿ねられたなど確かめるやうにして、軽い疑問の意を含めてゐる——ここは、父清盛のために成親卿の頸は刎ねられてしまつたのだなあ——と重盛が早合點をしていつた言葉。

※うち立つて 出發して。

※法住寺殿 一條天皇の朝に藤原爲光がその女祇子の菩提の爲に創建した寺。址は、京都三十三間堂の東南一町許にある。この寺を鳥羽、後白河兩法皇が擴大して離宮となし、寺塔を興し、法住寺殿と稱せら

れた。壽永二年義仲放火し、建久二年源頼朝修造、後廢絶してしまつた。

※とは候へども 表面にはさういつてゐるけれども。

※流し參らせんとこそ云々 流し申さうと評議せられたの意。

※何によつて只今云々 どうして、今、そんな——  
—後白河法皇を鎮西の方へ流し參らすといふやうなことがあり得よう。

※けさの禪門の氣色 今朝、重盛が目撃した父清盛の様子——あの成親を引つ捕へて「取つて伏せて、をめかせよ。」などと叱咤してゐた荒らげな態度様子である。その時は重盛は、成親の命乞をして、小松殿へ引上げたのである。禪門は禪室の門に入つた義で、佛門に入つた男子の稱である。ここは清盛を指す。

※さる物狂はしきこともや さういふやうな狂氣

じみたことも、或はおありなさるかも知れないと思つて。「物狂はし」は狂氣じみたさま。法皇を幽閉し奉るとか、鎮西に流し申すとか人臣としてあるまじき行爲をいつたのである。

※西八條殿 清盛の邸。今の京都八條の北、坊城の西北に當る。長門本の平家物語に「平相國禪門をば八條太政大臣と申しき。八條より北、坊城より西北に亭ありし故なり。彼の入道うせられし曉、焼けにき。大小棟かず五十餘に及べり。」とある。

※二行に著す 二列に並んで著座してゐる意。

※受領 王朝時代に國司の赴任して事務を掌る首席の者をいふ。諸國の長官。かみ。前任の引繼ぎを受領して吏務を執る義。

※衛府 王朝時代に内裏を護衛した官所。又その所屬

の武士。ここは後者である。で、衛府は令の制では衛門府、左右兵士府、左右兵衛府の五衛府であつたが、再三の變遷を経て、左右の兵衛府、近衛府、衛門府の六衛府となつた。

※諸司　ここは、もろくの官所——の役人の意。官職にある人。

※ゝぼれ　縁側に著座してゐるのだが、とても坐りきれないで溢れるほど密集して居るさま。

※ひしと並みゐたり　隙間もなく並んでゐる。

※旗竿など引側め　竿を各自に側へ引寄せ。旗竿の長さは大小によつて一定してゐない。この竿の頂に旗(長方形)の一端を付け、末を垂して風に長々と靡かせる。

※腹帯を固め　腹帯のゆるんでゐるのを堅く締め。

「はるび」は「はらおび」の約で、馬に鞍を結びつけ

る帯——鞍を馬の背に固著させるやうに腹にかけて結びつける帯である。

※烏帽子　古、元服した男子の用ひたかぶりもので、もとは禮冠の下に被る頭巾であつたが、延喜以後、朝服以上には冠を用ひたから、平服の時に用ひることとなり、無冠の者は平時にも着用した。初めは黒い絹などを袋のやうに縫つた柔かなものであつたが鳥羽天皇以後は紙で作られ、漆を塗つて剛くし、位階等によつて形と塗りとに別があるやうになり、立烏帽子を本儀とし、折烏帽子とか揉烏帽子とかいろいろある。

※直衣　直衣は古、天皇を始め奉り、攝家、大臣等、貴い人々の通常服であつた。その製はほゞ袍に似て稍短く狭い。地質はしよら綾で、色は白、蝶の丸の紋様がある。裏は紫の平絹。老幼によつて濃淡が違

ふ。夏は紗の類で裏なく三重襷の紋様がある。下に單、下被、指貫を着ける。略服だから、敕許を得ないものはこれをつけて参内する事は出来ない。

※大紋の指貫　大きな紋様の織出してある指貫。指貫は正しくは指貫の袴といひ、袴の一種で、裾を糸で指貫いて足に括り窄めてはくやうに出来てゐる。

布袴、衣冠、直衣、狩衣等に著用する。

※さめやき入る　さやくと衣すれの音をさせて入る。

※世をへうするさま　源平盛衰記には「表する」とある。物々しい武裝に對して諷諫するやうな顔で、世はいかにも太平のやうに装束姿してゐるわい。

※内には　佛道の方では。

※外には　儒道の方では。

※面はゆう　面映くの音便。面目なく、逢ふのが恥かしく感ぜられたのである。

※障子　屋内の間と間とのしきりに立てる建具。衝立襖、格子、明障子(今のいはゆる障子)などの總稱。

※素絹の衣　單に素絹ともいひ僧服である。袖廣く丈長くて後に引き、裾に褶がある。もとは素絹(粗末な白い生絹)でつくつたものだが、後世は精好などを着るのにもあり、染色も宗旨、階級によつてちがふ。源平盛衰記にはこの所が「薄墨染の素絹の衣」となつてゐる。

※衣の胸を引違へ云々　衣の襟を幾度も掻き合はせて、胸板の金物をかくさうとするさま。

※宗盛卿　清盛の次子。二條、高倉兩朝に歴仕して治承年中權大納言、右近衛大將となつた。壽永二年内大臣となる。時に源氏大いに興り、義仲に追はれて

宗盛は爲す所を知らず、安徳天皇を奉じて、西海に逃れた。壽永四年、平氏大敗の後捕へられて鎌倉に送られ、遂に近江の篠原に斬られた。

※事の數にも候はず 大したこともない。いふにも足らない。

※法皇の御結構にて候ひけるぞや 後白河法皇のおたくらみであつたのであるぞよの意。

※さていかにやいかに さて、お前はどう思ふかと返事を促した語。

※あきれ給へば 當惑して居られると。思ひかけず重盛が泣いたので。

※邊地粟散の境 かたよつた地、粟粒のやうに小さい國。粟散とは佛經語で、古、印度にあつた數多の小さい國々の稱。小國の數多分立したのを粟を散らしたのに比したのである。

※天兒屋根命 藤原氏の祖。鎌足は命の二十三世の孫。命は神皇產靈命の御子。天照大神に奉仕し、後、天孫に従つて中國に降つた。中臣連の祖。

※御出家の御身なるに 原文にはこの次に「それ三世の諸佛、解脱幢相の法衣を云々。」とある。

※法衣 僧尼の著る衣服。衲衣、僧衣、法服、僧服等の稱がある。初めは三衣即ち袈裟のことをいつたが、後世我が國では袈裟以外の種々の僧服を稱するやうになつた。

※破戒無慚 佛教の戒を破つて慚づることのないのをいふ。破戒は受戒しながら身、口業を慎まず、戒法に違ふこと。無慚は大不善法の一、二十隨煩惱の一で、自ら罪を造りながら毫も恥ぢることのない心をいふ。

※候ひなんす 候ひなんとす。正にさうなるべき管

のものである。

※かた／＼恐ある申事云々 いろ／＼（父に對して）不謹慎な申條ではあるが。

※心の底に旨趣を云々 思ふ事をいはないで、心の底に残して置くべきでない、思ふことは皆申さなければならぬの意。旨趣は心に思ふむね——考。八坂本平家物語には「旁恐ある申事にては候へども、しばらく御心をしづめて、重盛が、申狀を、具にきこしめさるべうもや候らん、かつこは最後の申狀也。心の内に旨趣を残すべからず、まづ世に四恩候云々。」とある。

※四恩 佛道に於て、人のこの世に生れて受ける四つの恩をいふ。大乘本生心地觀經報恩品に「佛言、世間恩有三種、一父母恩、二衆生恩、三國王恩、四三寶恩云々。」とあり、釋氏要覽に「恩有四焉、一

父母恩、二師長恩、三國王恩、四施主恩。」とある。これを以て見れば、天地の恩といふのは後世に加へたものであらう。

※普天の下王土に云々 天下到る所、國王の地でない所はない。普天は天の地上をおほふかぎり——天下ちゆう。詩經、小雅北山篇に「普天之下莫不王土、率土之濱莫不非王臣。」とある。

※潁川の水に耳を洗ひ 高士傳に「許由耕潁水之陽、堯召九州長、由不欲聞之。洗耳於潁水濱。時有巢父、索澗欲飲之、見由洗耳曰、汚吾澗口、索澗上流飲之。」とある。潁川は支那、河南省登封縣の北なる嵩山から出て、安徽省に至つて淮水に合する川。

※首陽山に云々 周の武王が殷紂王を討たうとした時、伯夷、叔齊の兄弟が諫めて用ひられず、遂に周

の粟を食むを恥として首陽山に隠れ、蕨を採つて食ひ、遂に餓死した故事。史記に出てゐる。首陽山は支那山西省の西南端にあり、洛陽の西に當つてゐるので西山ともいふ。

※いかに況や ましてこともあらうに。勿論いふまでもないことであるが。

※先祖にも未だ聞かざつし 先祖にも未だ嘗てその位に至つた人のある事を聞かざりし。

※極めさせ給ふ 太政大臣といふ最高の官に達し給うた。

※蓮府、槐門の位 大臣の位。蓮府は王儉が、その邸に芙蓉(蓮)を植えてよく客を招いたので、時の人が儉の府(執務所)を蓮花池といつたといふ故事(南史所載)から出た語。槐門は、周の世に朝廷に三本の槐を植えて、三公(太師、太傅、太保)がこれに

面して坐したといふので、三公(太政大臣、左右大臣。又は左右大臣、内大臣)の異稱に用ひられ、轉じて一般に大臣の稱に用ひられるやうになつたもの。

※國郡半ばは一門の所領 平家物語卷一「わが身の榮花の事」の條に「日本秋津洲は僅かに六十六箇國、平家知行の國三十餘箇國、既に半國に超えたり。」

※田園悉く一家の進止たり 田畑、莊園のすべてが平家一家の支配の下にある。同書「わが身の榮花の事」に「その外、庄園、田畑、いくらといふ數を知らず。」と見える。田園は田地と莊園のこと。延いて領地、領域、または國土の意。進止は司配といふに同じ。進退の意で、その土地又はその役を司配すること。

※希代 稀代と同じ。世にもまれなこと。

※正八幡宮 八幡神を祀つた神社。八幡神は八幡様、

正八幡大菩薩等ともいふ。應神天皇の靈を祀り、古來弓矢の神として崇拜されてゐる。もと「やはたのおほかみ」といつた。伊勢貞丈隨筆に「正八幡宮は正眞の八幡大神宮といふ義なるべし。觀音は三十三身に變化するといふによりて、變化せざる觀音の正體を正觀音といふに同じ。」とある。

※それ日本は神國なり 北畠親房の神皇正統記の冒頭にも「大日本は神國なり。天祖(國常立尊)始めて基を開き、日神(天照大神)長く統を傳へ給ふ。わが國のみこの事あり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。」とある。

※非禮 原文には「神は非禮を受け給ふべからず。しかれば君のおぼしめし立たせ給ふ所、道理半ばなきにあらず。中にもこの一門は代々の朝敵を平けて云

々。」とある。

※無雙の忠 無雙はならびないこと。この上もない忠義。

※傍若無人 傍に人なきが如しの義。人を憚らず勝手に傲慢不遜にふるまふさま。眼中人なきさま。「傍若無人とも申しつべし。」の次に原文には「聖德太子十七箇條の御憲法に「人みな心あり。心おの／＼執あり。彼を是し、我を非し、我を是し、彼を非す。是非の理誰かよく定むべき。相共に賢愚なり。環の如くにして端なし。ここをもつて、たとひ人怒るといふとも却つて我が咎を恐れよ。」とこそ見えて候へ。」といふ文が入つてゐる。

※事すでに露れ候ひぬ 原文には「御謀反すでに露れさせ給ひ候ひぬ」となつてゐる。即ち法皇の平家討滅の御陰謀が露顯したとの意。

※ 仰せあはせらるゝ、法皇が萬事について御相談遊ばされた。

※ 君 法皇を指す。

※ 不思議 思ひもよらないこと。即ち平家討滅を企て給ふことを指す。

※ 思し召し立たせ給ふとも 御企てなさらうとも。

※ 所當の罪科 成親の行爲に相當する罪科。罪科はしおき、刑罰。

※ 退いて事の由を陳じ云々 相當の處分をした上

は身を退け謹んで成親を處罰した始末を奏上し。

※ 撫育の哀憐を云々 などで育てるやうに愛しいつくしむといふあはれみを、お施しになつたら。

※ 佛陀の冥慮 佛の御りやく。佛陀は梵語。正覺と譯す。佛教で正覺を得たものの稱。略して佛、または如來ともいふ。冥慮は神佛のおもはく。佛のみこ

ころ。

※ 感應 信心のほどが神佛に通すること。但しここでは信心といふよりも「まごゝろ」と解する方がよくあてはまる。

※ 君も思し召し直すこと 法皇も平家討滅の思召を翻し、御改心になること。

※ などが候はざるべき どうして御考へ直されぬことがあらうか。この次に原文には「君と臣とをくらぶるに、親疎わく方なし。道理とひがごとを並べむに、いかでか道理につかざるべき。」とある。

※ これは尤も君の御理にて候へば これは前の言葉を受けていつた言葉で、即ち、今度のこの事件は、法皇の御方に甚だ道理があるから（そして父清盛の方には些かも道理を見出すことは出来ないのであるから）といふ意。

※ かなはざらんまでも たとひ出来ないにしても——出来るか出来ないかはわからないにしても、とにかく——。

※ 敘爵 古、始めて從五位下に敘せられる——位を授けられることをいつた。源平盛衰記にはこの所が「始は六位に敘し、今は三公に到る云々」と見える。

※ 大臣大將 内大臣兼左近衛大將。左近衛大將は左近衛府（右近衛府に對し、皇居に近く伺候して守護に任じた武士、即ち近衛の官人を統べる官所）の長官。

※ かしながら 現代語の「かしながら」とは意味を異にする。この「かしながら」は、そのまゝにとか、すべてどかいふ意。

※ 千顆萬顆の玉云々 顆は玉又は木の實等を數へるに用ひる語。入は染物を染めるに染液に浸して染める度數に用ひる語。一入再入の紅にも過ぐとはその

色の濃いのをいふ。和漢朗詠集春の部に、菅原文時の花光水上浮序に「瑩日瑩風、高低千顆萬顆之玉、染枝染浪、表裏一入再入之紅。」とある句からとつたのである。約言すればここはその君の御恩の非常に重く著しいものであることを、千顆萬顆の玉にたとへ、一入再入の紅にたぐへたのである。

※ さすが以ての外の御大事 父の御威光はさることながら、さうはいふものの、しかし、私の方にも、大勢の軍勢が附きませうから、父上の御身に取つて、案外の大事になりませうといふのである。

※ 迷廬八萬の巔 須彌山の頂。迷廬は蘇迷廬の略。山の高さ八萬四千由旬といふ。大海の中に在つて金輪の上に據る。月日これに依つて回り、諸天これに依つて居る。七山七海環列し、その四面各一色で、東は黄金、南は瑠璃、西は白銀、北は水精。所在は



一世界の中央金輪の上で、六道四生、廿五有界皆こ  
こによつて作られるといふ。一由旬(梵語 Yojana)  
は六町一里として或は四十里、或は三十里、或は十  
六里などといはれてゐる。

進退これ谷れり 如何ともすることが出来ず、途  
方に暮れる義。詩經、大雅桑柔に「人亦有言、進退  
維谷。」

是非いかにも辨へ難し どうするのが是なのか  
とんと判断がつかかねるの意。

申し受くる所詮は 御願ひ申すとゞのつまりは。  
つまり御願ひ申すところは。

院參の御供をも云々 父の軍を率ゐて院に参り向  
ふ御供もすることが出来ず、又父の敵となつて院を  
守護することも出来ない(から)といふのである。

富貴といひ云々 以下、盛者必滅の理を説いたの

である。——院中をも守護し参らすべからず。」の次  
に原文には「されば、かの蕭何は大功かたへに越え  
たるによりて、官大相國に至り、劍を帶し、履をは  
きながら殿上へ昇ることをゆるされしかども、叡慮  
に背くことありしかば、高祖重う戒めて、深う罪せ  
られにき。かやうの先蹤を思へば、富貴といひ——」  
となつてゐる。

富貴の家には云々 源平盛衰記には「富貴之家祿  
位重疊。猶再實之木、其根必傷。」と見えてゐる。即  
ち富貴な上に更に祿位までも重なつてゐる家は、あ  
たかも一度實がなつた上に再び實のなる木が、きつ  
とその根が傷むやうに、必ず衰へ、滅びるものであ  
るといふ意。「見えて候」とは、ある典籍に記載され  
てあるといふこと。この文は、後漢書の「明德馬皇  
后紀」に、「常觀富貴之家、祿位重疊、猶再實之

木其根必傷」とあるのに據つた。祿位は俸祿(上よ  
り受ける給與)と位階(くらゐ)と。

命生きて 生きながらへて。

末代 末の代。末世。道德政治の頹廢して人心風俗  
の腐敗した世。

果報のほどこそ云々 拙い果報である。即ち薄命  
である。不運であるの意。果報は因果の應報。ここ  
はもちろん悪い方の應報をいふ。

御壺 御坪とも書く。殿中のあはひ、又は垣内の  
庭などの、一區になつた、つぼまつた地。

頼みきつたる 頼みきりたるの音便で、ひどくた  
のみにしてゐたの意。

世にも いかにも。誠に。  
それまでのことは云々 ここでは、法皇を傾けま  
ゐらすること——法皇の位まで奪ひ奉るといふやう

なことは、露ほども思つてゐないとの意。

ひがごと 僻事。實際に違つてゐること。道理にあ  
たらぬこと。

何とかし参らせ給ふべき どうしようと、お考  
なさるのでありますかの意。

つ立つ 突然たつこと。急に立ちあがること。は  
つと立つ。

けさよりこれに候ひて 今朝から引續きこの西八  
條の邸に留つてゐて。

餘りにひたさわざに云々 それでは餘りに一向  
きに騒ぎ立てるやうにも見えるので、一先づ邸(小  
松殿を指す)に引きとつたのだ。

院參の御供に於ては云々 入道殿の院參の御供  
をする場合には、先づこの重盛の首を刎ねられるの  
を見届けた後に行け。では皆の者随つて参れ。「人」

とは重盛に隨行して來た家來をいふ。

## 鑑賞

本文の中心は勿論内府の諫言にあるが、しかしその前後に於ける西八條邸の情景の變化や脇役清盛の心理の推移等の描寫は見逃すことの出来ない重大な役割を演じてゐる。

諫言に至つては、内府の熾烈なる忠誠、悲痛なる孝行の情が、その堂々たる論法と共に讀む者の胸にひし／＼と迫つて來る。先づ大きく一門の運命から説き起し「人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり」と強い一句で抑へつけ、次に太政大臣で出家たるものが、甲冑を著るといふ法があらうかと、眞向から打下し、ここでちよつと氣を落して、直言の辯明をし、少し入道の心が和いだ所で、さて開き直つて「世に四恩候」と淳々として君恩の忝けなさを述べ、平家一門が希代の朝恩を受けてゐるにも拘らず、猶戦功に誇るの傍若無人であると喝破し、更に進んで、君に對して益々忠勤を盡し、民を撫育したならば、必ず神佛の加護のあらん事を諭し、大義名分論から漸く情感に移り、父の謀叛に對する子としての苦衷を訴へ、遂に思ひ餘つて「申し受くる所詮は唯重盛が首をも召され候へ。」と血涙共に下る最高調に達してゐる。實に息もつかせぬ名調子で、内府の至誠もさる事ながら、また作者の筆の力も容易ならざるものである事を思はせられる。

## 資料篇

## 参考研究

保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記等の軍記物語は古來これを歴史の参考書として珍重したのであつた。けれどもこれ等の書は皆文學的の書であつて、決して眞正の歴史ではない。史學の新研究と共に、その史料としての價値は失はれたが、これと同時に文學的價値は一層増大したかのやうである。五十嵐力博士は新國文學史の中で「本來四篇の軍記物語は、いづれも文學たるには歴史過ぎ、歴史たるには文學過ぎるといふ傾きがある。」と、いはれたが、蓋し適評であらう。

軍記物語の諸篇、殊に「平家物語」が文學的に傑出せるものであることは、既に定評のある所であるから、ここでは問題にしない。吾人の新しき興味は、「平家物語」の記載と史實との相違點にある。史學の新研究によつて、従來の説は如何に變更されなければならないか。これは教材の取扱上にも影響を及す大きな問題である。吾人の常識となつてゐる清盛の專横、重盛の忠誠を、歴史専門家はどう見てゐるであらうか。廣島文理科大學教授栗田元次氏の説を聞くことにしよう。

清盛の專横、重盛の忠誠についても、舊來の傳を否定せんとする説がないでもない。清盛が專横であつたことは事實とするも、従來の傳は平家が亡び、源氏の世となつてから出來た書物の傳ふる所だから誇張もあらうし、清盛が太平御覽を朝廷に獻じ、宋と貿易を計り、地頭兵糧米等頼朝の先驅をなした等から見て、その識見の非凡を見るべしと

いふのである。又鹿ヶ谷事件の際、清盛が法皇をも押込めんとしたのを、重盛が、忠孝兩全から切諫したといふも、當時の記録に見えず、且清盛が法皇の御所に行つて、御近臣の處分の止むを得なかつたことを申して居る位だから、造り事であらうといふ説がある。これは學術上共に然るべく思はれるが、後に清盛が法皇を幽閉し、多數の公卿を流した事實は争はれないことであるから、彼の專横を打消すこととはならず、且重盛の生存中は、常に父の皇室に對する過激な行動を抑制したことも疑はれないから、教育上この重盛の忠諫や、その前提たる清盛の專横は、從來のまゝ傳へて置くべきであらう。

— 國史教育原論 —

## 一五 平家雜感

高山林次郎

### 解説篇

作

高山林次郎。評論家、思想家、文學博士。號は樗牛、明治四年一月山形縣鶴岡に生れた。幼時父の實家高山家に養はれて高山姓を稱した(舊姓齋藤)。七歳の時山形に移つて同地の小學校に入り、更に移つて中學は福島中學校を卒業した。次に仙臺の第二高等學校を経て、東京帝國大學哲學科に入り二十九年卒業後、第二高等學校に教鞭をとつたが、一年足らずで上京し、博文館に入つて雑誌「太陽」の主筆となり、傍ら帝國大學で日本美術史を、東京專門學校(早大の前身)では美學を講じてゐた。三十二年、文學博士の學位を授けられ、翌年春ドイツ留學の命を受けたが肺を病んで中止し、以來靜養に努めたが遂に全快せず、三十五年十二月二十四日相州茅ヶ崎の病院で永眠した。時に年僅かに三十二。著作は殆んど全部「樗牛全集」七卷(博文館發行)に收められてゐる。

教材

「世にも哀は平家とぞいふめる。誠にこの一門の盛衰を考ふれば心も言葉もなか／＼に及ばざりけり。」といふ文句に始まる「平家雜感」の末節を採つた。少年の耳に源平といへば、まるで平家を敵役のやうに考へ易い。ものを正當に

評價する習慣をつけるために本篇の如き史論も亦無用とはしないであらう。

指導篇

扱方

雅文を以て堂々たる論陣を張つたところ實に天下無雙である。所謂文語文ではない。平家物語流の和漢混淆の立派な雅文である。これを用ひて縦横に説きまくつてゐる。この種の美文が短命にして亡び、口語文に打克つことの出来なかつたのは一に不便といふことによるのみで、その藝術的價値、歴史的功績に至つては重要なものがある。大體、「一」は平家が武骨一邊でなくたしなみのあつたことを説き、「二」は平家が名節を重んじたことを説いてゐる。即ち「一」はゆかしさを、「二」は大義名文を敘べてゐるのである。

展開

「一」の第一節は「一」の序である。第二節は忠度のこと、第三節は經政のこと、第四節は源氏の梶原源太と比べて、敦盛のこと、第五節は源氏的那須與一の無情なこと。「二」の第一節は「二」の序、第二節は義仲の申入れを斷ること、第三節は太宰府に落行く時のこと、第四節は三種の神器のこと、第五節は「一」「二」全體の包括、結論である。

解釋

一

※文弱 文事にふけて、尙武の風が衰へ、情弱なること。

※誹る 悪しきまにいふ。けなす。

※優惰 文弱といふのと同じく、優雅な事にふけて尙武の氣衰へ、情弱となること。

※坂東武士 關東武士。源氏の武士をいふ。

※むくつけし ここは剛毅一點張りで、優美な點の少しもない意。「むくつけし」は醜くて怖ろしいのをいふ。

※心ゆくばかり 心を十分に惹かれて、うつとりとなる程、また満足のゆくほど。

※ゆかし 何となししたはしい。

※よしや たとひ。

※西海 西海道の略。西海道は八道の一で、九州及び

壹岐、對馬を包括する。

※藻屑 海中の藻などのくづ。「水屑」などともいふ。

※と果てぬともとなつて、死んでしまつても。「ぬ」は過去完了の助動詞。

※藻鹽草かきのこしたる歌 自分が書き残しておく最後の歌といつた意。「藻鹽草」は鹽を採る料に用ひる海藻。その海藻をかき集めるといふところから、多く歌などを書き集めることにいふ。「かき」に冠して枕言葉のやうに用ひられてゐる。

※見果てぬ夢 あわたしくも没落の悲運に際し、西海の藻屑とならうとする今、都にあつて世に時めき、この世を我が世と思ふばかりに享樂してゐた頃を思へば、それは夢であり、しかもすつかり終りまで見てしまふことの出来なかつた夢である。「夢」は榮華の意。

※なんぼう 何程。

※かの没落の忽劇 平家の都落を指す。「忽劇」はあ  
わたゞしくせはしいこと。

※五條の三位 藤原俊成をいふ。

※薩摩守 平忠度をいふ。

※上には 身の上——境遇。……に就いてはといった  
くらゐの意。

※情 風情、おもむき、あぢはひ。

※覺えずや 思はれるではないか。この「や」は反語の  
助詞で、意味を強めてゐる。

※經政 平經政。參議經盛の子で皇后亮但馬守となつ  
た。壽永三年一の谷が陥るに及んで、大藏谷を過ぎ  
莊高家に追はれ、終に免れることが出来ないのを知  
つて自殺した。

※永代の名器 遠い昔から永く承け傳へられて來た

名器——青山の琵琶を指す。「名器」は名高い器物。

※この身と共に云々 自分と共に失つてはならない。  
※鐵衣 鎧。

※青山の琵琶 この琵琶の由來に就いては、平家物  
語卷七「青山の沙汰の事」に見える。即ち「昔、仁  
明天皇の御宇嘉祥三年三月に、掃部の頭貞敏（鎌足  
五世の孫）渡唐の時、大唐の琵琶の博士廉承武にあ  
ひ、三曲（三つの祕曲）を傳へて歸朝せしに、その時  
女象、獅子丸、青山三面の琵琶を相傳して渡りける  
が、龍神や惜しみ給ひけん、波風荒く立ちければ、  
獅子丸をば海底に沈めぬ。今二面の琵琶を渡いて、  
我が朝の帝の御寶とす。」といふので、村上天皇の應  
和の頃に、三五夜中の新月の色白く冴えたのに乗  
じて、帝がこの青山の琵琶をお弾じになつてゐると  
廉承武の幽靈が出て來て、三曲の中一曲を傳授する

事を忘れたからといつて、これを帝に傳授し奉つた  
といふやうな話も遺つてゐる。で、「その後は君も臣  
も、恐れさせ給ひて、遊ばし弾くこともえさせ給は  
ざりしを、仁和寺の御室の御所へ參らせ給ひたり  
しを、この經政最愛の童形（經政は後白河法皇の第  
四皇子守覺法親王の近侍としてお仕へしてゐた）た  
るによつて（十七の年宇佐の敕使を承つて下る時）下  
し賜はられたりけるとかや。甲は紫藤の甲、夏山の  
峯の緑の木の間より有明の月の出でけるを、撥面に  
かゝれたりける故にこそ、青山とは名づけけれ。玄  
象にも相劣らぬ希代の名物なり。」といふのである。

※仁和寺の御所 仁和寺は京都府右京區花園の御室  
にあり、大内山仁和寺、又は御室御所といひ、眞言  
宗御室派の大本山、法皇諸門跡中の首位にある。光  
孝天皇の敕願によつて、仁和二年に造營の工を起さ

れたが、事業半ばで崩御遊ばされたので、宇多天皇  
がその御遺志を繼がせられ、同四年に竣工した。宇  
多天皇は御讓位の後、この寺で落飾し給ひ、御室を  
當山に營んで法敕の御所とされ、親ら眞言宗の大阿  
闍梨位に上り給うた。御室御所の稱も、御門跡の稱  
もそれから起つたのである。その後皇子、皇孫の法  
統を繼がれること三十世、明治維新に純仁法親王（故  
小松宮彰仁親王）が敕命を奉じて復飾されるまで、  
法統一千年に及んでゐる。

※參りぬ 經政は仁和寺の御所に引返して、守覺法親  
王に見參して、「赤地の錦の袋に入れたりける御琵琶  
」を御前にさし置き、「先年下し預つて候ひし青  
山持たせて參つて候。名残は盡きず存じ候へども、  
さしものわが朝の重寶を田舎の塵になさんことの、  
口惜しう存じ候へば、參らせおき候。もし不思議に

運命ひらけて都へ立歸ることも候はゞその時こそ重ねて下し預り候はめ。」と申し上げた。その時法親王のお詠みになつた歌——「あかすして別るゝ君が名残をば後のかたみにつゝみてぞおく」經政のお答へした歌——「吳竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬ宮のうちかな」大納言法師行慶の詠んだ歌——「あはれなり老木若木も山櫻おくれさきだつ花はのこらじ」經政の返事——「旅ごろも夜なく袖をかたしきて思へばわれは遠く行きなん」

※津の國 攝津の國。

※一の谷 神戸市須磨區西南部の谷。源平會戰の古戰場で、前は海、後は山に狭められた長さ三十町程の地域で、千鳥川、堺川を東西に控へて、一の谷、二の谷、三の谷に分れる。

※今日ぞ 壽永三年二月七日。

※はやり男 勢鋭い血氣の若者。ここは熊谷直實の子の小次郎直家と、平山武者所季重を指す。

※一二のかけを争ふ 「俺の方が一のかげだ。」「いやお前こそ二のかげだ。一のかげは俺だ。」と争つたこと。「かけ」は戰陣で單身敵陣に向つて突進すること。「一のかげ」は即ち最初に突進すること——先陣、さきがけ。この争は前記の熊谷小次郎と平山武者所との間に起つたもので、熊谷は先に進み寄せたのだけれど、木戸を開いてなかつたから、域中に驅入らず、平山は後から驅けつけたが、その時敵が木戸を開いたので域中に驅入つた——そこで二人の間に一二のかけの争が起つたのである。

※一管の樂しみを恣にせし 笛を吹くといふ樂しみを飽くまでした、心ゆくまで笛を吹いて楽しんで。管は笛の類をいふ。管絃樂の管である。

※上臈 貴人。中臈、下臈の對。

※鎧の袖に笛挿みし云々 平敦盛をいふ。この笛は「祖父忠盛の笛の上手にて、鳥羽の院より下し賜はられたりしを、經盛相傳せられたりしを、敦盛笛の器量たるによつて、持たれたりけるとかや。名をば小枝とぞ申しける。」熊谷直實が敦盛を討つた時、鎧の袖のこの笛を見て無常を感じ、被が出家の遠因をなしたのは有名な話である。

※梶原源太 源頼朝の臣、梶原景時の長子。壽永三年

宇治川の合戦に佐々木高綱と先陣を争つたことは周知の事であらう。同じく壽永三年一の谷の戦に父景時、弟景高と奮戦したが、父弟に離れて、馬を射られ、兜を打落され、五人の敵に取籠められて大童になつてゐた所へ、二度のかけして來た父に見出され、父子して五人の中三人を討取り、二人に手を負はせ

た。景季が簾に梅が枝を挿したのは、この時の事で、源平盛衰記には次のやうに見えてゐる。「詩歌管絃は公家仙洞のもてあそびもの、東夷いかでかしきしま、なにはづの言葉を存すべきなれども、梶原は心の剛も人に勝れ、すきたる道も優なりけり。咲き亂れたる梅が枝を簾に副へてぞ挿したりける。かゝれば花は散りけれども、匂は袖にぞ残るらん。吹く風を何いとひけん梅の花散りくる時ぞ香はまさりける

といふ古き言葉までも思ひ出でければ、平家の公達は花簾とて優なり、やさしと口々にぞ感じ給ひける。」

※二度のかけ これは平家物語に、「梶原が二度のかけとはこれなり。」とある、その「二度のかけ」の意味ではなく——（あれは景季の父景時である）、生

田の森で河原太郎、河原次郎の兄弟が一のかけをした、その次に源太等が突進した、——それをいふのではなからうか。

※かざす 草木の花や枝などを髪、又は冠に挿むこと。さうした花や枝を「かざし」といふ。

※美譚 美談。

※薄化粧 「熊谷、波打際にておしならべ、むす組んで、どうと落ち、取つて押へて首をかゝんとて、兜をおし仰けて見たりければ、薄化粧して鐵漿黒なり。わが子の小次郎が齡ほどして、十六七ばかりなるが、容顔まことに美麗なり。」（「敦盛最後の事」——平家物語）

※氣にはやる 氣のいらだつ。

※長汀の煙波 長々と續いた水際——濱邊におぼろく——と瀛をこめて打寄せる波。

※もとの如く 源氏の押寄せない前のやうに——いつもと變りなく。

※あはれ ああ。ここは感動詞として用ひられてゐる。

※風雅 みやびたこと。卑俗でないこと。

※五衣 五枚がさねの衣。しかし、これは全部重なつてゐるわけではなく、袖口や裾などが五枚襲風にくつてあるのである。

※緋の袴 眞紅の袴。

※女房 昔、禁中に奉仕して曹司（部屋）を興へられて住した女官。

※譽の弓勢 名譽を得た弓を張る力量。弓勢は弓を張つて射當てる力量。

※相和せしが 相和して喝采したが。

※感に堪へずや云々 感歎の極、もう居ても立つて

もをられないやうになつたのであらうか。

※平家の侍の云々 平家物語には、「あまりの面白さに感に堪へずや思ひけん、船の中より齡五十ばかりなる男の黒革緘の鎧著たるが、白柄の長刀杖につき、扇立てたる所に立つて舞ひすましたり。」とある。

※舞ひすます 舞ひ澄ますで、靜かに舞ふ意。

※無慚 もと佛教語で、罪をつくつて自ら慚ぢぬことであるが、轉じて残酷なことをいひ、又この場合のやうに、いたはしいことをいふ。

※眞倒様に射仕しけり 平家物語に、「伊勢三郎義盛、與市が後に歩ませ寄つて、「御説であるぞ、これをもまた仕れ。」といひければ與市今度は中差取つて番ひ、よつびいてひやうと放つ。舞ひすましたる男のまつたゞ中を、ひやうつばと射て、船底へ眞倒様に射仕す。あゝ射たりといふ人もあり、いや／＼情

なしといふ者も多かりけり。平家の方には靜まり返つて音もせず、源氏はまた箆をたゞいてどよめきけり。」とある。

※東えびす 東夷。東國に住んだ蝦夷だが、轉じて一般に東國人の無骨なのを嘲つていふ語。坂東武士。是非もなき しかたのないことだ。やむを得ないことだ。

二

※大義名分を執りて動かす 君國に對する臣民の節義と分限とを飽くまで固く守つて、苟くもそれに悖らない。

※兵衛佐 源頼朝は保元三年皇后宮少進に任じ、藏人を経て、從五位下右兵衛佐に任ぜられた。兵衛佐は兵衛府の次官。兵衛府は皇居の關門を禁衛し、宮闕に宿衛し、朝儀の際、儀仗を備へ、行幸に供奉して前

後を分衛し、左右京内を巡檢する武官の官所。左右に分れ、各督、佐、大少の尉、志等の職員がある。

※疎まれ 親しまれず、忌み嫌はれ。

※東國の討手 平家物語に、「さる程に鎌倉の前の右兵衛の佐頼朝、木曾が狼藉しづめんとて、範頼、義經に六萬餘騎を相添へてさし上せられけるが、都には軍出で来て(いはゆる法住寺合戦)、御所、内裏みな焼き拂ひ、天下暗闇となりたる由、聞えしかば、さうなう上つて軍すべきやうもなしとて、尾張の國熱田の邊なる所にぞましましたしける。」とある。

※強ひて院宣を云々 源平盛衰記には、「同(壽永三年正月)十一日、左馬頭義仲、征夷將軍たるべき由宣下せらる。これは木曾ひたすら荒夷にて、禮義を亂り、法度を失つて、心のまゝにふるまひければ、必ず洛中にして僻事出で來りなん。されば東國

の武士替り入らんまでの御はからひなりけり。これをば木曾いかでか知るべきなれば、たゞ今亡びんずる義仲が大いに畏まり喜びけるこそ哀なれ。」とあつて、事實は、法皇の方から進んで院宣をお下しになつたのである。「院宣」は上皇、又は法皇の宣旨をいふ。

※孤軍 身方少く、應援もない軍隊。

※勝算 勝利を得る見こみ、又は謀策。

※合體して兵衛佐を討つべき由云々 「木曾、西國へ使者を立てて、急ぎ上らせ給へ、一つになつて關東へ馳下り、兵衛佐討つべき由、いひ遣したりければ、大臣殿(宗盛)を始め奉つて一門の人々は皆喜ばれけれども、新中納言知盛の卿の意見に申されけるは——(平家物語)

※世は季に云々 衰運になつたといつても。

※語らばる 説かれて、仲間に引き入れられる。

※十善の帝王 前世に十善を修めた報によつて、帝王の位に即くべく生れ給うたといふ佛者の説に基づいて、天皇の御事を申し上げる語。十善とは十惡を犯さないこと。即ち不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪慾、不瞋恚、不邪見である。この天皇は第八十一代安德天皇を指す。

※帶して 持つて。たづさへて。

※わたる ことは彼方より此方へ來り著く意。お出でなさる。

※軍門に降る 「軍門」は軍營の出入口。そこに來て降参するといふので、戰に敗れて降参するのをいふが、ここは單に降伏する意。

※東國征討 源氏征討である。

※亡落の輩 亡滅に瀕し、没落してゐる者ども。

※ふさはざるや ふさはしくない——似合はない堂堂たる言辭だらう。

※人に乏し 有能の士、策士に乏しい。

※一時の權變を弄びて 名分などを無視して、たゞ一時の乘すべき機會を促へて、それに應じて縱横に計をたくらみ……。『權變』は場合に相應したはかりごと。

※頽勢を廻らす 衰へた勢を、もとのやうに盛んな勢にまで盛り返す。

※成敗の數を顧す 成功とか失敗とか——さういふ結果を無視し、勘定に入れない意。「數」はなりゆきといつたやうな意。

※偏に利害の眼よりすれば 利害の上ばかりから觀察すれば。



遷<sup>うつ</sup> 迂闊な事。事情にうとく、心の行きとどかな  
いこと。

遂<sup>つい</sup>かくて亡びんは云々 このやうに堂々たる態度を  
以て滅びるのは恥を甘受して生きながらへるよりは  
どれ程か美しい事であらう。

遂<sup>つい</sup>太宰府 筑前國(福岡縣)筑紫郡にあつて、九州、及  
び西海道を總監し、外寇を防備し、外交のことを掌  
つた官衙。ここは官衙ではなくて、その所在地をい  
つてゐる。

遂<sup>つい</sup>使して申しけるは 平家一門に使を遣つて申しけ  
るはの意。

遂<sup>つい</sup>重代の芳恩 先祖から代々受けた厚い御恩。平家  
物語には「かの緒方の三郎は小松殿の家人なり。」と  
ある。

遂<sup>つい</sup>黙し難し そのまゝにしておきにくい。

遂<sup>つい</sup>平大納言 頭註参照。「大納言」は、太政官の次官で、  
天皇に侍して政務に参し、奏宣、獻替のことを掌つ  
たもの。

遂<sup>つい</sup>衣冠束帯 衣冠は袍を着、冠を被り、指貫をはく。  
束帯は正式の装束(参朝、公事、大饗等晴の儀式に  
用ひる)で、袍を着、冠を被ることは衣冠と同じだが  
なほ石帯、下襲、表袴、劍、笏、沓など、すべて取  
揃へて着用する。で、「衣冠束帯して」などといふの  
は勿論をかした語で意味をなさないが、作者は單に  
正装しての意に用ひたのであらう。平家物語には、  
「平大納言時忠の卿、緋緒くゝりの袴、絲葛の直垂、  
立烏帽子にて」とある所を以て見ると、時忠のその  
日の装束は、實は衣冠でも束帯でもなかつたのであ  
る。

遂<sup>つい</sup>天神四十九世の正統 平家物語には、「天神」

が「天孫」になつてゐる。そして當然ここは「天孫」と

しなければならぬ。「天神」は天照大神、「天孫」  
は瓊々杵尊である。「世」は相續上に於ける父子の順  
序をいひ、「一世」といへば、たとへば父ならば父の  
一代をいふ。「天孫四十九世の正統」とは、瓊々杵尊  
以來、ずつと父子相承けて來て四十九世に當らせら  
れる正しい皇統の意。いふまでもなく御兄弟が前後  
して皇位にお即きになつたのは一世と見なしての勘  
定である。

遂<sup>つい</sup>我が君 安徳天皇。

遂<sup>つい</sup>逆亂 反亂といつても同じ。

遂<sup>つい</sup>皆内様へこそ云々 平家の取なしで、九州の人た  
ちをばみな朝廷に(官吏として)召されたことだ。  
「内様」は禁裏方、朝廷方。「召されしか」の「しか」  
は過去の助動詞「き」の已然形。「こそ」に對する結

び。

遂<sup>つい</sup>下知 指圖、命令、指揮。

遂<sup>つい</sup>奇怪至極 又は「キッククワイシゴク」と讀む。極め  
て心難得く、責むべきこと。

遂<sup>つい</sup>院宣屋島に云々 院宣(いはゆる屋島院宣)が屋  
島に下つたのは、壽永三年二月二十八日のことであ  
つた。院宣の内容は——「一人聖體、北關の九禁を出  
でて諸州に幸し、三種の神器、南海四國に埋れて數  
年を経、最も朝家の數、亡國の基なり。抑よかの重  
衡の卿は東大寺焼失の逆臣なり。須く頼朝の朝臣申  
し受くる旨にまかせて、死罪に行はるべしといへど  
も、ひとり親族に別れて、既に生捕となる。籠鳥の  
雲を戀ふる思、遙かに千里の南海に浮かび、歸雁友  
を失ふ心、定めて九重の中途に通せんか。然ればす  
なはち三種の神器、都に返し入れ奉らんに於ては、

かの卿を寛宥せらるべきなり。てへれば(といへれば)院宣かくの如し、依つて執達件の如し。壽永三年二月十四日、大膳の大夫成忠が承り、謹上、前の平大納言殿へ。(平家物語)

※重衡を放ち還さん この時のことについては、詳

しくは、平家物語卷十「内裏女房の事」を参照。

※請文 仰を承つた旨を記した文書。院宣が屋島に下

り著いた時、「二位尼は泣いて、「たゞわれに思ひ許して、三種の神器の御事をよきやうに申して都へ返し

入れ奉らせ給へ。」といったが、宗盛、知盛等が反対

したのである。平家物語卷十「請文」を参照。

※謹みて承り畢んぬ 謹んで確かに承り申しました。「畢んぬ」は「をはりぬ」の音便で、確かに済ませたの意をあらはす時に用ひる慣用語。

※宥恕 寛大に取扱ひ、ゆるして責めないこと。

※東夷北狄 「東夷」は關東の頼朝、「北狄」は北國の

義仲を指す。東夷、北狄は南蠻、西戎に對する語で、もとすべて支那化外の民をいふ。

※行幸 天皇が外出し給ふこと。天子の御車の到る所

は皆幸福を蒙るとの意。いでまし、又はみゆきとも

訓む。單に幸、御幸とも書く。けれども、「御幸」

は後世上皇に限つて用ひられる。

※還幸 天皇が行幸なされた所からおかへりになること。還御。

※逆賊の裔 「裔」は子孫、後裔。「請文」の原文には

「就中かの頼朝は去んぬる平治元年十二月、父左馬の頭義朝が謀叛によつて、既に誅罰せらるべき由、頻りに仰せ下さるといへども云々。」となつてゐる。

※鴻恩 大きな恩。

※干戈を弄ぶ 筋みちも立たないことに軍兵を繰出

して戦をはじめ。

※神罰やがてその身に云々 そのうちに神罰を身に受けるであらうと思はれる。この「やがて」は

普通の意味に従つて、そのうちにと解してよい。

※君にも 後白河法皇にも。

※累代 代々。

※亡父 清盛。

※與す 仲間となる。

※武運 武士、又は武事の運命。

※高麗 昔、朝鮮にあり、新羅、百濟と鼎立してゐた

國。太祖が神聖王國を建ててから三十四代四百五十六

年で、我が紀元二〇三四年に亡んだ。ここは廣く

朝鮮の意に用ひてある。

注意

全篇が、強い感動でもつて、ひた押しに書きとほされてゐる。その情熱！ その覇氣！ それにまづ我々は壓倒さ

れてしまふのである。觸れるところ、石をも金をも溶かさないうちは置かないやうな情熱は、正しく樗牛をしてあれほどの名聲を得させた唯一無二の武器であつたらう。美文、妙筆、——我々が樗牛の藝術から汲みたいものは、そんなものではない。たゞ情熱である。烈日のやうな、いや夕陽のやうな、爛々たる情熱である。彼は理智の人ではなかつた。理智は彼の求めるところだつたかも知れないけれど、彼はどこまでも、感情生活に終始した人であつた。憧憬、渴仰、欣求、——言葉はいろ／＼である。が、要するに彼の生活は、「涙の生活」であつた。最も深き意味に於ける涙脆さ、眞の詩人だけが享受する「涙脆さ」——それを十分に享受することを得た樗牛は、そのゆかしい、こまやかな情の向ふところ、自己をも他をも、赤々と胸の火の中に焼いてしまはずにはゐられなかつたのである。我々は、これを安價なセンチメンタリズムと同一視してはならない。それは、青年子女の心胸によく見る、乾かせば乾かした方が眞の光を放つやうな「涙」ではないのである。

## 一六 みとり日記

小林 一茶

## 解説篇

## 作者

小林一茶。通稱彌太郎、寶曆十三年信濃上水内郡柏原に生れた。三歳の時生母に別れ、祖母の手に育てられたが、八歳の時繼母が來、十歳にして異母弟仙六が生れてからは、繼母の白眼に射すくまれながら育つた。十四の時、祖母に死別してからは父の考で江戸に送られ、漂泊生活の第一歩を踏み出した。江戸に出てからは俳諧を其日庵素丸に學び、後、夏目成美等と交つた。その後五十歳まで孤獨放浪に費し、五十二歳にして初めて妻を迎へ、故郷に家を成したが、その四男一女は皆夭折し、六十歳の時には妻に死なれ、再度の妻には置去りにされ、三度目の妻を娶つた翌々年、即ち文政十年十一月、六十五歳で歿した。その俳趣は洒脱で語句は單純、しかも中におのづからなる諷刺と滑稽を含んで、独自の境地を持つてゐる。著に「おらが春」・「七番日記」・「八番日記」・「九番日記」・「三韓人」・「株番」等、後人の編に「一茶發句集」がある。

## 引用書

この日記は一茶の「父の終焉日記」から採録したものである。長年の漂泊から戻つて父の許にしばしの安らひをし

てゐた一茶が三十九歳、享和元年四月二十三日の事、父は裏の畑に出て茄子苗の手入などしてゐたが、突然傷寒を發してその場に昏倒した。この事件から書出したのが「父の終焉日記」であり、翌月五月二十三日、父の葬式を終つた記事で筆を止めてある。なほ資料篇参照。

教材

本課には、四月二十三日、二十五日、五月三日、四日、七日、十日の六日分を掲げた。しゅん外れの梨が食べたいといふ父の望みによつて一茶が八方奔走することが書かれてゐる。一茶が單に父の病の看護をしたといふのみならば何でもないが、父一人子一人といふ悲しい境地にあつた一茶が、繼母と異母弟との間にはさまつて、苦しんでゐる様が、實に身近に感じられるので、なほのこと本課の文は強く同情を喚起する。

指導篇

扱方

地上に昏倒してゐた父を見出した一茶の驚愕、自ら悩むよりも苦しいといふ看病の告白、病人に食べさせたいとて有りもしない梨を求めて泣き歩く心持、記録の悉くが實感を以て、吾人の胸に惻々としに迫つてくる。表現は素朴であり、敘述は簡單であるのに、而もかくまで人の胸に迫り來るのは、全く行文の間に、親を思ふ至情がにじみ出てゐるからである。親子の情ほど美しいものはない。純粹であるが故に、何人をも文句なしに感動せしめるのである。一

茶ならずとも、親の臨終の時には孝行を盡すと思ふ者もあるであらうが、もはやその時は孝行の終りである。健全な両親を持つ者はその幸福に感謝し、平生孝養を盡さなければならぬ。さもなければ、後に風樹の歎があるであらう。一茶の至情に感動せしめると同時に、ここに思を及させたい。

展開

- 四月二十三日——父の發病當時の様様。
- 同 二十五日——病狀の重くなる經過。
- 五月三日——名醫を迎へたが、やはり見放され、一茶の落膽する有様。
- 同 四日——稍小康を得て、ほつと安堵した時、始めて時鳥の初音に氣がついたこと。
- 同 七日——食餌に無理をいふ病人をいとほしがること。
- 同 十日——病人がありのみを食べたいといふので、求めに善光寺まで行き、街中探し求めたが、遂になく、失望落膽して歸る顛末。

解釋

※いかなれば——どんな譯があつてか。どうして。——  
 ※あさましき所——ここはむさくるしい所。土の上に——  
 ※蓬が下の土云々——父がなくなれる前兆であつたのだとは愈々父の死に際會して思ひ當つたの意。

※心地惱ましよう云々 ほんの少し心持が悪いと仰せられてゐたのに。

※發熱さかんにして 四月二十六日の記事によると

「野尻の里迅積を請待して診せしむるに、脈は内に沈みていはゆる陰生の傷寒なれば」とあるのを見ても、今のチフスに當つてゐる。

※魂を消す びつくりすること。魂げる。

※せんすべなく 施す術なく。何とも仕方なく。

※重湯 飯粒のない粥。飯の汁。

※自ら惱むより云々 自分で惱むよりも、心が一層苦しかつた。

※迅積 頭註参照。

※己がさじにては云々 自分が醫藥調合の秘術をつくしても藥効がなからうと語つたので。醫師は草根木皮等を粉にしてさじで加減して進めたので「さじ」

で醫療を意味してゐる。例、「さじを投げる」

※諸天應護 天上界の諸佛諸菩薩の加護御利益。

※憐れみを請はん なさけにすがらう。

※宗法 宗旨のおきて。宗旨違ひのことはしてはいけないと止められたことをいふ。

※招かまほしく 招きたいと思つて。

※とみに 急に。急いで。

※玉の緒の云々 今にまだ餘命のあることならば、

この度は全快して達者になつて下さいと。

※萬づに一つ 萬が一つにも。絶望のさまをいふ。

※咽に通ふを力に 湯水だけが辛うじて咽を通るのを唯一のたよりとして。

※たうべたき 何か食べたい。

※よべ 昨夜。

※かたくり 片栗は百合科の多年生草本。山野に自

生する。その地下莖から製した澱粉を熱湯で溶かして飲料とする。

※快氣 病氣がなほること。

※雨雲も云々 雨をふくんだ黒雲も四方に飛び去つて、この五月雨の頃としてはこの上なく珍らしく晴れて。

※をり得顔に云々 自分の時節であるよといはぬばかりに、時を得て今を盛りに鳴くさまをいふ。

※この鳥云々 この時鳥はもつと以前から啼いてゐたのであらうに、自分は父が突如病にたふれてからは、夜晝の別なくたゞ一心に看護してゐたので、氣も狂はんばかりの心配ごとのみ多く、今日始めて聞いたやうな氣がする。

※時鳥われも云々 夏の句。今日は空よく晴れて時鳥が氣持よささうに朗らかに啼いてゐる。おい、時

鳥よ、お前ばかりかこの一茶も今日は氣分の晴れ晴れたしたよい日であるぞ。

※夏の日の云々 夏の日長を何の爲すこともなく無聊で居られましたので。

※穀のたぐひ云々 米麥の類をさう／＼思ふやうには好まれなかつたので。

※みすゞ刈る 信濃に冠する枕詞。

※むづかる 子供がすねて無理をいふやうに、青梅が食べた／＼と父がもだえたことをいつてゐる。

※毒斷のなき人 服藥等のさはりとなる爲に、あれは悪い、これはよくないと食を慎むことのない人。即ち健康な人のこと。

※うつら／＼ 睡氣を催すさま。うと／＼。

※あぢきなし ここはなさけなしの意。

※ありのみ 梨のこと。音が無しに通じるので忌んで

反對に有りの實といふ。

※ゆかり　よるべ、縁者。知り合ひ。

※心當り　あの家ならあるだらうといふ思ひあたり。

※はた山にあるからに　附近の山にあるから（ある

ために）。柏原の地は、海拔七八〇米からの高地であ

つて、この高原は西の方約七軒のところに黒姫山そ

れから飯綱山が聳え、而してその末は越後路の高山

が連なつてゐるので、四月の末に残雪がそれらの山

山にあるのをいつた。

※春を残して　遅れ咲きの花は春の名残をとどめて

といふ意味である。

※こよなく時めく空　この上もなくよく晴れた空。

「時めく」とは時にあつて榮えるといふこと。

※卯の下刻　今の午前七時頃。下刻は、時を三分して

上中下に分つた最後の刻。

※御佛の淨土　善光寺は阿彌陀如來の在す樂土であ

るからかういつた。

※肆の軒を争ひ　商店が所せましと肩を比べて並ん

でゐること。

※幌は風に翻り　町家ののれんが風にはた／＼と揺

れてゐること。

※ある程の　ありとあらゆる。ある限りの。

※悲しさは云々　悲しいことには梨の半べら一つさ

へあるといはなかつた。いはんや一個をやの意であ

る。

※皇天　上帝、天の神をいふ。

※一世　この世。現世。

※いづち　いづこに同じ。

※薬ばし　薬でも……。

※とやせん云々　あゝしようかかうしようかと心を

決しかねてぐ／＼してゐる中に。

※白雲のよすが云々　根なしごと（根據のない出た

らめ）といふ爲の序詞に、白雲が大空にあてもなく

ふわ／＼と浮いてゐるといふ修飾を用ひたのであ

鑑賞

「夏さへ寂しき山國なりき。」と一茶自らいへる如く、寂しい山國の出來事である。そして先づ一茶の純心に打たれる。四十に近い一茶が親に對する子としての子供らしい感情に。それから繼母、義弟によつて作られてゐる家の内の暗澹たる空氣に眉をひそめるであらう。その間に立つてゐる一茶の憂悶と意力とのいたはしさが「日記」を通じて涙のにじむやうに、また血のにじむやうに出てゐる。これは一人間の手記として読んで感動させられ、また考へさせられるものである。一篇の小説、戯曲に仕組まれる事も出來さうな内容が「日記」として書かれてゐる爲に、一層生々しく、一層眞實に感ぜられるのであらう。

資料篇

参考文献

一茶の「父の終焉日記」は、荻原井泉水氏の校訂で、岩波文庫からも出てゐる。同書には井泉水氏の手についた解

題がついてゐるが、それは本課の参考になる點が多いと思ふので、左に引用することにした。

一茶の書いたもので一番有名なのは『おらが春』と『七番日記』である。これ等は一茶が晩年に近い心境の記録である。その他『八番日記』『九番日記』『株番』『我春集』などいふものも亦、何れも五十歳近くなつてから筆をとつたものである。一茶が少年壯年の頃の生活を偲ぶべき資料は殆んどないのである。『おらが春』にある――

親のない子はどこでも知れる。爪を啜へて門に立、と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に踞りて、長の日をくらしぬ、我身乍らも哀なりけり。

我と来て遊べや親のない雀

六歳 彌太郎

幼年時代の一茶の心持はこれに依り充分察せられもする。此雀の句は六歳の時の作でなく、後年その頃を思ひ浮べて作つたものである。さて此六歳から三十代までといふものがどうも研究上の暗黒時代である。

元來一茶は三歳の時生母を失ひ、祖母の貰ひ乳に依つて養はれた。八歳の時繼母が出来、十歳の時異母弟仙六が生れた。その頃から其母の一人の子に對する憎愛が明らかになつて來た。一茶が屢と書いてゐる「まゝ子一茶」といふ氣持が強い根を張るやうになつたのである。十四歳の時、一茶を常に庇護してゐた祖母が六十六歳を以て歿した。一茶は江戸へ出される。それから江戸で無職放浪の生活をしてゐたが、その間に俳諧を學び、それに依つて地方の同好者を頼つて一日一日を送つてゐたものと思はれる。三十歳の時江戸を發ち、京都から山陽道を経て九州に渡り、又四

國に渡つて歸京した數年間の紀行が残つてゐる。この間かなり風交の範圍も廣く、既に一かどの俳人として通つてゐた様である。

享和元年、三十九歳の春、久しぶりで柏原の家に歸省した。間もなく父が急病で卒倒する『父の終焉日記』は其日から臨終の後まで約四十日間の日記なのである。手記としては關西の紀行が是に先立つて書かれたものであるが、當時の一茶の生活と心境とを記録したものとしては、この『父の終焉日記』こそ最も早期のものとして珍らしく、又其後の彼の日記は概ね備忘的であり、輪郭的の記述に留まるけれども、これは微細に互つて己れの氣持を吐露してゐる。その點で唯一のものとしてめづらしいのである。

一七 ほととぎす (俳句)

解説篇

作者

素堂——山口氏。通稱官兵衛。名は信章。字は子晉、また公商。別號は今日庵、其日庵、蓮池翁、素仙堂、葛飾隠士等。初め來雨、後來雪、更に素堂と改めた。甲州の郷士で、江戸に往來して、林春齋に儒學を受け、又京都に行つて、書を持明院家に、和歌を清水家に、連俳を宗因及び信徳に、茶道を今日庵宗丹に學んだ。甲州の代官櫻井政能に招かれて、屬僚となつたが、數年後致仕して、江戸に出で、東叡山下に住し、後更に葛飾郡阿武に移つた。蕉門の外様格として畏敬せられ、又葛飾風の開祖と仰がれた。享保元年八月十五日歿、年七十五。著に「とくく」の句會」等がある。

蕉村——「櫻咲く日本よ」の解釋の項参照。

文章——内藤氏。通稱林右衛門。尾張犬山侯の重臣であつたが、家を異母弟に譲つて、熊野山先聖寺の玉堂和尚について禪を修め、又芭蕉の門に入つて俳諧を學び、近江粟津の龍ヶ岡に佛幻庵を結んで住した。寛永元年二月二十四日歿、年四十三。著に「ねころび草」があり、蝶夢編の「文章發句集」がある。蕉門十哲の一人。

蓼太——姓は大島、名は陽喬、通稱平八、別號空摩居士、宜來、老馬等。信州寢覺の里大島村に生れ、江戸に住

した。雪中庵二世吏登の門人で、雪中庵三世を嗣いで、宗匠となつた。門弟三千に餘つたといふ。又白隱禪師に參じた。天明七年九月七日歿、年七十。「筑波紀行」・「百羽搔」・「七柏集」等二百有餘種の著があるといふ。後人の編に「蓼太句集」・「雪門報恩集」等がある。

鬼貫——攝津伊丹の人。上島氏、名は治房、通稱與惣右衛門また三郎兵衛、自休庵、槿花翁、佛兄、馬樂堂等の別號がある。晩年囉々哩居士、即翁と號した。もと、富裕な酒造家であつたが、小説俳諧を好み、産業を顧なかつたので、遂に家産を蕩盡するに至つた。俳諧は松江維舟に學んで、嶄然時流を抜く大家となつたが、窮困日に甚だしく、僅かに按摩を以て自活した。窮餘自殺を企てて人に救はれたことすらある。元文三年八月二日歿、年七十八。著に「ひとり言」・「俳諧七車」・「犬居士」等がある。

太祇——炭氏。江戸の人。號は不夜庵。初め雲津水國の門に入つて俳諧を學び、水語と呼び、徳語と改め、後、初世慶紀逸に學んで太祇といつた。寶曆の初め、京に上つて島原上の町に住み、常に俳優を好んで交を結んでゐた。明和八年八月九日歿、年六十三。芭蕉歿後の墮落沈滞した俳句を振興して、いはゆる天明調の隆盛を來すに與つて力があつた。彼の長所は複雑多趣の人事を活寫するところにある。

其角——寶井氏。榎本は母方の姓。本姓は竹下、初めは醫で名を順哲といつた。寶管齋、晉子、狂雷堂などの別號がある。近江堅田の醫、東順の子。江戸茅場町に住んで赤穂浪士大高源吾(俳號子葉)と親交があつて、心中密に美學の成功を祈つてゐたことは夙に人の知るところである。蕉門十哲の一。寶永四年二月二十九日歿、年四十七。著に



は「花摘」「句兄弟」「蕉尾琴」「類柑子」その他があり、後人の編に「五元集」「其角全集」等がある。「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春。」「聲かれて猿の齒白し峯の月。」等は有名である。

**凡兆**——初め加生と號し、晩年には阿圭とも號した。加賀金澤の人である。初め醫を修め、京都に住して業を弟子に授けた。性質頗る雅致風流を好み、蕉門に入つて俳道を得て、その道に達した。名吟が多く、人口に膾炙されてゐる句も少なくない。嘗て友の罪に坐し、入獄したことがある。その時、「猪の首の強さよ花の春。」「かけらふの身にも許さぬ風かな。」の句を残してゐる。生歿年月不詳。著書としては、元祿年間に去來と共に撰んだ「猿蓑」があり、後人の撰んだものに「凡兆句集」がある。なほ女流俳人羽紅（とめ）は凡兆の妻である。

**教材**

日本文學の一異彩である俳句の一斑に通ぜしむる目的で、元祿から天明あたりまでの作者の、代表的な句を掲げた。さわやかな初夏、野趣満々たる盛夏の風韻を掬ふことの出来る句である。作者は九人、句數十一。排列は、大略季節の推移に従つて並べてある。

**指導篇**

**扱方**

沼波瓊音氏は「俳句を解釋することは無意味だ。」といつた。實際、俳句のやうに單簡な詩形に盛られた情趣、情調

は到底これを散文に置換へることの出来るものではない。語短く餘情のあるところが俳句の生命であるから、それにくだくしく説明するのは、却つて俳句の本質に反するものといふべきである。理解せしめるよりも、感得せしめなければならぬ。故に本課の教授に當つては、解釋は飽くまで鑑賞の一段階として取扱つて頂きたい。即ち、難語句や、季節や、情景を説明し、鑑賞の妨げとなるものを除いてやればよい。そして鑑賞は生徒各自の鑑賞力に委せるべきである。

**解釋**

**※目には青葉** 目には鮮やかな青葉の色を見、耳には趣深い山ほととぎすの聲を聞き、口には初鰹の美味を味はふ。初夏を讀へた、素堂の三段切の名句として珍重されたものである。この句曠野（元祿二年刊）にはこの通りの形で出てゐるが、言水の江戸新道（延寶六年刊）には「かまくらにて」と前書があり、また自作を合せてそれに自註を試みたとくくくの句合（享保十二年刊）には「鎌倉一見の比」とあり、その自註に「目には青葉と云ひて、耳に郭公、口に鰹

ほととぎす

とおのづから聞ゆるにや、鎌倉中のけしき是にすぎず。」とあるから鎌倉の作であることは紛れない。**※鞘ばしる** 夜、杜鵑の鳴く時、名劍友切丸が自然に鞘を脱したといふのである。蕪村句集にある句。友切丸といふ名劍の由來は、平家物語劍之巻に出てゐる。もと源爲義が獅子の子、小鳥といふ二振の名劍を持つてゐたが、小鳥が獅子の子より二分ばかり長かつたのを獅子の子が自然に小鳥を二分ばかり切つて兩方とも同じ長さになつたので、獅子の子を友

切と改名した。そしてこの兩劍とも嫡子義朝に譲つたといふのである。蕪村は好んで史實傳説を使ひ、又空想的な句を作ることを得意とするが、この句もその一つである。夜、杜鵑の鳴くのは、嚴肅な又幾分か慘愴の氣を帯びた感じがあり、名劍の鞘走るといふことにも同じやうな感があるから、この兩者を配合せしめて空想的にこの句を作つたらしい。

※杜鵑なくや 雨量の多いために濁り氣味な湖水の空を、一聲ほととぎすが鳴き過ぎるといふので、五月雨頃の水嵩の増した琵琶湖の何となく不安氣な寂しい相貌のよく出た句である。芭蕉庵小文庫（元祿九年刊）及び續猿蓑（元祿十一年刊）に見える句で、恐らくは元祿六年か七年、文章が近江の無名庵にあつた頃の作であらう。

※一聲の江に 杜鵑が一聲鳴いて河の上を渡つて行

つたといふ句意。これは多分月明の江上を杜鵑の鳴き渡つた光景らしく、清澄幽婉な情趣が窺はれる。芭蕉句集に出てゐる。芭蕉が「一聲の江に横たふやほととぎす。」か、「時鳥聲横たふや水の上。」か、どちらにしようかと迷つたといふ所傳のある句である。「江に横たふ」は、赤壁賦の「水光接天。白露横江。」から思ひ附いたものらしい。「横たふや」は、文法上からいへば、「横たはるや」でなければならぬ語であるが、俳句では語調の都合で必ずしも文法には拘泥しない。同じ芭蕉の「荒海や佐渡に横たふ天の川。」の「横たふ」の如きも同様の破格である。

※蘭田刈つて 家の周りの蘭を刈り取つてしまつたので、ふと目を覺すと、いつも耳近く聞き馴れた水雞が、遠くの方でかすかに叩いてゐるといふので、

さうした時の寂しさ懐かしさがよく出てゐる句である。この句藪太句集には見えず、太節の發句題叢に出てゐる。蘭は燈心草ともいひ、燈心草科の多年生草本で、疊表や花筵の原料となる。冬の最中に水田に作り、伸びると、青黒い毛氈を敷いたやうに見える。夏の最中に刈る。

※行水の この句はかなり人口に膾炙した句である。

一見蟲の音を憐んだ作に見えるところから、その點で世俗の嗜好に投じたものであらう。しかし、作意はたゞ蟲の音のしげくして、行水の湯の捨て場所もないといふだけのもので、それ以上の動物愛護的な教訓意識は讀者が勝手に添加したものといつてよからう。俳諧温故集にはこの形で出てゐるが、鬼貫句選には「捨どころなき」とある。句意には別に變りはないが、「し」の方が句調よく落著があるので、故

意にか偶然にかさうなつたものであらう。

※石工の 石工が今まで使つてゐた鑿のほてりを冷ますために、ジュンと清水に浸したといふので、如何にも蕪村らしい印象の鮮やかな、手際のいい作である。手を切るやうな清水の冷たさが言外に感じられる。蕪村句集夏之部に見える。

※橋おちて 五月雨の出水で橋が流失してしまつた。雨上りとはなつたものの、まだ濁水が滔々として流れてゐる。近所の人々が岸に出て来て、これを眺めてゐる。折から、清らかな夏の月が、皎々と照つてゐるといふ光景である。或はまた、橋の落ちたのを知らずにやつて来た人が、初めて橋のないのを知り、當惑して岸に立つてゐるとも解せられるが、前解の方がよいであらう。太祇全集にある句。

※夕立や 夕立がザーッと降り出した。家鴨の群がグ

ワッ／＼と諸聲に鳴きつれて、家のまはりを歩いて  
ゐるといふ光景。「家をめぐりて」は、家をぐる／＼  
廻るといふ文字通りの解に拘はらずに、家鴨の群が  
雨を喜んでか、或は雨を避ける場所を求めてか、家  
の近邊を、鳴きながらあちこち歩いてゐると見るべ  
きである。下五句が五元集には「啼家鴨」となつて  
ゐるが、俳諧古選には「家鴨啼」とある。意味は同  
じだけれども、句としては「家鴨啼く」の方が、優  
つてゐる。

※ 順禮の 順禮のよく通る街道である。折は夏の頃、  
その路傍に旅人の憩ふに恰好な木陰がある。今、通  
りかゝつた一人の順禮が、涼を求めてその木陰には  
いつた。その木の下には心太屋が店を張つてゐると  
いふ光景。五元集にある句。順禮（巡禮）は、信仰  
のために諸國の靈場を遍歴して歩く者で、男にも

女にもいふが、ここは女であらう。ところてんは、  
心太草を煮てその滓を去り、冷して固めたもので、  
醬油又は酢をかけて食べる。夏の食物である。順禮  
に對する心太は、女にふさはしい心太であり、暑  
さのために喉の渴いたのを癒すにふさはしい心太で  
ある。そして心太屋の出るといふことは、順禮のよ  
く通る街道の、しかも順禮のよく休む木陰の場所だ  
であることを示すと同時に、もう既に夏の候であるこ  
とを示してゐる。要するにこの句は、夏日の街道に  
於ける一涼景といへよう。順禮、木陰、心太、三  
つものがしつくり合つて、少しの間隙もない作であ  
る。

※ 涼しさや 門は猿蓑に「門ン」と送假名があるか  
ら、「モン」と讀むべきであらう。朝草は、農家など  
では、夏の朝食前に草を刈つて來るのが習はしであ  
る。

る。その草を朝草といふ。夏の朝早く、刈つて來た  
草を、負つて門内へはいるといふので、まだ露のし

とどな様を感じられる。いかにも涼しさうな光景で  
ある。

資料篇

参考文献

俳句は五七五の句から成る季節の詩である。和歌を遊戯化して上の句と下の句とを連続させて楽しむ連歌の發句（第一句）のみが獨立したのが即ち俳句の濫觴である。しかしその正確な時代はわからない。平安時代末から鎌倉時代へかけての頃であるらしい。しかし、その後、特に山崎宗鑑、荒木田守武の力によつて俳句が盛んに行はれるやうになつた。それから松永貞徳（貞門）、西山宗因（談林派）、上島鬼貫（伊丹流）、などを経て、松尾芭蕉に至つて大成されたといふべきである。そして、芭蕉を中心とした元祿時代が俳句の最盛期といはれるが、次に與謝蕪村の天明頃から天保を経て明治に入り、正岡子規の革新となつたことは周知の事であらう。現在では、それ等の流も續いてゐるし、別に河東碧梧桐、萩原井泉水氏等が各々革新を唱へ、その派は在來の詩形を崩した新傾向の句を作つてゐる。また昭和に入つてからは、「新興俳句」と稱する一派の運動も出で、傳統俳句と對立し、俳壇は百花擄亂の景を示してゐる。因に「俳句」といふのは、子規から使ひ始めたので、もとは發句といつた。

## 一八 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

## 解説篇

## 作者

瀧澤馬琴。字は瑣吉、諱を解、通稱佐七郎、佐五郎、佐吉等。號も著作堂、曲亭、飯台、蓑笠軒等と多い。明和四年六月江戸の武士の家に生れた。父が事情によつて仕を退いてから、生活は困難になり、二十歳の時には兄もなくなつて自ら生活をしなければならなくなつた。武士となる希望を止め、醫學を學んでも成らず、文章を以て立たんとして當時作家として一流である京傳について、その盡力のもとに寛政三年、「二十日餘四十兩盡用而二分狂言」といふ黄表紙を刊行し、次第に名を擧げ、書肆蔦屋重三郎にも認められたのである。二十六七歳の頃、下駄商伊勢屋に入婿になつた。彼は後黄表紙を去つて讀本を出し、京傳を凌駕して一流の讀本作者となつた。そして後には京傳の女々しい嫉視や、馬琴の傲岸な利己的な不人情のために京傳とは不和になつたので、京傳が歿した時にはその葬式にも參列しなかつた。彼は名譽心の強いために作家とも餘り交際せず、獨り高うして居つた。晩年には失明し、加ふるに妻お百の我儘に家庭の風波が絶えず、また病弱な一子琴嶺にも死なれて、寂寥の中に嘉永元年十一月六日、八十二歳を以て世を終つたのである。綿密に記した日記によつて彼の生活は窺はれる。なほ彼の著作で有名なのは、「南總里見八犬

傳」・「椿説弓張月」・「三七全傳南柯夢」・「近世説美少年録」等で總じて二百種餘ある。

## 引用書

南總里見八犬傳。九輯、百六卷。文化十一年初輯出版、完結は二十八年後の天保十二年であつた。その間作者は繼嗣を失ひ、天保十一年には兩眼失明し、遂に百七十七回からは嫁のお路に口授して傍ら字を教へつゝ完結せしめた。本書の梗概を次に述べよう。安房の豪族里見義實の女伏姫は、父の約を重んじて家犬八房に伴なはれて富山の奥に籠り、ひたすら菩提の道を勤めてゐたが、義實の功臣金碗大輔孝徳が、主君の耻を雪がうとして八房を銃撃し、一丸あやまつて姫に當り、姫は終に死ぬ。その時伏姫が幼時役の行者から感得した水晶の珠数がちぎれて、仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌の文字を現した八個の大玉が八方に飛散り、姓に犬の字を冠した八人の豪傑（八犬士―犬山道節、犬飼見八、犬塚信乃、犬川莊介、犬江親兵衛、犬村大角、犬田文吾、犬坂山毛）が世に出て、各々種々の境遇を経た後に、終に相合して里見氏に仕へ、輔佐の功を立てた物語で、骨子を支那の水滸傳に取り、軍記・地誌等を参照して江戸及び房總の地理の實際に合はせて書いてある。

本課はその第四輯、卷之一、第三十一回「水閣の扁舟兩雄を資く」の條に由つた。

## 教材

頃は眞夏の日盛りの、焼けつくばかりの、高樓の臺の上で、豪勇無雙の兩勇士、犬塚信乃と犬飼見八とが、龍虎相搏つ格闘を演じたが、遂に勝負決せず、互ひに組合つたまま、幾十尋もの河の中へ轉げ落ちるといふ、武勇譚をここに

掲げた。いふまでもなく八犬傳は馬琴の傑作である。その規模の雄大さに於て、その構成の複雑さに於て、その筋の面白さに於て、まことに日本人離れのした文學である。片鱗ではあるが、本課を授けることにより、原書の内容を偲ばせ、藝術的天才の妙筆を味はせたい。

指導篇

扱方

教授に先立ち、八犬傳といふ小説の梗概と作者馬琴の人物に就いて解説をなし、豫備知識を授けた方がよいであらう。

八犬傳の文章は、七五の韻律を主として綴り、頗る流麗である。美しい韻律を引去つたならば、この文章の味はひどいものは半減されるであらうから、特に朗讀が大切である。これが爲には、行文の途中で呼吸を切らずに、句讀點で切るやうにして讀めばよい。

馬琴獨得の語法や、豊富な修辭に就いては、解釋の進行の合間に注意して頂きたい。

展開

第一節——古への人言はずや（から）思ひ遣るだにいと傷まし。（まで）  
犬塚信乃が芳流閣上に身を脱れるまで。

第二節——さればまた犬飼見八信道は（から）巨蛇の狙ふに似たりけり。（まで）

犬飼見八が君命を受け、信乃を搦め取らうとして芳流閣に登つたこと。

第三節——廣庭には成氏朝臣（から）脱れ果てじと見えたりけり。（まで）

水も漏らさぬ捕手の陣容と、信乃の脱れ難い窮境について。

第四節——その時信乃思ふやう（から）見る目もいと遙かなり。（まで）

戦を前にして互に對手は好敵手だと認める。いよ／＼戦がはじまる。

第五節——さる程に犬塚信乃は（から）行方も知らずなりにけり。（まで）

血戦のはて、遂に勝負決せず、兩雄組附いて一團となつたまゝ、利根川の舟中に落ちる。やがてその舟は流されて、行方知れずになる。

解釋

※禍福は糾へる繩云々 禍（不幸）と福（幸福）と

は、より合はせた繩のやうに、互に表裏交錯して、

禍は禍で終始し、福は福で終始するものではないと

いふ意。出典は欄外に見えるが、なほ史記の南越傳

にも「因禍爲福、成敗之轉、譬何異糾纏。」とあ

る。そしてこの考を一の具體的の例をもつて來て言

ひ表したのが即ち次の「人間萬事塞翁が馬。」といふ

言葉である。

※往くとして 何をするにしても。何にしても。

※塞翁が馬 禍福、幸不幸の定まりなく、とても思ふ

やうにはならない事をいふ語。淮南子人間訓に「塞上に近き人、術を善くする者あり、馬故なくして亡げて胡に入る。人皆これを弔す。その父曰く、これ何ぞ乃ち福とならざるを知らんやと。居ること數月、その馬胡の駿馬を將ひて歸る。人皆これを賀す。その父曰く、これ何ぞ乃ち禍とならざるを知らんやと。家良馬に富む。その子騎を好み、隨ちてその體を折る。人皆これを弔す。その父曰く、これ何ぞ乃ち福とならざるを知らんやと。居ること一年、胡人大いに塞に入る。丁壯者は弦を引いて戦ふ。塞に近き人死する者十に九、これ獨り跋たるの故を以て、父子相保つ。故に福の禍となり、禍の福となる、化極むべからず、深測るべからざるなり。」元の僧熙晦機の詩には「人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠。」とある。

※そは、福の倚る所、はた禍の伏する所云々この言葉「人間萬事云々」の言葉は、幸福の生ずる所、又不幸のひそんでゐる所は、決してはつきりと一定してゐるものではなく、福の中に禍があれば、又禍の中に福があるといふ意味である——「とは思へども」——といふのである。即ち「彼にあれば此にあり」は、「彼(禍)に此(福)あれば、此(禍)に彼(福)あり」の意である。この語の出典(老子、其政悶々章第五十八)については頭註参照。

※犬塚信乃 里見八犬士(後出)の隨一。孝字玉をもつてゐる。名は成孝。乳名は志之。武藏國豊島郡大塚村(今の東京市小石川区大塚)の人。他の犬士と共に安房國守里見成義に仕へ、戦功によつて國主の第五女濱路姫に配し、同國東條の城主となり、采邑一萬貫を食んだ。

※親の遺言

信乃の父は犬塚番作といひ、信濃國筑摩郡に住んで村の青年に讀書の教授等をして暮し、その中に一子を擧げた。それが乃ち信乃であつたが、信乃が十一歳の時、父は事によつて自殺した。その時、父は年來身に代へて守護してゐた村雨の寶刀を手づから信乃に授けて、伯母の家に引取られて、慳貪な伯父、伯母に仕へて久しく艱苦を嘗めたのである。

※得難き時を云々 無一の好機會を得たから。

※辭我 下總國(茨城縣)猿島郡古河町。それにわざとこんなむづかしい字を當てたのである。すぐ南で利根川に入る渡良瀬川の東岸に當り、今、東北本線の車驛。いはゆる古河公方のゐた所。

※ふりかはりたる村雨 福が一變して禍となつた(なつて)——その村雨の刃は……と続く。「ふりかは

はる」は福が一變して禍となるといふ意に、村雨の「降る」を利かし、なほ刃がすりかへられてゐた事を利かし、その上、「刃を振る」といふ「振る」を利かしたものと解すべきか。

※刃はもとの物ならで 信乃は、村雨の寶刀をもつて、辭我に赴き、執權横堀史在村を通じて返上しようとしたところが、いざ返上といふ段になつて、刀身を抜いて見ると、いつの間にか村雨の刀身は他のものにすりかへられてゐたのだつた。これは信乃の伯父藤六が、或夜信乃を神宮川に漁獵に誘ひ、わざと水中に陥り、それを信乃が救ふ間に、仲間の石田三郎をして舟中の村雨の寶刀の中身を巧にすりかへさせたのであつた。

※我が身をつんざく響とぞなりし そのすりかへられた刃が、自分の身を、突き裂く響とはなつた—

「警は、自分の身に害をなすもの意。で、信乃は  
すりかへられてゐた刃を見て、大いに驚いたが、突  
嗟の事で、如何とせんすべがない。その儘その寶  
刀を持つて御所に參上し、逐一すりかへられた次第  
を言上すると、成氏朝臣の傍に侍つてゐた在村は、  
「忽地怒れる聲をふりたて」て、「嘉吉より今に至り  
て、早四十年に近し。六七十の翁ならずば、よく認  
るもの稀ならん、只その證とすべきものは、刃より  
立つ水氣のみ。思ふに這奴は敵がたの、間諜者に疑  
なし。とく生拘れ。」といらだち、數多の力士、近臣  
が一度に信乃を目がけて攻めて來た。信乃は廣庭に  
跳り出で、軒端の松より屋根に登り、屋根より屋根  
を傳うて遂に芳流閣の宮棟に攀登つた——。

※ 憾を玆に釋く由もなく 前項でいつたやうな無實  
の罪を辯證して、自分の苦衷をいひとくすべもな

く。  
※ 當座の辱 その場での恥辱。  
※ 攀登れどもとにかくに 攀登つては見たもの、  
さてどうにもならず——。  
※ 其所に必死をきはめたる 屋の上に於て絶體絶  
命となり、死を決した——。  
※ さればまた かういふ風に福が轉じて禍となつた  
信乃の一方には、又——。  
※ 犬飼見八信道 乳名毛野。信乃が芳流閣の宮棟に  
攀登つた時、誰も恐れて近附くものがなかつたが、  
（以下八大傳の文）「當下執權在村は、成氏に稟すや  
う、獄吏、犬飼見八信道は、おん拔萃の職役をいな  
みまうし、あまつさへ強いて身の暇を乞奉りし咎に  
より、月ごろ禁獄せられたり。渠は古人二階松山城  
介が武藝允可の高弟にて、就中捕物奉法は本藩無雙

の力士なり。且くその罪を寬めて、信乃を搦め捕ら  
せ給へ。その功成らば、見八が死罪を赦さん。又信  
乃に撃たるゝとも惜しむべきものにあらず。この議  
はいかゞとまめだちて薦めまうせば、うち領き、汝  
が意見究めてよし。とくくと仰するにぞ、在村は  
時を移さず、件の犬飼見八を獄舎より牽出させて、そ  
の縛を釋きゆるし、君命を述傳へて、太刀、身甲、  
肱盾臙盾に十手を添へて取らせにければ、見八辭ふ  
氣色なく、謹んで領承し、犇々と鎧ひつゝ、居すく  
まりたる足踏試み、在村に辭別して、三間階子を走  
り登るに猴の杓を傳ふが如し。孫廂のあなたより、  
芳流閣の宮棟に、血刀引提げて立つたる信乃を、遙  
かにうち瞻つて、ちつとも擬議せず、雲凌げる樓閣の  
甍を踏みて進む程に、成氏は在村等老黨近習あまた  
將て廣庭に床几を立てさせ、うち仰ぎ瞻つ、主従は

あやぶまざるものなかりけり。畢竟犬塚犬飼兩雄の  
勝負如何。そは編を嗣ぎ卷を更へて第四輯の端に解  
かん。出像を觀て餘韻は味はふべし。」それから本課  
の文となる。で、見八も亦里見八犬士の一人で、信  
字玉を持つてゐる。乳名を玄吉といひ、安房國の土  
民糠助の子。二歳の時に貧苦のために、父糠助は見  
八を抱いて投身しようとしたのを、計我の家臣犬飼  
見兵衛に救はれ、遂にその養子となり、成氏朝臣に  
仕へたものである。後、他の犬士と共に、安房國守  
里見成義に仕へ、國主の第六女葉姫に配し、同國神  
餘城主となり、采邑一萬貫を食んだ。  
※ 恩赦 なさけによつて罪をゆるされること。  
※ 我が縛の索解けて 今までしばられてゐた索が解  
けてといふので、釋放されること。  
※ 人にぞかゝる云々 今まで自分が縛められてゐた

索が解かれて、今度は自分が捕吏の役となつて他人（信乃）を縛めるべき索となつた意。

※ 役儀 役目。

※ 搦む 罪人などを捕縛する。しばる。

※ なまじひに 心に副はないのに強いて。

※ 他の憂を身の面目に 他人（信乃）の憂となること

とがとりもなほさず自分の譽となる——さういつた役儀に。

※ 辭む 辭退する。

※ 君命重く彌高き 君命が重く高いことを樓閣の高きことに掛けてある。

※ 樓閣 城壁又は城門の上に、遠見のために、又矢石を發して敵を防ぐために築いたたかどのをいふが、ここは芳流閣全體が一つの樓閣なのであるから、「二層なる檐の上」とは要するに二層目——二階の檐の

上の意だ。後に「初層、二層の屋の上」といふ語があるが、それと同じ意味。

※ 身を霞ませて 身體が明瞭に見えなくなるまで高くとの意。

※ 乾蒸 大氣が乾燥し、風なく暑氣が蒸すやうに厳しく感ぜられること。

※ 燄熱 熱氣の發すること。「燄熱を渡る敷瓦」は、ほてる敷瓦の上を渡つて行く——その敷瓦の意。敷瓦は石だゝみのやうに地面または床などに敷き並べた瓦。ここは「二層なる樓閣」の床の敷瓦である。

※ 隙なく べた一面に凸凹のあるさま。

※ 滔々 水の盛んに流れるさま。上の「波濤に似て」といふ形容はここに利かしてゐるのである。

※ こゝ生死の海に入る 「入る」は原文には「朝る」となつてゐる即ち朝する、流れ注ぐ意。で、これは

生きるか死ぬかのいづれかに定まること、あたかも大河の海に注ぎ入るやうに絶對的であるといふ意味を含めたもの。

※ 坂東太郎 利根川の異稱。坂東（關東）第一の大河

といふ義。利根川（刀根川）は源を上野より發し、武藏、下總の國境を流れ、古河の南方の關宿で二分し、一は南下して江戸川となり、行徳で東京灣に注ぎ入り、一（こちらが本流）は東走して銚子で太平洋に注いでゐる。

※ 水際の舟楫緒絶えて 水際の舟の楫につけた緒が切れたやうに、自由を失ひ——。

※ 敵 信乃を指す。

※ 繋ぎ留めんと 小舟を纜で繋ぎとめるやうに、索で引きしばらうと——捕縛しようとする。

※ むさゝび 鴈。野禽ともいふ。齧齒類、栗鼠科に

屬する獸。形は栗鼠に似て大きく、前後の兩肢間に膜があつて、よく樹上を飛行する。深山の樹木の洞に棲み、夜間に出て、果實を食ふ。聲は小兒の泣くやうに聞える。

※ まぶしさす 「まぶし」（目柴）は、鳥獸を射るために柴などを折つて身を隠すもの。「まぶしさす」は、まぶしを造つて身をかくすこと。ここはもちろん單に身を蔽ひかくすものがないといふ意味である。

※ 浮圖 互に。

※ 浮圖 梵語 Stupa. 佛の意だが轉じて僧侶又は寺塔の意となつた。ここは塔の意。

※ こぶ 鶴。涉禽類。鶴に酷似した鳥で、形態が大きく眼の周圍に羽毛のないのが鶴と異なつてゐる。羽毛が白く翼や尾は黒く嘴と脚は紅色で、爪は褐色である。蛙や爬蟲、昆蟲、小魚などを捕食する。「ゴフ



「ツル」とも「コフノトリ」ともいふ。鳥類中で強剛なものとして、その巢を掠めに行つた大蛇と格闘するといふ話が古來傳へられてゐる。

※ 廣庭 玄關先の廣い庭。

※ 成氏朝臣 (朝臣は四位以上の人の敬稱) 正史についてその傳を簡単に記すと、成氏は足利持氏の第四子。幼名は永壽王といひ、關東公方となつた。鎌倉を鎮したが、父持氏の舊怨を引いて、寶徳三年、管領上杉憲忠を誅したので、上杉氏の族は皆成氏に叛き、成氏は古河に走り、いはゆる古河公方となり勢を振つたのである。明應六年古河で歿、年六十四。

※ 横堀史在村 成氏朝臣の老臣で、君の信任が厚く、その言がよく聞かれたから權勢を擅にした。

※ 老黨若黨 老いた郎黨、若い郎黨。郎黨は郎等に同じ。武家の家臣、家來、郎從。

と。但し、ここは弓杖を突いて片唾をのんでゐるのである。

※ 項 頭の後方なる下部。ぼんくぼ。えりくび。項を反して」は即ち仰向いて。

※ 杳かなる河水 遠りて 芳流閣を――。

※ みざり 軒下又は階下などの石だたみ。

※ 臂方 筋肉の力。腕の力。身體の力。

※ 墨氏が飛鳶 墨氏名は翟、兼愛の説を唱へた周代の哲學者である。飛鳶(たこ)の事は淮南子に、「魯般以木爲鳶而飛之」とあつて、墨氏の事蹟とはなつてゐない。恐らく作者の思ひ誤りか、又は次の「魯般が雲の梯」といふのに對せしめるために、故意に附會したものであらう。

※ 虚空 天地間の空な所。大空。

※ 魯般が雲の梯 魯般は魯人公輸般の略稱。楚に

※ 圍繞 とりまくこと。

※ 床几に腰を 成氏朝臣が――。床几(牀几、將几)は昔、陣屋又は狩場などで専ら用ひられた一種の腰掛で、尻の當る所に革を張り、脚を打違に組んで、携帶に便のやうに出來てゐる。

※ 閣 「おぼしま」(欄干の意)と振假名がついてゐるが、これは「かく」と呼んだ方がいい。樓閣(芳流閣)のことである。

※ 腹卷 鎧の一種で、腹に巻いて背で引合せるやうに作り、その背の隙を背板でふさぐのである。これは元來は狩衣、直垂、鎧等の下に著るものであるから袖障子、弦走、梅檀板、鳩尾板等はなかつたが、鎧の代用として、上に著るやうになつてから背板、袖、杏葉などもつけた。

※ 弓杖 (戦に疲れた時などに)弓を杖として息ふこ

仕へ、軍務に當つた人。その雲梯の故事は、太平記「千劍破城軍事」の條にも引かれてゐる。その起りは墨子に「公輸般爲雲梯、將以攻宋、墨子聞之、見般、以帶爲城、以牒爲械、般九設機變、墨九距之、般之械盡、墨之守有餘」とあるのから出た。また、淮南子には、「楚欲攻宋、墨子聞而悼之、見楚王曰、臣見大王之必傷義而不得宋、王曰、公輸天下巧士、作爲雲梯之械、設以攻宋、曷爲不取、墨子曰、令公輸般設攻、臣請守之、於是公輸般、設攻宋之械、墨子設守宋之備、九攻而墨子九却之、弗能入、乃偃兵不攻、公輸般般也」とある。つまり「雲の梯」とは梯の高いもので、これに上つて敵の城中に攻入るのである。

※ 雀羅 雀羅は鳥を捕へる網。「門前雀羅」などといふあの羅である。信乃は鳥でもない

のに鳥網にかゝつたと同じになり、獸でもないのに狩獵をなす場所に取りこめられたと同じでいたらくになつたといふ意。平たくいへば、袋の鼠、籠の鳥と同然だといふのである。

※三寸息絶ゆ 「喉下三寸過ぐれば暑さを忘る。」などといふ諺もあり、三寸は咽喉のこと、「三寸息絶ゆ」は死すること。

※事皆やまん 萬事休せん。即ち何もかもおしまひだといふ意。

※世に覺ある力士 世に聞えた大力者。

※しやつ 彼奴。あいつ。

※膳臣巴提便 第二十九代欽明天皇の時、百濟に使し、雪の夜に虎の爲に兒を食はれ、大いに怒り、出でて虎の跡をつけて虎穴に入つて、左手に虎の舌を把り、右手に刀を抜いてこれを殺したことが日本書

紀に見えてゐる。

※富田の三郎 和田義盛の臣。強力の喙があつた。建保元年五月、義盛は或事で將軍實朝を攻めて、その御所を焼いたが、程なく義盛は敗死し、富田三郎は生禽された。吾妻鑑卷二十一に、「建保元年七月十一日庚戌、天晴、相州（北條時房）參御所（廣元朝臣第）給。被獻三盃酒。其間相州被申云、去五月、所與于義盛之富田三郎、強力勝千人、扛鼎云々。將軍家（實朝）爲御覽其藝、召富田。伊藤七郎具參。候寢殿西面簀子、自御所被出大鹿角二。（長三尺、方七寸）依仰、相州令尋進之給。一角一度折之。滿座莫不感嘆。又御感之餘、可被免囚人。之旨被仰出云々。相州即令下知趣於金窪左衛門尉行親給。」

※さもあればあれ それはさうでも仕方がない。ま

まよといふやうな意。

※刺違ふ 兩人互に刃を相手の身體に擬し、刺しあふ。

※死するに難き云々 どんなことをしてだつて死ぬる——早まつてはならない。

※よき敵にこそ云々 相手にとつて不足はない。いい對手だ。

※目に物見せん ひどい目にあはしてやらう。

※袴の稜 袴の股立——袴の左右の腰の側面に當る部分の縫ひどめの箇所。

※高瀬 高瀬船の略。即ち底の浅い平たい川船。

※はこ棟 これは箱に組み、横樋のやうにした大棟で即ち屋根の棟の上に更に小さい棟を作り、柳又は互で葺いたもの。「高瀬の如き——」とは、つまり「はこむね」が細長く危なげに横たはつてゐるさま。

※萬夫無當 極めて剛勇で、萬人もの多くの男子がこ

れにかゝつて行つても、とても當り得べからざること。

※擬議 あやぶみ、ためらふこと。

※御詫さふ 御用だ！ 神妙にしろ！ くらゐの意。

御詫は貴人の仰せ。「さふ」は「さふらふ」（候）の約。

※十手 昔、捕吏の携帯した用具で、長さ一尺五寸餘なる鐵の棒で、切りこむ刀劍を防ぎとめるため、中程に鉤を装置し、柄に總紐を結んで垂れ下げたもの。犯罪者を捕縛する時、これを以て刀刃を防ぎ、打撃を加へた。鐵尺。一〇七頁の挿圖で見八が口に

銜へてゐるのがそれ。

※組まん 取組まん。

※心得たり 合點だ！

※太刀風 太刀を振つて起る風——太刀を烈しく振る勢。

※こむ刀尖 突込んでくる刀尖。

※支へて流す一上一下 受けとめて上下に拂ひのける意。

※いらか 葦。屋根を葺く瓦。又は瓦葺の屋根をもいふ。

※手練 練磨(鍛錬)した手ぎは(手なみ)。

※嵩より落す太刀筋 上方からのりかゝるやうにして切下す太刀のふり方。太刀筋は太刀の遣ひ方。

※虚々實々 敵の實を避け、その虚に乗じて計略伎倆を盡し相戦ふこと。虚と實とは、備へのないのとあるのと。

※氣を籠めて 心を緊張させて。

※見る目も云々 芳流閣上の血戦を望み見る目も、血走つたため、ぼんやりと霞んで、非常に距離が遠く感じられる。「いとゞ」はいとゞの略。一層。

※さる程に しかある程、即ちかれこれするうちの

意。軍紀物語には單なる發語として多く使はれてゐる。「さて」といふくらゐに解していい。

※敵を得たりけり よき敵を――。

※挑む 競ひ争ふ。はりあふ。

※錚然 金石などの相撃つて響を發するさま。ここは風の物凄く吹きすさぶ音。

※青潭 青い淵。

※沛然 物事の多大なさま。又雨の大きいに降るさま。

※ていたらく 爲體と書く。即ち「體たる」の延言。姿、有様、なりゆき。

※晴業 晴の仕事。公衆の面前でする大切なしわざ。「晴」は、おもだつて晴れがましい場所をいふ。多人数の集つて觀てゐるやうな場所。

※被籠 上著の下に重ねて著る鎖帷子などの稱。一

○七頁の挿圖で見八が一著に及んでゐるのが見える。

※鎖肱當 原文には鎖の下に點が打つてある。即ち被籠――鎖帷子の肱當の所意だと思ふ。肱當は普通籠手と書き、上肢を蔽ふ甲である。ここは要するに鎖帷子の上肢を蔽うてゐる部分の意。

※裏かくまで (鎖帷子を切裂いて)裏(中)へ突通るまで。

※太刀を抜かず 十手のみで格闘することをいつたのである。

※刀の刃も續かで 刀の刃が缺けたことか。

※淺痕 輕傷。微傷。

※足場を計りて 足がかりを、巧につくつて。

※去らず 退かず。

※疊みかけて つゞけさまに――。

※返す拳に附入りつゝ、撃ちこんでくる太刀を十手

でもつて拂ひのけ敵が太刀を拂はれて引く――その機に乗じて、その手許に飛込み――。

※眉間 眉と眉との間。

※はたと打つ、十手を 十手でもつて打つた――その十手を。

※得たり 占めた。

※むんずと 「むんずと」の音便。急に力をこめて――勢よく。

※かたみに 互に。

※利腕 右腕。

※曳聲 力を入れて發する聲。

※揉みつ揉まる 互に揉倒さうと相手を揉んだり、又相手から揉まれたり。

※力足 力をこめた足。下の「踏みすべらし」に續く、

※身をまろばせし 身をころがした——そのさまはの意。

※覆車 顛覆した車。

※かけづくり 川又は溪などの上に、かけわたして造つた家。

※削り成したるいらかの勢 削りあげたやうな急

な屋根瓦の上を轉落する勢。

※底には入らずに 河中に陥らずに。

注意

八犬傳は規模の雄大なる、構成の複雑なる、曠古の大作小説として江戸時代文學史上に重きをなしてゐるが、また文章の瑰麗といふ點でも驚歎されてゐる。故事古語の引用が盛んであるが、博學な馬琴のことであるから、一々出所がある。これが文致を豊かにしてゐる一原因である。その他凡ゆる修辭法を驅使して、甚だ技巧的である。如何に技巧的であるか、本課の文に就いて、修辭方面から調べてみよう。

- (1) 先づ全體の基調は道行ぶりを研究しての七五調であるが、その中に時々破格を用ひて單調を救つてゐる。
- (2) 引用法。

※纜 舟を繋ぎ止める綱。

※ちやうと張切つて 舟の揺れる拍子に、纜がきりと張り、ぶつりと切れて。

※追風 おひかせ。順風。舟の行かうとする方へ吹く風。

※誘ふ水なる下り舟 あたかも水が誘つてくれるやうに自然に押流して行く下り舟。

禍福はあざなへる繩の如し云々。福の倚る所、はた禍の伏する所。墨氏が飛鷲……魯般が雲の梯……。膳臣巴提便が……また富田の三郎が……。

(3) 對照法。(對句)

親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ。兩虎深山に挑む時、鏗然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛然として雲起る。(その他澤山)

(4) 譬喩法。

むさゝびの、樹傳ふ如く……。浮圖の上なるこふの巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。かれ鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場にあり。身をまろばせし覆車の俵。

(5) 縁語。

その福は禍と、ふりかはりたる村雨の。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀。君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。

(6) 擬態、擬聲法。

さら／＼と、登り……。はつしと受留めて。はたと打つ。ちやうと受留むる。ころ／＼と、身をまろばす。どろと落つ。さんぶと音す。

(7) 漸層法。(一歩々々その調子を高めて行つて、讀者の感興をその極に導く方法)

芳流閣上の血戦

第二節の後半、第四節及び第五節はこれに當てはまるであらう。

以上の外、むつかしい宛字を盛んに使用してゐるのが目立つ。漢字の字面を視覚に訴へて、振假名の訓と併せて意味の複雑化を計つてゐるのであるが、これは作者の街學的な趣味に由るものであらう。

資料篇

關係文獻

大部百六卷の八犬傳にかけられた作者の絶倫の精力に驚くと共に、この精力の陰に、失明後も筆を措かなかつた強い意志のあることを忘れてはならない。ここには八犬傳の巻尾に附せられた作者の追懐談を抄録して、その苦衷を想ひやることとしよう。

されば今茲の春に至りて吾人おもふに、八犬傳は今昔ありがたき大部の物の本なるに、始ありて終なくば、たゞ看客の飽かず思はんのみならず、文溪堂(書肆)が爲には、後々までも利を全くしがたくて、遺憾こそあらんすらめ、人の爲に謀りて忠ならぬは吾も亦恥づるところなり。さればとて吾が孫興邦(太郎)は、なほ乳臭ある幼心うせず、且武藝を好める本性なれば、かゝる幫助になるべくもあらず。彼が母(お路)は人並に、にじり書きもすれば、教へて代寫させばやと、やうやくに思ひかへしつ、第七十七回の中、音音が「大茂林濱にて、再生の段より代筆させて、一

字ごと字を教へ、一句ごとに假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗字だも知るは稀にて漢字雅言を知らず。假名遣てにはだにも辨へず、偏傍すら心得ざるに、たゞ言葉のみもて、教へて寫かす吾が苦心はいふべうもあらず。まいて教を受けて寫くものは夢路を辿る心地して、困じて果はうち泣くめり。さて代寫一枚に滿つれば、讀返させて、又教へ傍訓を寫かするに、熟字を知らず、又句讀を心得ねば、讀む時或は字を脱し、或はなき字を添へて讀むめり。讀むすら輒からざるに、知らず心得ざる事を口授せられて、寫く者の艱難を思へば、いと痛ましさに、幾度か已めばやと思ひしを又思ひかへして、「筆捨の松のふる葉も言の葉も子等に教へてかゝするぞ憂き。」云々。

——八犬傳回外利筆——

## 一九 日本精神の復興

池岡直孝

### 解説篇

#### 作者

池岡直孝。倫理學者。明治大學教授。明治二十年鳥取縣に生れた。思想界の新鋭で、教壇生活の傍ら、著述に講演に活躍してゐる。著書に「國體觀念の研究」・「國家生活の倫理」・「政治教育」・「倫理學概論」・「國家の倫理的基礎」・「教育學概論」・「最近思想問題批判」・「現代社會倫理學」・「國民道德概論」等がある。

#### 引用書

日本精神の闡明。日本精神を色々な角度から視、これの本質を明らかにすることを目的とした書である。昭和八年、東京、章華社發行。

#### 教材

西洋との交通が開けて以來、西洋心酔の風が段々と盛んになつて、思想國難の聲さへ起るほど、その度が烈しくなつた。言ふまでもなく、西洋流の考をそのまま、日本の國家に移すところから、この誤を生ずるに至つたのである。それといふのも西洋を主として考へるから、かゝる誤を冒すもので、若しそれ、日本を主として考へるならば、かやう

な間違つた考へは起るはずがない。故に吾人は須く西洋心酔の風を、一日も早く改めて、日本本位の自主的立場に立返らなければならない。かういふ論を、宣長や篤胤の言を引いて、往年の支那崇拜と比較しながら述べてゐる。國民精神總動員の實施されつゝある今日、本課はその理論的基礎づけとなるであらう。

### 指導篇

#### 扱方

日本は絶えず外來の文化を攝取消化して日本の文化を豊かにして來た。奈良、平安時代には支那文化の影響が多であつたことは國史の教へる所である。然しながら、外來文化の影響の程度から見れば、明治維新後の西洋文化の影響ほど大きなものはなかつたであらう。本文にもあるやうに、西洋の科學を應用した物質文明が輸入せられ、僅々七十年の裡に、先進諸國にも劣らぬほどの進歩を遂げたのであつた。然るに、物質文明に對する精神文化を顧るに、日本固有の思想は棄てて顧られず、日本人にして西洋心を有する珍現象を生じ、新しき世界思潮が現れば、直ぐにこれに飛びつくといふ傾向がある。これは遺憾千萬なことで、吾人は飽くまで自主的な日本中心の思想を確立し、これを基礎にしての、採長補短主義でなければならぬといふのが作者の趣意である。日本の思想界を客觀的に公平に觀た説であるから、新味はないが、それだけ融通性がある。

時局の推移はめまぐるしく、日本の思想界は、作者の執筆當時とは大分事情が變つてゐる。即ち、赤い思想は滿洲

事變を契機として、下火となり、共產主義者の運動も餘喘を保つてゐるに過ぎないが、その後登壇して來たものは、ドイツのナチスやイタリーのファシストによつて奉ぜられる獨裁主義的思想である。日本は昭和十一年十一月二十五日、ドイツとの間に防共協定を結び、また十二年十一月六日、同協定にイタリーの参加を見た。日本に取り、獨伊はいゆる盟邦となり、依つて以て親善關係の緊密となつたことは慶ぶべきである、しかし、これは飽くまで外交上の問題である。盟邦の思想だからといつて、それをそのまま、鵜呑にする必要はない。獨伊の思想は、各々の國家の特殊な事情に條件づけられて生れた獨自のものである。我が日本はやはり、日本固有の思想、一君萬民、皇室の上に戴いた大きな家族主義ともいふべき思想、言換へれば、日本精神で進んで行かなければならない。また文字通り東洋の盟主として、東洋の指導權を握る日本の國民は、大國の矜持の上からいつても、外國の思想に盲従するのは見苦しいといふことをも知らせて頂きたい。

### 展 開

**第一節**——明治維新以來（から）急務中の急務と言はなければならぬ。（まで）

明治維新以來、西洋文化の輸入によつて生じた得失を述べ、現下の非常時局に際しては、日本精神の復興こそ大切であると説く。

**第二節**——つらく精神文化に關する（から）一大反省を加へなければならぬ。（まで）

近代日本の精神文化研究態度の錯誤を指摘し、反省を要望してゐる。

**第三節**——私は遇つて（から）手をうちていた可笑ひつべし。（まで）

現在の西洋文化心醉状態は、江戸時代の支那文化心醉状態と似てゐるので、江戸時代の支那心醉に就いて述べる。本居宣長が皇國の學者の支那心醉を戒めた言葉を引用してゐる。

**第四節**——今の西洋の學問思想に（から）宣長の言は勿論訂正して考へねばならぬ。（まで）  
右を現下の西洋心醉に適用してゐる。

**第五節**——今日一口に學問と言つても（から）我が國の特有な解釋と解決とによらねばならぬ。（まで）  
學問を國境のある學問と國境のない學問との二つに分ける。

**第六節**——それには、何よりも先づ（から）嘲笑に値する外の何物でもないであらう。（まで）  
誤れる現下の精神文化を正すためには、何よりも日本精神を知らねばならぬとする。

**第七節**——かやうの事を言へば（から）儒者のこの癖を詰つたもので御座る云々。（まで）  
西洋の精神文化（國境のある學問）を攝取するには、皇國本位の立場から、採長補短的に採入れるべきことを、篤胤の言を引いて説く。

**第八節**——右の一節は（から）非難せざるを得ないのである。（まで）  
篤胤の言を承けて、再び西洋心醉學者の迷蒙を嘲ふ。

**第九節**——國境ある學問思想の（から）皇國の學問思想の發展に資せしめ得るのである。（まで）

西洋の精神文化（國境のある學問）を研究するには、皇國日本に根基を置いて出發すべきであると、前條の趣旨を反復力説し、以て全文の結論としてゐる。

解 釋

※ 隔世の感 時代を隔てた感じ。その相違が甚だしいため別な世の中のやうに感ずるのをいふ。西洋の自然科学を應用した結果、衣食住をはじめとして萬般の物質文明が異常な發達を遂げたことをいつてゐる。

※ 日本人にして西洋心云々 和魂漢才といふ語があるが、ここはよい意味でいつたのではなく、血統は純粹な日本人でありながら、日本精神を喪ひ、何でも西洋のものを尊しとし、日本のものを卑しと考へるやうな、詰まり、氣持に於ては西洋人と異なるなき變態的日本人を生ずるに至つたの意。

※ 危険思想 ここは滿洲事變以前に我が思想界に瀰漫

してゐたマルキシズム等の社會主義思想をいふ。

※ かぶれる 感化をうける。多くは悪いことにいふ。

※ 思想國難 所謂新しい言葉の一つで、經濟國難等と共に用ひられる。我が國體と相容れない外來思想が傳播蔓延し、ために國體觀念や國民精神に罅の入る憂ふべき状態をいふ。

※ 滿洲國獨立 昭和七年三月一日である。滿洲國の年號でいへば、大同元年である。

※ 國際聯盟の脱退 昭和八年三月二十七日、脱退に關する詔書は發布せられ、即日外務省よりジュネーヴなる國際聯盟事務總長ドラモンド氏宛聯盟脱退の通告を發した。

※ 自業自得 自己の作爲した惡業の爲に、自己の身に

そのむくいを受けるといふ佛教語。

※ 成行 さう成りゆく過程、又はその結果。

※ 契機 きつかけ、動機。

※ 根本原動力 國難を打開する爲に、その大本の力となるもの、打開しようとする根本の力となるもの。

※ 急務中の急務 最先にすべきことのうち特に最先にすべきこと。

※ つら／＼ つく／＼、よく／＼。

※ 通觀 全體に目をとほすこと。すべてをすつと見渡すこと。

※ 傳統的な日本云々 古い歴史に即して長い間鍛へ上げられた日本の學問思想は、古いが故に價値なきものとして一顧だにされず、たゞひたすら西洋の學問思想の物眞似をすることにのみ努めた。

※ 錯誤 あやまり、あやまち。

※ 玉勝間 全十五卷。その初めの三卷は寛政六年に發刊された。和歌、國學、史學、文學に關する隨筆を集めたもので、卓見がすこぶる多い。

※ 皇國 ここは「ミクニ」と讀む。日本の意識を強調してゐる語である。

※ 知りがほに言ひまざらす 支那の事を知らない時は、まるで知つてゐるやうなふりをしてごまかしてしまふ。「言ひまざらす」は、ここでは言葉たくみにごまかし去ることをいふ。

※ こは これは。

※ 萬づをからめかさんと云々 萬事萬般を支那風にしてしまはうとする餘りに、その身自身さへ支那人ぶつて、日本をば外國のやうに取扱はうとするところから出た態度であらう。



※されどなほ云々 だがしかし、何といつても支那人ではなく、日本人であるにも拘らず、儒者ともあらう者が、自分の國の事を知らないで居られること  
でせうか。實に歎かましいことである。

※皇國の人に對ひては云々 日本人に對した時さうあらうこと（日本の事を知らないといふ——）はまるで支那人めいてゐていいかも知れないが……の意。

※から國人の間ひたらんには 若し支那人が日本の事を問うた時には。

※若しさも言ひたらん云々 若しさういつたとしたら、「自分の國の事さへ知らない儒者が、どうして他の國の事をば知ることが出来よう。」と、手を拍つて甚だしく笑ふことであらう。

※すべて何事も云々 物事はすべて先づ自國の事を

爲し遂げるべきである。自國の事を捨てて他國の事に彼これと手を出すべきではないのに、却つて他國の事を爲すのを賢明な所業とし、日本の事を樂しんだり、明らかにしたりするのをばかけた所業だと思ふだらうのが、日本の學者の悪い癖である。

※訂正して考へねばならぬ 例へば自然科学に於て外國の人文地理を研究したり、或は醫學に於て南米の黃熱病を研究したりする場合には、おのづから皇國の事から離れる場合などが出来て来るからである。由つて作者は次にそれに對する意見を述べてゐるのである。

※人文的學問 哲學、倫理、政治、法律、經濟、軍事、教育のやうにその國の民情、風俗等によつておのづから別個の發達を爲すものをいつてゐる。人文は廣義では人類の文明、人世の文明の義をいふ。

※金科玉條

最も貴重な法律若しくは規定の義。揚雄の「劇秦美新」に出てゐる。

※鵜呑

鵜が魚を呑むやうにた易く呑み込むこと。即ち意味をよく解せず早合點に呑み込むこと。

※曲解

ここは、事實を曲げて解釋すること。※それにかゝる云々 「それは」「行詰つた……」

にかゝる。即ち打開策が見當らないほど發展味の失せた政治、經濟、及びそれに關聯して起る社會問題、思想問題は我が國獨得の解決策によらなければ解明出来ないの意。

※肝要

必ず要用なこと。かんじん、かなめ。

※國性

ここは國の性質、國柄といった言葉が當る。國體や國民性、國情などを一つに籠めたもの。

※自己没却

自分自身の價值を見出さず卑屈になること。

※盲拜盲從

たゞひたすら他に拜跪して追隨すること。

※沐猴にして冠す

猿が冠をかぶつてゐる。十八史略西漢に、韓生が楚の項羽の譏つた語として出てゐる。楚人の粗暴なのを嘲り、衣冠をつけるがらではないと冷笑したもの。

※偏狹

片よつてひねくれてゐること。

※固陋

見聞が狭くかたくななこと。舊弊になすんで改進を好まぬこと。

※目を蔽ふ

ここは見えないふりをする義である。

※さりながら

とはいふものの。

※特殊な事情に條件づけられて 西洋獨得の事情を基として。西洋の學問思想は日本のそれと異なつた社會事情等によつて基礎からして異なつたものになつてゐることをいふ。

※彼を以て我を律す 「律す」は、標準とする、規定するの意。即ち、西洋の規準に無理に日本をあてはめようとすることをいふ。

※主客顛倒 主と客とが逆になること。ここでは、本來の位地が逆さまになり、西洋が主に日本が従になること。

※不測の禍 思ひもかけぬわざはひ。

※平田篤胤 出羽秋田の人。幼名正吉、通稱は大角、初名は胤行、後、篤胤と改めた。二十歳の時江戸に出て苦學力行した。二十五歳、備中松山の藩士平田藤兵衛篤穩の養子となつた。享保元年宣長の書を読んで感憤、その門に列なるに至つた。その學は古今和漢に通じ、佛書も研究した。殊に從來儒佛二教の影響の多かつた神道を、古神道の形に還元し、所謂平田派神道を確立して、遂に明治維新にまで大きな

投影を爲すところがあつた。天保十四年九月歿、年六十八。明治十六年正四位を追贈された。著書は「古史成文」・「古史徴」・「古史傳」等數百卷にのぼり、就中その講義の筆録たる「古道大意」の如きは凛烈な口吻が鮮明に現されてゐて面白い。

※伊吹於呂志 二卷。神道に關する講話を筆録したものである。門人小島元吉、千本松吉の序に「去し文化の十年ごろ、人々の需に依りて口づから講聞せられ、或は、記しても見せ給へるものなるが、この度人々の願によりて、かく上木して初學の人に見することとなれり。」とある。

※儒生 儒者に同じ。孔孟の學を修め、その教義を奉ずる學者。儒家。

※本として學ぶべき 學問の基本、大本に是非學ばねばならぬ……。

※順道 本道、當然ふむべき道。

※卑しき口ずさび ここは川柳をいふ。口ずさびは心に浮んだまゝの詩歌を吟ずること。そゞろにつくり出した詩歌。

※虎の鳴く云々 儒學をやり、支那の事情に通じてゐるはずなのに、では虎は何と鳴きますかと問はれて、さすが博識を誇つた儒者もまごついたとて、當時の支那崇拜者を軽く諷刺した句である。

※魯の國の云々 儒者が崇敬おかざる孔子の郷國魯

批評

嚴密に言ふと學問に國境のあるなしの二種を立てることは問題である。自然科学等の如き學問も、國々によつて相違を生じて、同じ生理學なら生理學でも、イギリスのとドイツのとフランスのとは相違があつたり、また日本や支那等と前記諸國のと趣が違つてゐたりすることは、橋田邦彦博士の持論であるが、また一方、數學の如きものは、本朝の和算が西歐のに比して劣らぬ位進歩してゐた事は、既に明白な事實である。また近年長岡半太郎博士その他が原子構造論や輻射論等の現代物理学の最大の問題に對する解答を提示して、物理学の世界的レベルに参加してゐる事など

を種々考證してゐる中に年が老いてしまつたとて、學問の末に走つた儒者の痛いところを衝いてゐる。  
※詮索 たづねさがすこと。もとめること。  
※根基 根本の基礎。  
※心構 決心。心のくばり方。覺悟。  
※他山の石 よその山から出る粗悪の石も、用ひて我が玉を磨くに足る義で、ここでは外國の學問思想も用ひやうによつては、我が國の學問思想を發展させる材料となるのたとへに用ひてゐる。

これは單に物質文明以上の問題で、むしろ精神文化の問題であるだけに、一體精神文化に國境があるかといふ疑ひさへ起つて来る。とにかく人間の知的所産を二種に分つことは普通になされる所であるが、これに國境有無を結びつける事は疑問であるかも知れない。

それでは何故作者はこの危険を敢へて冒したかといへば、國家の學に關する限り、わが國には傳統的精神が現存してゐるので、ここへ西洋の國家學を持たむことは非常な危険であるからである。つまり西洋の個人本位の國家、階級制の國家などといふものをあてはめて、直ちに日本の國家を論ずると非常に矛盾して来る。日本の國家は國家本位の天皇中心であつて西洋の如き階級を認めない。天皇の下一視同仁であつて、國家本來の面目上は君と臣との家族制の他、何物もないのである。そこでルネサンス以後西洋流の考へ方は、國家學に關する限り攝入されるわけにはゆかないといふ事である。この事は明言されてゐないが、論の眞意はここに在るのである。

何故この論駁をやつてゐるかといへば、この一事を主張しようとして外ならない。それであるから、西洋流の精神文化なるものも、國家學以外に、例へば都市計畫、社會施設とか、農村經營とかの方面には容れてもいい。何等拒まないといふのである。この點に關して實際世間には全く宣長の言ふのにそつくりの外國崇拜學者が居て、ドイツではかうだが、日本ではかうでないといったやうな言を往々吐くので、かういふ論議がなされるのも當り前の事である。この論の趣旨はかゝる言を吐く迷蒙學者に大鐵槌を下さんとするとところにある。彼等をして日本を思ひ起させようとしての破壊的情熱に驅られた議論に外ならない。

### 資料篇

#### 参考文献

日本文化の由來を考察し、その獨立を庶幾した内藤湖南博士の論文を左に掲げることにする。本課に對する絶好の参考資料になることと信ずる。

國民の自覺は常に政治的に最も早く生ずるが、眞に文化的思想的に自覺を生ずるには是より遙に遅れるのが常である。時としては自覺を生ぜずして終つた國もある。日本民族は流石に或る時代には思想的自覺を生じた。それは自分の見る處では蒙古襲來が最大の動機を爲したので、南北朝から以後、極めて徐々に文化的思想的の自覺を生じつゝあつて、最近支那以外の文化、思想を承け入れることになつてから、完全に支那から思想的に獨立した。

しかし今日でも眞の日本文化が形成せられてゐるや否やは頗る疑問であつて、思想の如きも、支那思想の拘束からは殆んど脱せんとしてゐるけれども、同時にまた西洋の思想の拘束を現に受けつゝある。文化の極度は藝術に於て著しく現はれるものであるが、日本の繪畫に徴してこれを見るも、古き支那繪畫の拘束は百年ばかり前からこれを脱せんと努めたのであるが、よし支那藝術の拘束を脱しても、それが支那藝術に地方色を加へたに過ぎないものであつては、眞に自覺し獨立したとは言へない。日本の寫生派の藝術の如きは即ちそれである。しかも亦、最近に至つて、そ

の藝術が動もすれば西洋畫の拘束に囚はれんとする傾きがあり、眞に日本藝術の獨立は前途遼遠なる心地がする。尤も他國文化の拘束を脱しないからとて、民族の生活を向上し、またそれを他の劣等な民族に感化を及ぼし、或は自己よりも先進の民族にさへも、却つて感化を及ぼすといふことは、絶無といふことはなく、時としては、それを以て自己の民族の文化だと考へることあるも、それは嚴密に言へば、決して民族自發の文化とは言ひ難い。

斯く歴史的に日本文化の由來を考へると甚だ心細い感がする。しかし是はまだ民族の若い爲であると考へ、將來眞に成熟期に入るのであると考へれば、前途の希望はまた大なるものあるともいはれる。たゞ民族は必ずしも幼少から老年まで順當に發達するとは限らない。苗にして秀でず、秀でて實らざる民族があるので、日本民族を斯かる不幸の運命に遭遇せしめず、順當なる發達を遂げしめ、世界の文化に貢獻すべき一大勢力となすのが吾々の責任である。

——日本文化史研究——

## 日本精神と日本武道

互理章三郎

### 解説篇

#### 作者

互理章三郎<sup>わたり</sup>。倫理學者、東京高等師範學校教授。明治六年兵庫縣に生れた。明治二十三年第一高等學校を卒業し、愛知縣立第一中學校教諭囑託を経て、東京高等師範學校教授兼教諭に任ぜられた。この間、視學講習會講師、教員檢定委員會臨時委員になつたことがある。昭和七年滿洲國へ出張を命ぜられた。著書に、「孔門之德育」・「少年鑑」・「青年鑑」・「王陽明」・「國民道德序論」・「同本論」・「建國の精神と建國史鑑」・「皇國の日本」等がある。

#### 教材

前課に於て日本精神の復興が現下の日本に於て急務中の急務である所以を學んだのであるが、前課で問題にされた日本精神は主として文化的方面であつた。いふまでもなく、日本精神には色々な特質があるが、これを大きく分けて見れば、文と武との両面がある。本課にはその武の方面が述べられてゐる。「海行かばみづくかばね、山行かば草むすかばね、大君の邊にこそ死なめ、かへりみはせじ。」——一旦緩急あれば、身を鴻毛の輕きに比し、義勇公に奉ずるの

が、日本國民の美點であり、その根本精神が武徳なのである。本課を講讀させることにより、日本武道の何たるかを知らしめ、文の道と同時に、益々武徳武道を練磨するやうにさせたい。

指導篇

扱方

世間にはよく尙武の精神をはき違へてゐる者がある。武道の盛んな學校の生徒などによく見る圖であるが、「衣至、袖至、腕」式のパンカラを装ひ、徒黨を組み、放歌高吟して街頭を練り歩き、果ては通行人に喧嘩を賣つたりする。こんなのは、日本武道の眞精神を理解したものとはいへない。雲助の亞流の無頼の徒である。本文に明示されてゐるやうに、日本武道の精神は殺伐を好むといふやうな小さいものではなく、大きく、氣高いものである。世界の平和を致し、我が皇國の隆運を無礙に開かうとする精神なのである。然も、我が國の武道は、平和を目的とする單なる手段ではなく、尙武の精神その物が直ちに平和を愛する精神なのである。

我が國は明治以來、數度外國を對手として戦つた。それは常に此方から好んで戦をしかけたことはなく、東洋の平和と國運の發展のため、已むに已まれず劍を執つて立つたのであつた。これを以て見ても、我が武道の精神は、平和を愛する精神と別物でない所以が知られる。この點を眼目として教授せらるべきである。

展開

第一節——賀茂眞淵は（から）兩者の關係を述べてみたいと思ふ。（まで）

日本魂の意義を述べ、日本精神と日本武道との不可分離の關係に及ぶ。序説である。

第二節——日本精神は（から）即ち我が日本の武道なのである。（まで）

先づ日本精神を全體的に見て、これを解説し、次いで部分としての武徳を抽出し、これを説明してゐる。即ち、日本精神は常時國家を支へてゐるが、一旦緩急あれば、それが武徳として現れて来る。その武徳を實際に施行行ふのが武道であるとする。

第三節——それで我が日本の武徳武道は（から）「兵は靈器なり。」である。（まで）

日本の武徳武道は神聖にして平和を愛するものであることを述べ、武道の象徴たる刀劍が、古來神聖視されたことを種々の例を擧げて説いてゐる。

第四節——我が國第一代の天皇を（から）この根本精神を離れて日本武道が何たるかを理解する事も出来ない（まで）

武道は國民道徳としては、奉公の精神といふ形を取ると述べ、歴史上の事實を引用してこれを立證してゐる。最後に武徳の淵源を求めて、建甕稲神の神徳を仰慕し、日本武道はこの武神を手本として進まなければならないと説く。

解釋

賀茂眞淵 岡部氏、字は參西、通稱は庄助、又衛士ともいふ。家號は縣居。遠江敷智那伊場村に生れ

た。荷田春滿に師事して古學を修め、江戸に出でては田安宗武に厚遇を受けた。明和六年歿す、年七十

三。「萬集考」・「冠辭考」・「祝詞考」・「語意考」・「歌意考」等の外、家集がある。

※高く直き大和魂 高く直きは形容。大和魂とはただに強いとか荒々しいとかいふのではなく、すつきりと高雅にして、純に正しきものであることをいふ。

※高き中に云々 卑しからず、高雅なうちにみやびな内容を持ち、純にして正しき中に雄々しい心を含んでゐる——これを即ち大和魂といふ。

※御國人 日本人をいふ。篤胤はよく皇國人の字を用ひ、これに對して支那人を赤縣人といつた。

※直 なほく竹を割つたやうにきつぱりと、そしてすなほなことをいふ。

※武士の 枕詞。普通はものふの數の多いところから八十又は五十にかけ、略して氏にもかける。萬葉

集卷三に「ものふのやそうち河のあじろ木にいさよふ浪の行方知らずも。」同じく卷八に「ものふのいはせの森のほととぎす今も鳴かぬか山のとかけに。」等の用法が見える。旅の枕詞のくさまくらが、「た」一字だけにもかゝることがあるやうに「やそ」から「や」にかゝり、しかも大和心と武士とが切つても切れぬ間柄にあるので、遂に作者のいふやうに「ものふの」は大和心の枕詞——（實際は序詞といつた方が適切であらう）となつたのである。

※根本的に一體の關係を 日本精神といふ場合、武がそれを構成する要素の一つであると同時に、日本武道といふ場合には必ず日本精神を根柢としてゐるから一體といふのである。

※體得 十分に會得して自己の實力とすること。

※皇國として 日本はすめらみことを中心として彌

榮えに榮えゆく國家であるとして。即ち世にありふれた國家と同一視せず所謂皇國意識の下に進展することをいふ。

※悠久の昔 はるかに遠い昔。

※一朝 ひとたび。

※これを要約すれば云々 これをつゞめて言つてみると、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉ス」と仰せられた教育敕語の御趣旨にあるやうな精神上の大意力が、即ち我が日本の武徳そのものであつて、この武徳を實際行動に起して用ひるところの道が即ち日本の武道なのである。

※猛威を振ふ云々 ここは日本の武徳武道は、一個人が自己の感情や利益の爲にその武によつて強い勢を示さうとするのではないの意。

※血に飢ゑ云々 他を傷けたり殺したりしたくて武

を振つたり、むごたらしく亂暴で殺伐なことを好んだりするのは、我が日本精神でも最も嫌ふ。——では何の爲にするかといふと、次に擧げた中外の平和、皇國の隆運の爲に武徳を振ふことには率先して爲すのである。

※尙武 武事を尙ぶこと。軍備をさかんにすること。

※平和の爲の武勇として云々 この文章は少し混沌としてゐるが、要するに前の「その實は一つ」といふ句を承けてゐる。即ち平和の次に武勇を置く（平和を目的とし、武勇を手段とする）のではなく、平和と武勇とは日本に於ては一つのものであると説いてゐるのである。語法を少し置きかへて見よう。「平和を最高（目的）とし最上の價值があるとして、武勇は第二價值（手段）のものとしてその下に置いたりするのではない。」の意。

高度に創造される 価値高く永遠性を持った平和が實現する。

倭ちはやぶる神の云々 皇國に傳はる神の教を身にしつかと懐きつつ、邪氣を拂ふ爲に佩びるこの武士の佩刀よ。單に惡魔を拂ふのではなく皇國の神々も教へのまに／＼太刀を用ひるのである。

歲德 大略頭註の通りであるが、歲德神とは歲首に當つてその一歳中の有徳の方位を占めるものとして祭られる神である。昔は各家共に明の方に向つて恵方棚を吊り、正月中は殊に奉祀した。

切味 刃物の物を切る鋭さ。

兵は凶器なり 兵は人を害ふものなので凶器といふ。國語越語に「勇者逆徳也、兵者凶器也、争者事之末也。」とあり、その他史記主父偃傳、尉繚子武議篇、韓非子韓篇、淮南子等に出てゐる。又老子第三

十一章に「兵者不祥之器、非君子之器。」とあるが同じ趣旨である。

靈器なり 前の凶器なりに對して用ひてある。靈妙不可思議にして神聖なもの意。

荒ぶる神等 古事記中卷、神武天皇の條にある。この荒ぶる神は、態野に於て天皇に刃向かつた土地神をいふ。

ことむけやはし 「こと」は「事依さす」の事と同じく、「むけ」は背いてゐる者を此方へ向かせる意、即ち歸順せしめることをいふ。「やはす」は同じく歸服させる意である。後の「はらひ平らげ」とあるのに對し、ここは平和的に解決する心持がはつきり現れてゐて、日本精神からいつても、平和的に事を進めることを最高基準とし、その平和手段に應じて服従せず力を以て我を襲はんとする者（まつろは

ぬ人等）に對しては、武の發顯があり（はらひ平けて）、而して皇謨の完成を見るのである。

白檮原宮 書紀に畝傍山の東南部檮原の地とあるが後世その跡を詳かにしない。今の官幣大社檮原神宮は書紀の文や口碑に徴してその宮址と思はれる。明治十二年創建されたものである。

知ろしめき お治めになつた。「知ろす」は「食す」「見す」「聞かす」等と同義語で、何れも身にとり入れる義。轉じて治める意になつた。平和的に統治せさせ給ふ我が皇室には「知らす」を用ひ、力を以て壓伏する他の場合には「うしはく」の語がある。

周易 易經のこと。夏の山を連山といひ、殷の易を歸藏といつたが共に傳はらず、今傳はる易は周の易でその經典を易經といひ、五經の一である。

神武にして殺さず 易經繫辭上傳に、「古之聰明叡

知、神武而不殺夫。」とある。神武とは人間以上の武力武徳の意味で、畏くも神武天皇の鴻業を贊してこの語を奉つたが、天皇の「ことむけやは」せ給うた武徳に對しても、又その後の日本武徳を形容する語としても、この周易にある「神武而不殺」などといふ小さい考へ方ではとても當るものでない。ここは、「ことむけやはし」「はらひ平らげ」「知ろしめす」といふ三語によつて始めて神武天皇の鴻業も、また延いては日本武徳も形容出来るが、周易の右の語句などでは、その一端をも窺ひ得ないと説いてゐるのである。

更に下級に及んだ 士農工商といつた封建時代の上下の區別からいへば、町家などで雇人を奉公人といつたことに當る。即ち初めは武士がその領主に仕へることを奉公といひ、武士を奉公人といつたが、

段々下つては町家に丁稚などに雇はれるのを奉公するといひ、そして雇人を奉公人といふやうになつたのである。

※群雄割據 多くの英雄が各々一地方を占領して勢をほしいままにふるふこと。

※封建の制度 一君主の治下に於て、貴族、豪族が封地を受領し、また地方に割據し、子孫をしてその領土を世襲せしめ、管内の政治を各自任意に取扱はしめた制度。郡縣制度に對していふ。

※各自の領主を云々 武家の忠勤は、封建時代に於ては各自の所屬してゐる主君に對して行はれたもので、日本國家(天皇)に對して行ふといふやうに國家的意味で爲されたのではないやうに見えるが、つまりところは、その主君を通じ奉公するといふので、やはり日本の爲に忠勤をはげんだのであつた。

※末造 末葉に同じ。造は至る義。末の方。

※しきしまの云々 本居宣長の有名な山櫻花の歌の下句に、元寇の情勢を拉し來つて武張つた歌としたもの。作者は未だ詳かでない。

※慷慨 いきどほりなげくこと。忼慨。

※作興 作もおこす、興もおこす、ふるひ起すこと。

※政權の返上 慶應三年十月十四日、將軍徳川慶喜は内外の形勢を察し、上表して大政奉還を奏請した。明治天皇直ちにこれを嘉納し給ひ、十二月九日王政復古の大號令を發せられた。ここに於て徳川幕府は十五代、二六五年を以て倒れ、賴朝が武家政治を創めてから、六八四年を以て、幕府の政權は古の如く朝廷に復したのであつた。

※版籍奉還 明治二年、全國の列藩主はその領し來つた土地人民を朝廷に奉還した。伏見、鳥羽の戦後、

國恩。」と歌はれてからは、これ亦國民の胸裏に残るに至つた。

※回天の偉業 時勢を一轉せしめるやうな大きなしわざ。ここは武家政治から天皇親政に引戻した大事業をいふ。

※源頭 いちばんのはじめ。ここは古事記、日本書紀、萬葉集等を見ると義勇奉公の事蹟が十分に見られるので、日本歴史のはじめといつたのである。

※建甕槌神 天孫降臨に先だち、豊葦原中國に降下し、大己貴神に皇祖の詔命を傳へ、以て中國を平定された。建御雷之男神とも、建布都神とも豊布都神ともいひ、官幣大社鹿島神宮の祭神である。

※經津主神 建甕槌神と同じく軍神。磐筒男神、磐筒女神二神の子。天孫降臨に先だち高皇產靈神の命を受けて葦原中國に降り、出雲の五十由狹之小汀に

朝廷は幕府及び幕臣の領土を沒收して朝廷の直轄としたが、諸大名はなほ舊態依然としてゐた。參與木戸孝允はその藩主毛利敬親に説いてその承諾を得、また大久保利通をして薩藩主に説かしめた。明治元年十一月、姫路藩主酒井忠邦率先上書してこの事を建白し、翌年正月薩、長、土、肥の四藩主連署して上書し、他の列藩もこれに倣つたので、二年六月、朝廷はこれを許し、その藩主を藩知事に任じて政事を執らしめた。

※七生滅賊 七生は佛教語で幾度も生れかはる義。四十二章經に「七死七生、便證阿羅漢」とあるが、この七生滅賊の語は大楠公湊川の戦にいはれて、萬世まで傳へられてゐるのである。

※七生報國 この語も右と同じであるが、軍神廣瀨中佐の正氣歌中に「誠哉誠哉斃不已、七生人間報國」



大己貴神父子と會し、遂に國土を譲らしめた。官幣大社香取神宮はこの神を祀つてある。

※この神進みて曰く云々 日本書紀神代卷下に出てゐる。「此神進曰、豈經津主神獨爲丈夫、而吾非丈夫者哉。其辭氣慷慨。故以即配經津主神、令平葦原中國。」とある。配へては「そへて」と讀む。「中國を平げしむ」と本文にはあるが、これは通釋にもある通り平げしむと讀みたい。

※自發的な 建甕槌神は選に漏れてゐたのに、自分から進んでこの大任をさせていたゞきたいと申し出たのでかういつた。

※凜冽 寒さのはげしい義から轉じて、ここは氣象のきびしいことに用ひてある。

※靈劍を下して云々 古事記によると、神武天皇御東征の際、熊野に於て全軍が突然昏睡してしまつた。

この時、高倉下なる者が一劍を獻つたところ、全軍頗に元氣をとり戻して進むことを得、その劍を以て荒ぶる神を仆すことを得たとある。而して天皇が高倉下にその靈劍を得た次第を問はれたところ、「己れ夢に天照大神、高木神二柱の神の命以ちて、建雷神を召して詔りたまはく『葦原中國はいたく騒ぎてありなり。我が御子等やくさみますらし。かの葦原中國はもはら汝が言むけつる國なれば、汝建雷神降りてよ。』とのりたまひき。ここに答へ申さく『おのれ降らずとも、もはらかの國平けし太刀あれば降してむ、この太刀を降さむ狀は、高倉下が倉の棟を穿ちてそこより墮し入れむ。』と申し給ひき。云々。」とて、靈劍が我が家の棟を貫いて降下し、その靈劍を直ちに天皇に奉獻した所以を述べてゐる。

資料篇

参考文献

戦争は人類社會に於て避くべからざるものである。而して一旦兵を動かした以上必ず勝たねばならない。戦に勝つには、兵士の質、武器の精銳も勿論大切であるが、最も肝要なのは武士的精神であると喝破する杉浦重剛翁の文を左に掲げる。「倫理御進講草案」中、「兵」と題する一課の抄録である。この文章は、日本が英國を援けて獨逸に宣戦する頃に書かれたもので、少し舊いが、その趣旨は現下の國情に照してみてもそのまゝ適合する。

支那の古代に於ける兵法の大家に孫子といへるものあり。「兵は國の大事、死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。」といへり。其の意を按ずるに、戦なるものは死生の定まる所、存亡の決する所、即ち國家の大事なり。故に戦を爲すは熟慮せざるべからずといふに在り。

戦は固より好んで之を爲すべきものにあらず。本來武といへる文字は戈を止むと書し、平和を意味するものなり。又名工岡崎正宗が刀を鍛ふる心中常に平和を祈願したりといふ。是れ武の本意なるべし。然れども方今國として戦争の準備なきは無く、孰れも多額の軍事費を支出して陸海軍を置き且つ之に相當する武器を備へ、又學校を設けて、軍事教育を施すことを怠らざるなり。是れ他なし。一朝大事あるに當りては敢然として起ちて戦はんが爲めなり。孫子が「無恃其不來、恃吾有以待之。」といへるは即ち常に兵備を整へ置くべきことをいへるものなり。

世に一派の論有り。遠からずして世界に平和圓滿の黄金時代來るべしといふ。世運の進歩したる果ては、或は此の如き時代の來ることなしと斷言すべきにあらざるも、現世に於ては戦争なるものは實に避くべからざるなり。故に圓滿の世を夢みて戦を忘れ、或は柔弱にして戦ふ能はざる國民は先づ現代に於て亡ぶるの他なかるべし。

戦争は人類の社會に於て免るべからざる一現象なり。有史以來五六千年、各國民の歴史は常に戦争の記事を以て充たさる。是れ戦争の免るべからざる證據なり。

凡て戦なるものは、多く人を殺し、同時に多大の費用を要するものなり。近き例を以て言へば、日露の戦役に我が國は二十億の金を費し、數萬の死傷者を出したり。露國側に於ては固より更に多數多額なるべし。故に戦は國家の大事なり。如何に國力の強盛なるにもせよ。戦を好むものは必ず其の國を滅ぼすべしと、古人の既に道破せられたる所、實例亦乏しからざるなり。

夫れ平和は萬人の望む所にして、國家の幸福なり。戦争は實に已むを得ざるに出づ。例へば我が國權を侵害せられ、獨立を危くせらるゝ場合、或は隣邦、或は訂盟國の爲に正義を取りて進まんとする時の如き是なり。斯る際には固より國運を賭して、大いに戦はざるべからず。既に戦へば大に勝たざるべからず、勝たざれば以て國を保つべからず。況や國威の宣揚をや。

凡そ戦の勝敗は兵士の良否、大將の武勇智謀、武器の精銳如何等によりて分るゝものなれども、最も肝要なるは武士的精神の如何に在りとす。

方今列強競つて其の軍備を擴張す。然れども單に兵數の大なるを以て勝を制すること難く、又武器の精良なるを以てのみ勝つべからず。露國の我が國と戦ふや、其の兵數、武器皆遙に我が國の上にある。而して連戦連敗す。是れ士氣の振はざるが爲めなり。故に徒らに兵を多くせんよりは、寧ろ其の質を精ならしむるを要とす。而して其の質を精ならしめんには、我が國固有の武士的精神を鼓吹して、以て忠勇の念を堅固ならしむるにあり。若し能く此の如くならば一以て十に當るは敢て難しとせざる所、大國と雖も恐るゝに足らざるなり。

今や歐洲全體に互りて戦塵空を捲ふ。而して我が國も日英同盟の關係上、英國を援けて獨逸に宣戦することとなりぬ。是れ正義の爲に戦ふものなれば、我が國の態度は俯仰天地に慚づるなきもの、宜しく大に奮戦すべきなり。

我國は建國以來尙武の精神を以て一貫するものなり。故に外國と戦ひて未だ嘗て敗れたることなし。今後に於ても益々此の精神を鼓舞し練磨し、常に正義の上に行動するならば、天下何者か之に敵せん。孔子曰く「足食足兵民信之」と。我が帝國は宜しく此の如き用意を以て列國の間に立つべきなり。

## 二もとある松（短歌新調）

## 解説篇

## 作者

島木赤彦——本名は久保田俊彦。もとは柿の村人と號してゐた。明治九年十二月十六日、長野縣（信濃國）諏訪郡上諏訪町に生れた。明治三十一年、長野縣師範學校卒業後、郷里の小學校の訓導や校長や諏訪郡視學の職を奉じてゐたが、四十一年、上總の蕨眞氏の手から雜誌「アララギ」が——伊藤左千夫氏を中心として——發刊されると同時に、その同人となり、大正三年（伊藤左千夫氏は大正二年歿）には郡視學を辭して、上京し、齋藤茂吉、古泉千樫、中村憲吉の諸氏と共に専ら「アララギ」の編輯に當り、爾來、終始一貫、アララギ派の隆興に努め、遂に「アララギ」の歌風をして現代歌壇を風靡するまでに立ち至らしめたが、不幸、大正十五年、胃癌に罹つて郷里なる柿蔭山房に歿した、年五十一。歌集には「馬鈴薯の花」（中村憲吉氏と合集）・「切火」・「氷魚」・「太虚集」・「柿蔭集」等があり、研究としては「歌道小見」・「萬葉集の鑑賞及びその批評」等があり、他に二三の童謡集、「島木赤彦全集」がある。

正岡子規——名は常規。俳句、短歌を明治に至つて大轉回をさせた人。慶應三年伊豫松山新玉町に生れた。明治十六年東京に遊學。大學豫備門を経て東京帝國大學國文科に學んだが、病の爲二十五年中途退學した。その後日本新聞

社の文藝欄を擔當し新俳句を提唱して月並調を破り、和歌の眞實の姿——萬葉へと返したのは人の知るところである。その堂々の論陣を張つて文壇に雄飛したのに引かへ、日清戦役に従軍記者として渡清した頃から得た胸の病の爲、殆んど臥床に過し、しかも日夜筆を絶たなかつたが、遂に三十五年九月、三十六歳を以て去つた。今その夥しい著作は、すべて「子規全集」全十五卷に收められてゐる。

若山牧水——名は繁。明治十八年八月二十四日、宮崎縣（日向國）東臼杵郡坪谷村に生れ、明治四十年、早稻田大學英文科を卒業した。初め小説家を志してゐたが、尾上柴舟氏の門に入り、前田夕暮氏等と車前草社を結び、明治四十一年に歌集「海の聲」を出し、四十三年、創作社を起し、短歌雜誌「創作」を發行した。大正四年以來は都の風塵を逃れて、或は三浦半島に或は沼津に、南國の風光に浸りつゝ、自然詩人として、靜かな作家生活を送つてゐたが、昭和三年歿した、年四十四。歌集に「海の聲」の外、「獨り歌へる」・「別離」・「路上」・「みなかみ」・「秋風の歌」・「行人行歌」・「朝の歌」・「白梅集」・「寂しき樹木」・「溪谷集」・「くろ土」・「山櫻の歌」等があり、なほ紀行集「旅とふる郷」・「海より山より」・「樹木とその葉」等がある。すべて「若山牧水全集」に收められてゐる。

木下利玄——明治十九年岡山縣足守町に生れた。明治二十三年伯父子爵木下利恭の養子となり上京、學習院に學び、歌を佐佐木信綱に學ぶ。三十八年東京帝大文科に入學、四十四年卒業、四十五年私立目白中學の講師となり、大正五年これを辭し、山陰、山陽、九州に遊び、旅に半年を暮す。大正十一年發病、十四年鎌倉大町にて歿、年四十。初めは信綱氏の微温な風を受けてこれを出られなかつたが、三十歳の夏、箱根仙石原に遊んだ時、新意を得て自らも「作

歌の本道に出た」とさへ言つた程著しい變化を起した。病床に就いてからはその傾向を進めて行つて、独自の境地を開拓した。歌集に「銀」・「紅玉」・「一路」等がある。

**與謝野寛**——嘗て鐵幹と號した。明治六年二月二十六日、京都市岡崎に生れた。同志社を半途で退學した外、學歴はない。上京後は、落合直文氏の門に入り、明治二十五年、直文氏が組織した淺香社に入つて、大町桂月、服部躬治、金子薫園、鹽井雨江、内海月杖、尾上柴舟氏等と共に、大いに直文氏の短歌革新運動に與つて力があつたが、三十三年、自ら新詩社を起し、雑誌「明星」を發行した。その門からは與謝野晶子、北原白秋、吉井勇、石川啄木、平野萬里氏等傑れた歌人を出し、いはゆる星董時代の中心、浪漫主義運動の主盟の觀を呈した。が、四十一年、自然主義勃興と共に新詩社を解散し、「明星」は第百號をもつて廢刊してしまつた。明治四十四年フランスに遊び、大正元年歸朝。昭和十年歿、年六十三。歌集に「櫛の葉」・「相聞」・「鴉と雨」・「灰の音」・「與謝野寛短歌全集」等がある。

**長塚節**——茨城縣結城郡岡田村の人。水戸中學校を中途退學し、以後は文藝に志し、明治三十三年より子規の門に入り、専ら歌道を研究し、いはゆる根岸派の歌人として雑誌「馬酔木」の同人として歌壇に現れ、香取秀眞、蕨眞、伊藤左千夫等と並稱され、その眞率素朴な歌調により、子規の短歌革新を助けた。後、小説にも筆を染め、長篇「土」を著して田園文學の先驅をなし、小説家としての確固たる地位を占めた。大正四年四月八日歿、年三十七。「長塚節全集」全六卷がある。

**中村憲吉**——明治二十二年一月、廣島縣雙三郡布野村に生れた。東京帝國大學經濟科の出身である。「アララギ」の

同人であつたが、昭和九年五月歿した、年四十六。歌集に「青稔」がある。「新芽立ちあさき谷間の大佛にゆふさり來る眉間の光。」「朝くらき林を行きて聞きにけり繁く木づたふ霧の雫を。」などの歌がある。

**古泉千櫻**——名は幾太郎。明治十九年五月二十六日千葉縣安房郡吉尾村細野に生れた。これといふ學歴はなく、明治四十一年上京し、伊藤左千夫氏の門に入つて歌を學び、齋藤茂吉、島木赤彦氏等と親しみ、「アララギ」の同人となつたが、大正十三年四月、「アララギ」から轉じて、「日光」の同人となり、後に關係を絶つた。歌集は「川のほとり」・「屋上の土」・「青牛集」等がある。氏は帝國水難救濟會事務員の職にもあつたが、昭和二年八月歿、年四十二。

**伊藤左千夫**——名は幸次郎。千葉縣成東郡の人。初め東京に出て明治法律學校に入つたが、眼疾のために退學して歸國した。明治十八年再び上京して勞役に従ひ伊藤並根について茶道を學び、また和歌を修めた。偶々正岡子規が和歌を日本新聞紙上に募集してゐたので、左千夫の名を以て應募し、常に選に入つた。それより次第に子規と交はるやうになつた。後、短歌雜誌「アララギ」を主宰し、アララギ派なる一つの歌風を歌壇に樹立した。島木赤彦、齋藤茂吉、古泉千櫻、中村憲吉、土屋文明等の諸氏はいづれも氏の門より輩出したのである。大正二年歿、年五十。著作は「伊藤左千夫全集」に收められてゐる。

**落合直文**——初めの名は盛光。萩之家主人と號した。仙臺の人。古學家落合直亮の養子となつて直文と改め、幼少から和歌を好み、伊勢の神宮教院に學び、後、東京帝國大學古典科に學んで中途退學。國語國文の革新を唱へ、新聲社を組織して、故森鷗外等と共に「柵草紙」を發刊した。又夙に短歌の革新をも圖り、舊型を脱したものを作つた。

高等學校教授、國學院大學講師となり、明治三十六年十二月十六日歿、年四十二。國語界に貢獻した功勞は多大で、著書には「大鏡註解」・「新撰歌典」・「國文評釋」・「日本文典」・「萩之家遺稿」・「萩之家歌集」及び「言泉」等がある。

### 教材

本課を學ぶまでに、平安朝より徳川期に至る歌人たちのものしたいくつかの歌を學んだ。本課は明治の中期より現在に至るまでの代表的歌人の作十首を盛つてある。萬葉は例外とし、平安朝以後明治の初期に至る驚くべき長年月の間に於ける短歌は、誇張していへば一二の例外を除いては殆どみな言葉のもてあそびであり、小才の技巧化であり、概念の敷衍に過ぎないものだつた。が、それに新しい生命を吹き入れ、花鳥風月以外に無限に自由な視野をもたせ、才より想に、空虚な技巧より充實した内容に、――換言すれば遊戯の歌より人間の内部生活そのものの表現である歌にまで更生せしめたものは、一にここにあげられた人々の力に外ならないのである。その各々がもつ圓光の金色の環は、生徒の心をしみくくと喜に浸らさずにはゐないと思ふ。

### 指導篇

### 扱方

本課に收むるところ、十人十首、殆んど近代歌人の面影はこれに盡きてゐるといつていいものがある。各首ともにその作者の特色を現した代表作であるから、各々の歌を通じて作者の歌風を窺ふと同時に、十首の全體から近代の歌

の略如何なるものであるかを知らせたい。

和歌の解釋には、先づ主語と述語との關係を見ねばならない。そして足らぬ成分はこれを補ひ、次にその直絶、倒絶を見た上、倒絶は正しい順序に直して見るべきである。直絶はまつ直ぐに切れてゐる、即ち文章が二つになつてゐるものである。

うす紅に葉はいち早く萌出でて、咲かんとすなり。山櫻花。

瓶にさす白芍薬に蟻つけり。季節の花のこのあたらしさ。

一つもて君をいはん、一つもて親をいはん。二もとある松。

第一と第三は四句直絶、第二は三句直絶である。倒絶は倒装法をなすものである。例へば、

（我は）たらちねの母がつりたる青蚊帳を、たるみたれども、  
これを散文的に成分の順序に書換へると、

（我は）たらちねの母がつりたる青蚊帳を、たるみたれども「すがし」と寝ねつ。

となる。斯うした後、通釋するのが適當である。一應通釋しておいて、然る後に朗讀させるがよい。幾度も朗讀させることによつて、その味讀や鑑賞が出来るわけである。

なほ挿入した筆蹟五首に就いては、これを一括して資料篇に解説して置いた。

### 解釋

※高槻の云々 高槻は高い槻の木、槻つぎけのことで、

榎科の落葉喬木——樺の一種。葉にはギザギザがあり、古はその材で弓を作った。頬白ほくしろは燕雀類の鳥。

體は雀より稍大きく、全體灰白色で、背は黒く、眼の上下に白色の帯があり、腹は白い。渡り鳥。一首の意は——高々と大空に枝を張つた槻の木に、頬白が渡つて来て、その高い梢にとまりながら、チチュクチチュクチチュクと鈴をふるやうな聲で朗かにさへする春となつたことだといふので、長い陰鬱な冬の續いた信濃の國にやうやく訪れて来た春の歡を、心いつばいに——文字通り張り裂けるやうな調子でもつて歌ひあげた歌である。

※いたづきの云々 病氣のいつ直るとも分らない身だが、ある春の日病室の前なる小庭に秋草花の種を播かせた。種は秋に花を出すといふ。この種にかけ

て花の咲く秋まででも無事に生命が続けばよい。いやいや、自分に代つてこの種が生きてゆくと考へただけでも、満足だ。秋草花の語に苦心してある。「知らに」の「に」は否定の助詞、萬葉等にみえる古語。

※うす紅に云々 春だ。空からも土からも春が微かに動いてゐる。もう早くも薄紅色に芽ぐみ出した山ざくら。その蕾はふくらんで、今にも咲かうとしてゐる。實直に目に見たまゝを敘して、しかも咲き出さうとする花の潛勢力を躍如たらしめてゐる。

※瓶にさす云々 部屋の隅に飾つた白い芍薬の花に一點黒く蟻がついてゐるのを詠んだもの。春の歌である。端的、印象的なところがねらひどころである。一讀その繪畫的シーンが目に浮ぶやうである。

※鳴きに鳴く云々 「あさまし」は興のさめる意。「かしがまし」は、かしまし(鷺)に同じ。かまびす

し、やかましの意。一首の意は、蟬の聲がいつまでも絶えないで喧しいのを嫌ふ意味で、もつと短くて美しい歌を歌へばよいのに、そんな氣の利いたものは知らないであらう、と嘲笑するやうな心持である。「あさまし長しかしがまし」と重ねた所に、蟬の音調がそのまま籠つてゐるやうである。これを擬聲法といふ。

※たらちねの云々 「たらちね」は母の枕詞に用ひる。一首の意は母が吊つてくれた青蚊帳を「ほんとにすが／＼しい氣持です。」と賞めながら、喜びながらはいつて寝る。難をいへば少し弛んではゐるが、それでもさつぱりした氣持である。まだ眞夏といふのではなく、蒸し暑いこともない夕には蚊帳の感じもほんとにすが／＼しいものである。

※夏山を云々 伯耆から出雲へと、山陰道の旅での

詠である。夏の山路を喘ぎ／＼巡り歩いて、ぐつしよりと汗、へと／＼に疲れた。それでも暑さも薄らいだ日暮頃、やつと隣の國の八雲立つ出雲の國へと下り著いたといふ旅の實感であらう。

※目の前に云々 信濃あたりの景色かも知れない。冬の歌。目の前に幾重にも重なつて見える高山がある。みな雪を載いてゐる。その上を鷹が一つ翔けてゆくよ。「しづかなるかな」で、一首を締めめてゐる。雪の山、何一つ音がしない、そこを音もなく速く鷹が翔けるといふので、靜中の動一點を鷹として、それが音なく神速に翔けた後、「しづかさ」が愈々深まるのであらう。

※みぎひだり云々 左右から、或は前と後から戯れかゝつて来る子供の相手になつて、二人を並べ負ぶつたり、或はいつしよに笑ひ騒いでゐる父親の姿が

躍如としてゐる。末句の「眞晝の家に」は歌全體に  
明るい感じを與へるために、頗る有效な働きをして  
ゐる。

※一つもて云々 この歌は「萩之家歌集」に「門松」  
と題してある。二本ある門松の一つは君を祝ふため

一つは親を祝ふためのものとの意で、意味は説明を  
俟たずして明らかである。なほこの松は仙臺の落合  
家の門にある松で、作者はこれについて父直亮氏か  
ら訓誡されたことがあるともいふ。

鑑賞

近代の歌は誰の耳にも入りやすく、またまざ／＼と目に映るやうに印象的に詠まれてゐる。在來の、概念によつて  
ものを見たりなどしてゐない。現代人が感じとる限りの世界から、切り抜かれて、快い韻をひゞかせながら、この目  
の前に取り出される。誰しもが經驗する世界の、どこにでも轉がつてゐさうな、あまりありふれてゐて却つて看過し  
易い美しさを取り出して見せる。さうして取り出されてみると、我々のものであるだけに、たゞ譯もなく感動する。  
すぐれた藝術家はすべてさうするのである。すぐれた歌ひ手が、心ゆく許りこま／＼と、感覺を行き届かせて萬人の  
聞きなれた子守唄を歌ふと、萬人はこれに和せずにはゐられなくなる。

資料篇

挿入筆蹟

筆蹟にはやはり作者の個性が溢み出てゐるから、その積りで鑑賞しなければならぬ。詠まれた歌に就いても、一  
應の解釋は必要であると思ふから、左に解説を加へて置く。

湖の水はとけてなほ寒し三日月の影波にうつるふ

赤彦

湖はいふまでもなく作者の郷土の誇り詠訪湖である。湖の水が解けた冷たさを更に強めるやうに輝きうつる三日月をはつきり  
捉へた敘景である。

病中

くれなゐの梅ちるなへに故郷につくし摘みにし春し思ほゆ

規

紅梅の花が散つてゆくにつれて思ひ出されるのは、幼時この時節になると故郷の野に土筆を摘んでくらしした楽しい昔のこと  
ある。あの頃のこと、この庭には梅しかないが、このやうな梅の樹が家にもあつた。土筆つむ頃にはその梅の花も散つて居つ  
た。病中、餘命を知つた子規が、短い半生の、わけても楽しい幼時の思ひ出に耽つて詠んだもの。ほんの梅の花のちる位のこと  
にもからして追憶に耽つて臥せてゐる病人の姿が思ひ浮べられよう。「なべに」は「に伴つて、と共に」の意。

光りつゝ沖を行くなりいかばかりたのしきゆめを載する白帆ぞ

寛

「光りつゝ」で、さん／＼とふりそゞろ陽光がまぶしく感じられる。すつきりした感覺のうちに、作者自身のロマンティック

二もとある松

な想ひが、沖の白帆にも投げかけられてゐることを忘れてはならない。

おりたちてこのたいかぜのよろしもよ原の大田をけふうゝるかも

千 櫻

思ひ切り壯大な歌である。田植をよんだものであるが、在來の歌は早乙女とか何とか色香をつけて概念的にしか歌はないのに對し、趣向を變へて見たものである。田の中へ大勢が降り立つて豊葦原の瑞穂國の大田を今日植ゑてゐる。なか／＼壯觀であるわい。餘り大きなきものをつけて、きものがしわだらけになつたと言ふが如き觀がする。

天地のよもの寄合を垣にせる九十九里のはまに玉拾ひ居り

左千夫

「天地のよもの寄合」は、西方に垂れ下つてゐる天が地と相接する、その寄合の意。「九十九里の濱」は、千葉縣（下總國）の東部太平洋に面し、北は犬吠岬より、南は、大東岬に至る長大な砂濱である。一首の意は、天と地とがより合ひ、果もなく廣大な垣のやうになつて四方をとり繞つてゐる九十九里の濱、廣い／＼九十九里の濱、そこに我は小石を拾ひまた拾ひつしてゐる事だといふので、「天地の四方のよりあひ垣にせる」といふ語によつて、あの一本の松もない、たゞ荒涼と果もなく廣がつてゐる九十九里の砂濱の廣大さを表し、そこのある一點に、小さな我が更に／＼小さな小石を拾ふと歌つておのづから對照的な效果をあげてゐる。

## 二 流泉啄木

（今昔物語）

### 解説篇

#### 引用書

今昔物語。すべて三十一卷。今その中數卷を闕く。印度、支那、日本の珍事異聞を集め類によつて分つてある。卷一から卷九まで天竺（印度）の部、卷六から卷十まで震旦（支那）の部、卷十一以下は本朝の部で、その中卷十一から卷二十迄は佛教、但し卷十八が關つてゐる。卷二十一は關ヶ、卷二十二は藤原氏の事、卷二十三は歴史の話と武勇強力の事、卷二十四、二十五は世俗と題し、卷二十六は宿報、卷二十七は靈鬼、卷二十八は更に世俗、卷二十九悪行、卷三十、三十一は雜事と題してある。この書は卷帙が多くて誤脱も少くなく、刊本の種類も少い。丹鶴叢書に收めてあるのは無比の善本であるといふが、本朝ばかりであつたのに、國史大系が出て始めて天竺震旦の部も添へられた。しかし惜しい事には卷十七から卷二十一まで五卷が關つてゐる。史籍集覽の改定本が出た時に、丹鶴叢書にも國史大系にも漏れてゐたこの書の卷十七、卷十九、卷二十の三卷がその第二十三冊（新加纂錄第二一）に收められた。井澤長秀の享保中に刊行した本は本朝の部のみで、しかも十訓抄等に出てゐる話を省いたり、文章も勝手に直してゐるから、仕様のないものである。著者が源隆國である事は、多分動かない事であらう。なほこの書については芳賀博士編



の「攷證今昔物語集」(全三卷)が現在では一番完全なものである。尤も同書は絶版のため入手困難であつたが、近く富山房の百科文庫から、普及本が出るから、讀書家の渴望は癒されるであらう。

教材

本朝に於ける説話集中最も古く最大の長篇である今昔物語の本朝部卷第二十四、第二十三話「源博雅朝臣行會坂盲許」を採つた。この話は「江談抄」・「宇治大納言物語」・「源平盛衰記等」にも載せられてゐる有名な話で、上代の貴族達がいかにその道に精進したかを知るに絶好なものである。

指導篇

扱方

古文の割合に敘述は平明なので、教授はさして困難ではあるまい。間々文法上の説明を要する箇所があるが、それはその都度解釋の項に詳述して置いた。文法上の注意を喚起しつつ、解釋を進めて頂きたい。

展開

綿々と続いた古文であるから、強ひて段落を分つには及ばないであらう。依つて一篇の梗概を掲げて置くことにする。――管絃の名手、蟬丸と博雅との二人の間に、琵琶の秘曲「流泉」「啄木」の二曲の受け渡しがあつたといふ、その間の挿話である。博雅は逢坂の關に住む蟬丸が琵琶の名手であることを聞き、何とかしてこれを聴きたいと願ひ、

色々手だてを用ひるが、蟬丸は盲の世樂人であつたから、一向望みも欲もなく、都へ出ることに等には全く應じなかつた。そこで、博雅は、蟬丸の命も知り難く、秘曲がその爲に絶えることを惜しみ、夜毎に蟬丸の庵のほとりに通ひ、三年間待つたが、その三年目の八月十五夜、蟬丸は琵琶をかき鳴らし衰れを催してゐる氣色である。そして彼が誰か風流を解する者が來ないものかと獨言するのを耳にし、博雅は初めて名乗り出で、ここにめでたく秘曲傳授を受けるといふ筋である。

解釋

源流泉啄木 「流泉」も「啄木」も琵琶で奏する秘曲の名。教訓抄卷八にも「祕事者石上、流泉、啄木。」など見えるが、詳しくは参考篇に引いて置いた。

源今昔 今より見れば昔の事。今は昔の事だが、昔話の冒頭に置く詞で、竹取物語に「今はむかし、竹取の翁といふものありけり。」今昔物語は各章皆この語で始まつてゐる。今昔物語の名はここから來てゐるのであらうか。

源源博雅 博雅の三位ともいふ。平安時代の廷臣。本文

流泉啄木

にもあるやうに醍醐天皇の皇子兵部卿克明親王の長子である。官從三位皇太后宮權大夫に至り、天元三年九月十八日薨、年六十三。世に博雅の三位と稱せられる。博雅は性音樂を好み、琵琶、笛、箏、箏ともにその妙を極め、その著に長竹譜がある。博雅と時を同じくした敦實親王の雜色蟬丸から琵琶の秘曲流泉、啄木を學ぼうとして、逢坂のその庵に至つて覗ふこと三年、遂に二曲を傳へられた事は本課に詳しく出てゐる。この博雅が嘗て月夜に笛を朱雀門あたりで吹

いてゐると見も知らぬ人が非常にいい音で笛を吹いて来た。博雅はこの人と月明の夜ごとに行きあつては吹いてゐたが、一夕試に笛を取換へて吹いて見ると稀代の名器であつた。その後も行く度に行きあつたが、笛に就いては一語もいはなかつたので、博雅はこの取換へた笛を愛玩して座右を放たなかつたといはれる。博雅の歿後は、その笛を吹くものがなかつたが、圓融天皇の御時、笛師淨藏を召してこの笛を吹かしめられると、その美音は博雅が吹くに劣らず、歎感斜ならず、今度は月夜朱雀門に行つて吹かしめられると、適と樓上で「なほ逸物なるかな。」といふ聲が聞えたので、この笛は鬼の笛であることがわかつたといふ。この笛名は葉二はふたといつて天下第一の名器であるやうな逸話が十訓抄、續教訓抄などに見えてゐる。子信明、信義ともに琵琶の名手であつた。

延喜 第六十六代醍醐天皇。延喜は醍醐天皇御宇の年號である。醍醐天皇の御諱は敦仁。宇多天皇の皇長子。御母は内大臣藤原高藤の女贈皇太后胤子。仁和元年正月十八日降誕、寛平元年十二月二十八日親王に立ち、五年四月二日皇太子に立ち、同九年七月三日元服、同日受禪、同月十三日即位の儀を行はせられた。攝關を置かず、延喜元年左大臣藤原時平等の讒によつて右大臣菅原道真を左遷された。固く奢侈を禁じ鋭意治を計り、後世延喜の治と稱せられる。延喜八年九月二十二日位を朱雀天皇に譲り同月二十九日御落飾あつて同日崩後せられた。在位三十三年、聖壽四十六。同十月十日山城宇治郡後山科に葬る。天皇は殊に仁慈ましまして深く人民を憐れませられた。ある冬の雪が降り風烈がしかつた時、人民の寒飢を思ひやらせられ、朕は税を着、租を食つてゐる

のに民は足らないで朕のみあるは王者の道ではないといつて畏くも御衣を脱がせ給うたことがあつた。嵐雪の句に「脱ぎ給ふ御衣は天下の襖かな。」といふのがあつた。

兵部卿 兵部省の長官。兵部省は令の制に定められた官衙の名で、八省の一。朱雀門の西掖に在る。和名を「ツハモノツカサ」と訓んだ。天武、持統の兩朝にはこれを兵政官といひ、兵政官長及び大輔の職名が日本紀に見えてゐる。大寶になつて、兵部省と改められ、淳仁天皇の天平寶字二年八月式部と改め、間もなく舊稱に復した。今日の制に比べると陸軍省に當ると見てよからう。

克明親王 醍醐天皇の皇子。本名は將順。二品兵部卿に任ぜられ、延長五年九月二十四日薨去。

管絃 管樂器（管で造つた樂器、即ち笛、笙、篳篥

など）と絃樂器（絃を張つた樂器、即ち琴、琵琶の類）とで、樂器の總稱であるが、又轉じてその樂器を用いて奏する音樂にも用ひる。この管絃の道といふのも勿論音樂の道である。管絃はまた「クワンゲン」とも讀む。

なん 物事を指示する助詞。「ぞ」に似て意味が少し弱い。

いみじ いちじるしい、また非常にすぐれてゐるの意。ここはどちらでも通じる。

微妙 すぐれて上手なこと。口でははれぬほど上手なこと。

笛 樂器の一。横笛である。普通長さ一尺四寸の竹管に七つの孔をあけたもの。

えならず 非常にすぐれてゐるのにいふ。いふにはれず。えもいはず。何ともいへず。一通りならず。

※村上上の御時 村上天皇の時。村上天皇は第六十二代の天皇。御諱は成明。醍醐天皇の第十四皇子で第六十一代朱雀天皇の異母弟。御母は皇太后藤原隆子。延長四年六月二日降誕、同年十一月二十八日親王に立ち、天慶三年二月十五日元服、同七年四月二十一日皇太弟に立ち、同九年四月二十日受禪、同二十一日即位の儀を行はせられた。心を政治に用ひられ、後世醍醐と並べて、延喜天曆の治と稱せられる。文學を好まされ、詩歌に秀で、嘗て救して後撰集を撰せられた。康保四年五月二十五日御落飾、法諱を覺貞といふ。同日清涼殿で崩御、在位二十一年、聖壽四十二。同年八月二日山城葛野郡村上の陵に葬る。

※その時に 同し時代に。當時。

※逢坂の關 山城と近江の境で東國の要路に當る所に置いた關。近江國滋賀郡大津市の南の逢坂山にあ

つた。名跡案内記によれば、舊關址は今の官道の西の山茶屋ヶ谷といふ所で、昔の通路は關山を下り、向山寺邊より東に出で關寺の門前を過ぎ、吾妻川の堤を通り、松本に出た所であるといふ。奈良時代には、三關（鈴鹿、不破、愛發）の中にはいらなかつたが、延暦の遷都以後重要な地となつた。關所創置の年代は明らかでないが、初めて廢せられたのは延暦十四年である。しかし弘仁元年藥子の亂に守備兵を置いて以來、事あるごとに兵を關址に備へた。文德天皇の時これを再興し、その後屢々興廢があつた。足利時代永祿八年に佐々木氏が新たに關を設けた事があつた。

※蟬丸 姓氏は詳かでないが、蟬丸の名で世に知られてゐる。宇多天皇の第八皇子式部卿敦實親王の雜色。性管絃を好み、琵琶を善くした。又和歌に巧で、そ

の詠は後撰集に一首、新古今集に二首、續古今集に一首ある。蟬丸は後に盲になつて世を遁れ、逢坂の關の邊に庵室を結び琵琶を弾いて心を澄し和歌を詠じては思を述べて世を過した。三條西實枝の説に、蟬丸を盲人といふのは甚だ信じ難い。後撰集雜一に、「逢坂の關に庵室をつくりて住み侍りけるにゆきかふ人を見て、蟬丸、これやこのゆくもかへるもわかれてはしるもしらぬもあふ坂の關。」と見えてゐるのでも盲人でないことがわかるといつてゐる。しかし契沖はこの歌は素性集に見えるといつて疑つてゐる。又源平盛衰記に蟬丸は醍醐天皇の第四皇子で、關のあたりを四ノ宮河原と名附けるといふ事が見えてゐるが、これ亦信するに足らない。或は仁明天皇の第四皇子人康親王のこととして盲人の琵琶ひきの祖とする説もあり、或は仁明天皇の時の道人で、常に髪を

剃らず、世の人翁と號し、又仙人ともいつたといふやうな種々な説がある。その後足利時代に「謠曲」蟬丸を作り、元祿十四年には近松門左衛門が、新に淨瑠璃「蟬丸」を作つた。

※敦實 宇多天皇の第八皇子。母は贈皇太后胤子。一品式部卿である。六條宮、一に八條宮また仁和寺宮と稱する。宇多源氏の祖。管絃の道を以て世に聞え、琵琶の祕曲流泉、啄木の二曲を雜色蟬丸に傳へた。天曆四年二月三日出家、法名を覺信（又覺眞に作る）といふ。康保四年三月二日（或は三年二月二日）薨、年七十五。

※式部卿 式部省の長官。式部省は令制に定められた官衙の名で八省の一であり宮城内朱雀門掖に在る。和名を「ノリノツカサ」と訓んだ。内外の文官の名帳を管し、考課、選敘の事を知り、朝禮を正し、學

政を總べ、その他、封賞、祿賜等の事を掌る。唐制の吏部に相當する。日本書紀天智天皇の十年正月の條に、法官大輔のりつかさの名の初めて見えて居るのは、即ち令制の式部省の吏員に外ならない。被官に大學、散位の二寮がある。淳仁天皇の天平寶字二年八月に文部省と改稱したが、間もなく舊稱に復した。

※ 雜色ぞふし 雜役、驅使の事を勤める無位の役人。服色の定めある衣袍を著る事が出来ないからこの名があるといふ。伊勢貞丈は雜色の名は衣服の色からでなく品の義で、雜役を勤める人品、即ち雜色は無位無官で賤しい者をいふので、後代家僕の品に雜色といふ名目があるのも、雜役を勤めるからであるといつてゐる。雜色の出仕する所を雜色所といふ。中世藏人所に雜色八人を置いて雜務を執らしめ、公卿の子孫及び諸大夫をこれに補したことが禁祕抄に見え、東

宮に雜色百餘人を置いたことが延喜式に見え、又院司、攝關家等にも雜色を置き、別當、長等を定めて總べしめたことが台記等に見えてゐる。武家の世になつてなほ雜色の稱があつて、貞丈雜記に「雜色と申すは中間より下り、馬屋の者より上りなり」など見えて、全く賤役の稱に用ひられるに至つた。吾妻鏡に雜色長、雜色、朝夕雜色、晝夜雜色、國雜色などの名稱の見えてゐるのは、みな幕府の番衆で、足利幕府になつても同様で、いづれも走衆、小舍人等とともに將軍の他行に供奉し、雜役に服するのを常とした。

※ 宇多法皇 第五十九代の天皇。諱は定省。光孝天皇の第七皇子で、御母は皇后班子。貞觀九年五月五日降誕。藤原基經の計らひで仁和三年十一月十七日即位。在位十年。その間顯著なる事件は、阿衡の紛議、儒

士の分争、ついで菅原道眞の拔擢登用がある。寛平九年七月三日位を皇太子に讓つて朱雀院に居り、又宇多院、六條院に遷らせられ、世に亭子院のみかどと申す。昌泰二年仁和寺に入つて落飾し、空理と稱し、灌頂の後又金剛覺と申す。又世に在位中の年號で寛平法皇とも稱へる。法皇の稱はこの天皇から始まる。承平元年七月十九日崩御、聖壽六十五。大内山の陵に火葬した。寛平遺誡は御子醍醐天皇の爲に作られたのである。歌集並びに御記（殘篇）がある。法皇は佛門に入り給うた太上天皇の稱、禪定法皇。

※ 年頃としご 年來。  
※ 然る間 しかある中に。さうする間に。  
※ この道 管絃の道を指す。  
※ あながちに好む むやみにすく。非常に好む。  
※ 極めて聞かまほしく 至極聞きたいと。

※ ことやう 異様。風がはり。  
※ 人を以て 使の人をやつて。  
※ 内々うちうちに 内密に。それとなく。  
※ など 何故。何うして。  
※ 思ひかけぬ所 思もよらない所。意外な所。琵琶の妙手であるのに、京に住まず、逢坂あたりの邊鄙な所に住むのを暗になじつたのである。  
※ かし 語の末尾につけて、その意を強める感動詞。  
※ よの中は云々 立派な宮殿もむさくるしい賤の葦葺屋根も、上には上があり、下には下があつて、これが最上とも最下とも限りがないから、この世の中は、どうしてもよいから暮しさへすればよいのでございませうの意。「過してん」は「過しませう」といふくらゐの意。「てん」は未來の助動詞である。この「過してん」が新古今集には「おなじこと」とある。

※みやびの心 風流な心。「みやび」はみやびたこと。即ち美しく氣高く風流なこと。鄙俗でないこと。風雅、優美。

※世に絶えぬべきことなり 蟬丸は敦實親王の秘曲流泉、啄木の二曲を愛して、敢へてこれを人に傳へなかつた。それで、蟬丸が世を去れば、それにつれて流泉、啄木の秘曲もこの世から跡を絶つてしまふ。かまへて 待設けて。

※これが弾くを 蟬丸が流泉、啄木の曲を弾くこと。今今や弾く今や弾く 今弾くか、今弾くかと待設けてゐる意。

※三年といふ云々 夜な／＼通ひはじめて三年目の八月十五日の夜。八月十五夜（陰曆）は名月の夜である。即ち中秋の月の晩。

※うは曇る 上がくもる。上べがしろすむ。うすぐら

くなる。

※興 おもしろさ。興趣。

※弾くらめ 弾くがあらう。「らめ」は推量の意をあらはす助動詞。「らむ」の已然形、「こそ」に對する結び。

※かき鳴す 搔鳴らす。琵琶（又琴など）を撥（又は爪）で弾ずること。

※もの哀れに思へる氣色なり 興趣をそゝられて居る様子である。しみ／＼と深い感慨にうたれて居る様子である。

※心をやりて 心を慰めて。氣をはらして。

※詠する うたふ。聲を永く引いて詩歌を歌ふこと。又詩歌をよむ即ち作ることをいふ。ここは自作の歌を琵琶に合はせて詠つたのである。

※逢坂の關のあらしの云々 第五句「世をすこす

とて」が續古今集には「世をすぎんとて」とある。一首の意は逢坂の關の附近は嵐もはげしく吹いてまことに心細いところであるが、自分は盲で世の交りも出来ぬ身であるから、ただ世を過さうばかりに無理にゐたのである。「しひて」は「強ひて」と「目しひて」と兩方にかけてある。

※我にあらぬすきもの 自分以外の風流人。すきもの」は數寄者で、ものすきな人。その道に熱心の深い人。

※心得たらん人 情趣を解して居る人。

※これに來たれ もちろん「これに來たり」といふべきを上「こそ」の係りがあるから「來たれ」と結んだので、ここに來てあり、來てゐるの意。

※かく申すは かやうに申すのは。かく申すのは。※おはす 「在り」「居り」「來る」「行く」の敬語。

※しか／＼の人なり 「しか／＼」はかやう／＼の意。ここで博雅が自分の姓名身分等をうちあけたのである。

※手 てぶり。調子。源氏物語若菜の卷に「しらべことなる手二つ三つ」とある。ここは弾き方くらゐの意。

※故宮 おなくなりになつた宮。即ち敦實親王。

※件の手 前の箇條。即ち前項の流泉、啄木の手を指す。

※傳へしめてけり 傳へさせた。

※具せざりければ 持つて來なかつたから。

※口傳 博雅は琵琶を持つて來なかつたので口傳たへで受けたこと。口傳は口頭で言傳へること。口で傳授すること。また「クデン」とも訓み、秘密であつて文書で残し置かぬ意と、文筆では到底書き盡せぬ

程幽玄深遠な意との二つの意味があるが、ここでは當らない。

※返す／＼ 幾度も。

※これを思ふに 博雅の藝道に熱心なことに感じて作者が感想を洩らしたのである。

※もろ／＼の道 それ／＼の道。すべての道。學藝などのすべての道をいふ。

※この如く 博雅が藝道に執心したやうに。

※それに それにもかゝはらずの意。

※近代 近ごろ。

※末代 降つて衰へた時代。末代（又は末世）といふのは、末は澆末（澆季ともいひ、道德風俗等の輕薄に悪くなつた時代の意）。代は時代の義で、佛教思想では釋迦の滅後、年代が多く經つに従つて時勢、根柢ともに劣悪になるとしたから、何でも昔より今の

世は末になつて濁つて來たと解し、一般に現代を末代と思ふやうになつたのである。餘り深い意味に解さなくてもよいのであつて、たゞ現代の意に解すればよい。

※達者 物事に熟通してゐる人。學術、技藝に通じた人。達人。

※卑しきもの 身分が貴からず、位の低いもの。

※宮 故宮。敦實親王のこと。

※極めたる上手 琵琶をじつと聽きすましてゐて、

それから自分でその奥義を極め知つたほどの上手の意。「極めたる」を副詞の「極めて」と混同してはならない。

※語り傳へたるとや 語り傳へたといふことである。「や」はいたく感じた時に發する感動詞として用ひられてゐる。「よ」に同じ。

鑑賞

かうした物語は音樂に限らず、歌や畫やその他の藝術にも多く傳はつてゐる。そのことは日本の國民性の一美點を現はしてゐるもので、日本人には昔から、敢へて中世を俟たず、王朝の昔から、學藝のために生きるといつた純粹に獻身的な態度があるのである。藝といつたものは、たゞに人を樂しませるためのものではない。單なる娛樂ではない。純粹につきつめてゆくと藝が藝のためであり、人は藝のためにあり、藝のために働くといふことになるのである。それから荷風の「歌行燈」にも見えてゐる様に日本の藝人は、その藝の爲に骨身を削る思ひをして修業し、藝のために潔く死んでゆく。凡てが凡てさうでないのは、それは仕方のない事であるが、理想はかうであり、またその理想に依つてこれまで生きて來たのである。また今もさうした傳統が存してゐる。

この氣風はまた、國家の爲に欣然死に就くといふことにも現れてゐる。みなこれ滅私奉公であり、私を輕んずることである。歐人はこれを無自覺、盲目的といふかも知れないが、實は歐人もやがてこれを見習はなければならないのであつて、人間存立の理法からいふと、これが正しい生き方であり氣風である。藝人が藝のために死ぬのも、これ藝のため、藝をして世に在らしめんが爲であり、人々が私を滅して奉公するのわが家族、同胞の住む國家のためである。いひかへれば、家族、同胞のために死ぬのである。これが若し個人のための國家ならば、これ程矛盾する事はない。即ち自分は自分を生かしてくれる筈の國家の爲に死に就かせられ、殺されるのである。

ところが我が國の場合では、さうでない。「私」は家族同胞を救ふ爲に死に赴くので、家族や同胞の國家のために死

ぬのである。決して自分を生かしてくれる個人本位の國家のためではない。いはゞ西歐の國家が利益社會的なるに對し、日本の國家は共同社會的である。血盟的である。それ故、藝のために死するのと同様の趣を呈して來る。即ち眞に「公」のため、私よりも大なるもののため、「私」と「私」との集りである以上に「私」の出て來る地盤なるもの爲に、私より遙かに大なるもの爲に死ぬのである。してみると、日本人の氣風としては、藝とか「私」の地盤とかのある絶對的存在のために生き、また死ぬといふ宗教的などころがあるのである。これは一般に人間存在の理法からいつて正しいのである。かう生きなければならぬのである。

### 資料篇

#### 關係文獻

祕曲「流泉」「啄木」の由來は、源平盛衰記卷三十一に次の如く見えてゐる。

抑と流泉の曲とは、都率とせつの内院の祕曲なり。菩提樂とはこの樂なり。彌勒菩薩常にこの曲を調べて、聖衆の菩薩心をすゝめ給ふ故なり。その聲歌に曰く、三界無安、猶如火宅、發菩提心、永證無爲とぞ響く。漢の武帝の仙を求め給ひし時、内院の聖衆天降つては、武帝の前にてこの曲を調べ給ひし時、龍王竊に來つて南院の泉底に隠れ居て、これを聽聞せしかば、庭上に泉流れて滿ちたりしより、この曲をば流泉と名附けたり。我が朝には延喜第四の皇子會

坂蟬丸の、琵琶の上手にて、天人より傳へられたりしを祕藏せられて、更に人に授け給はず。博雅三位三年の程夜々關屋に通ひつゝ傳へたりしを、三位もこれを祕藏して、朝あさく人に傳へざりけり。啄木といふ曲も天人の樂なり。本の名解脱樂といふ。この曲を聞く者は生死解脱の心あり。その聲歌にいはいはく、我心無礙法界同、我心虚空其本一、我心遍用無差別、我心本來常住佛とぞ響く。震旦の商山に仙人多く集つて、偷かにこの曲を弾じけるに、山神蟲に變じつゝ、木を啄む様にもてなしてこれを聞きけるより、啄木とは申すなり。この樂を彈ずるときは、天より必ず妙華降り、甘露定まりて海老尾に結びけり云々。

二二四季小品

諸家

解説篇

作者

中島廣足——國學者。初名春臣、通稱太郎、樞國又は田翁と號した。熊本藩士。本居大平の門人となつて國學を研究し、安政三年大阪に赴き、門戸を構へて子弟を教養し、門弟二百餘名に及んだといふ。文久元年藩の國學教授となり、文久四年歿、年七十三。

香川景樹——江戸時代の後期、京都にあつて歌壇の中心勢力をなし、門下から熊谷直好、木下幸文等を出して、歌の新機運を將來せしめた人。通稱銀之助、後、眞十郎と改めた。名も初めは純徳といひ、後、景樹と改めた。桃園、梅月堂と號した。父は林善兵衛、鳥取藩士で景樹はその二子である。景樹は十八歳の時京都に上り、鷹司西洞院等諸家に仕へ、歌を香川景柄に學んだ。後、香川家の養子となる。文化元年養父と歌道の上の意見が合はず衝突、分れて一家を成したが、猶香川姓を稱し、徳大寺の侍士となつた。天保十四年三月歿、年七十六。

清水濱臣——國學者。村田春海の門下。醫者。姓は藤原。通稱、玄長。上野不忍池畔に住み、泊酒舎と號した。文政七年八月歿、年四十九。

藤井高尙——國學者。本居宣長の門下。備中吉備津宮の祠官。正五位下長門守。松舎と號した。雅文に巧みであつた。天保十二年八月十七日歿、年七十七。

伴蒿蹊——國學者。名は資芳、蒿蹊はその號、閑田子とも號した。近江の人。京都に出て有賀長伯、武者小路實岳の門に入り、國學、和歌を學び、遂に一家を成した。文化三年歿、年七十四。

引用書

- 樞國文集——三卷。中島廣足の著。
- かるかや集——二卷。景樹の門人松波資之の著。
- 泊酒舎文集——八卷。清水濱臣の著。
- 松の落葉——四卷。目錄と序一卷、藤井高尙の隨筆集。
- 閑田文章——五卷。伴蒿蹊の文集。

教材

江戸時代の有名な國學者の隨筆五篇をとつた。みな長くて十數行の短文である。いふまでもなく王朝以來の美的感覺でものを認めてゐるのであるが、これは全く日本の光榮ある傳統となり切つてしまつてゐる。ものあはれを感じる風流心は日本人の獨創であると誇つてよい。



指導篇

扱方

一は春雨、晝から宵、夜にかけてしめやかに、こまかな情趣、二は初夏のさわやかな風情を寫し、三は秋の寂寥たる村里に響く砧の音を寫し、古來名文として推賞せられてゐるもの、四は晩秋の山里の景趣を寫し、五は冬籠を老人の蕭然たる胸中を述べたもの。いづれもみな擬古文を以て綴られた——今の言葉でいへば正に珠玉の散文詩である。五篇それ／＼に優れたる特色を持つてゐることは、いふまでもないが、中にも二の「風鈴」は、文中の風鈴の文字なくして、この風鈴の幽趣を捉へつくし、描きつくしてゐるその妙筆に注意すべく三は砧の哀切極りなき、——否、筆者「聞く人の心の寂しさ」が惻々として迫つて來るのを覺えるではないか。五は文章として五篇中最も優婉といふことが、出來るものであるが、文中「こは老の心を寫すとやいはん云々」の節の面白味を指摘したいところである。

解釋

春雨

※あや 文、種々の色彩又は模様。ここでは水上にで  
きる波紋のこと。

※深く霞める ふりこめるこまやかな春雨のために。  
※しをる しなひたわむ。ここでは雨滴にぬれてしを

しをとなつてゐるさま。

※そこはかとなく 分明ならず、どことなしにの義。

※いといたう いといたくの音便。非常に甚だしく  
の意。「いと」の語氣を強めた意味である。

※をかし この場合では趣味がある、興味がある、な  
どの意。

※まして いよ／＼。

風鈴

※風鈴 形は鐘に似て小さく、中に舌があり、金屬製  
である。風のまに／＼鳴る。軒などに吊して、その  
音を賞する。風鐸とも書く。本文「かるかや集」(上  
下二卷)に「佛光寺の君の仰せにて、やがて書ける  
風鈴の詞。」として出てゐる。

※かの入相云々 風鈴は風あるごとに音を立てて、

※しめやか おちついて物靜かなこと。しんみりと  
してゐること。

※今ひとときは なほ一層の意。晝よりも一層。

※また／＼く 目叩くの義。めたゝきする如く灯がちら  
ちらすること。

※ほのか 見聞の分明ならぬさまにいふ。ほんのり。

或は風が月の雲を拂つたの知らせ、或は花の散り  
ゆくのを告げる。鐘の入相や曉の時刻を一定して撞  
鳴すなどは、全く比べものにならないほどに趣が  
深いといふ意。

※入相、曉 入相の鐘(暮六つ——夕方六時頃)と曉  
の鐘(明六つ——朝の六時頃)と。

※水無月 陰曆六月の異稱。

※かげろふ 「かげろふ」の延音で、影を作つたり、ぼんやりと煙つたりすることにいふ。

※そよめく そよ／＼と音する。源氏物語、若菜の巻に「なつかしううちそよめく音なひ、あてはかなりと聞き給ひて。」

きぬた

※きぬた 砧。衣板（きぬいた）の約語。槌で布帛をうつに用ひる木または石の臺。布帛を白く晒し、光澤を出すために用ひるもの。又それをうつことをいふ。

※しきる 度重る。しげくなる。  
※たゆむ ゆるむ。ここでは砧をうつ間がゆるやかになる意。「しきるもたゆみ」は、しきりになるかと思へばまた間違になり。

※聲あはせたる 風に木の葉がそよぐ音と、風鈴の音が交響すること。「あはせたる」は、あはせたるが。

※物にも似ず 他に似るものもない。比べものない程趣が深い。

※雁がね 雁が音。即ち雁の啼聲。後、雁そのものをいふやうになつた。ここでは前者の意。

※きぬたをさそふ 砧の音をよび出し、自分の聲に應じさせる。「雁がねに通ふ」は雁の聲と一緒に交響する。

※あな ああと同じ。感歎の詞。  
※そも 抑。そも／＼。事物の由来を説起す時冒頭に

用ひる語。

※打つをり 砧を打つをり、節、即ちここでは秋。

秋の山田

※あやしの小屋 いやしくみすぼらしい小家。

※賤の男 身分のいやしい男。賤の女の對。

※ひた 引板の約語。鳴子と同じ。ひきたともいふ。小さな竹管を糸で連ね板につけ、繩をつけて引けば鳴る。その音で田畑を荒す鳥獸を驚かし追ふのである。

※谷水の流にかけたるひた 水流を利用して、自然に音するやうに装置した鳴子。「おのれと」は、おのづから、自然に。

※とりあつめて あれやこれや種々様々の情景が一起つて。源氏物語、夕顔の巻に「白妙の夜打つ砧

※皆あらず みな當らない、みなさうではない。

の音もかすかに、こなたかなたに聞きわたされ、空とぶ雁の聲、とりあつみて忍びがたきこと多かり。」

※もる 見守る、見張る、番をする。「もるとはすれど」は見張をしようとは思つてゐるけれど。

※うちまどろむ 「うち」は接頭語。目蕩（まどろ）むはちよつと寝る。我知らず睡る、とろりとする。

※音なひ 音なふ（響く）こと。ひびき、物音。後、訪問の意となつたが、ここでは勿論前者。

※何のかひよ 見張をしてゐるのは何のためであるかきゝめがないではないか。鹿が恰もこんなことをいつてゐるやうに鳴いてゐるといふ意。

※いぎたなさ 寝ぎたないこと。容易に目がさめぬこと。ねばうさ加減の意。

冬のこゝろ

※紅葉を限りに 紅葉を最後として。木の葉の色づくのを最後としての意。紅葉は、すべて木の葉の色づく意で、その色は紅と限られてゐるわけではなく、黄でも赤でもよいのである。

※冬がれ 冬になつて草木の葉の凋落して、また「冬がれ(冬枯)」といふ名詞に用ひることもある。

※木の芽はる雨 木の發芽を促す春雨の意。「はる」には春と、張る 發芽する)の意がかけてある。

※それもいつしか染めぬべき云々 その時雨もいつの間にか染める葉がなくなつてしまふと。時雨が草木の葉を染めたがその葉も凋落して、最早染める

※いさめ顔 諫める様子。「いさむ」は人にその非を告げて改めしめること。

ものがなくなつてしまふとの意である。

※隙行く駒のほども云々 白駒が壁の隙間を過ぎるやうに迅速なものであるとの意。白駒の意とする説と日影の意であるとする説がある。莊子知北遊篇に「人生天地之間、若白駒過隙、忽然而已。」史記留侯世家に「人生一世間、如白駒過隙。」同書魏豹列傳第三十に「酈生説豹約謝曰、人生一世間、如白駒過隙耳。」とあつて、その註に「索隱曰、莊子云、無異驥馳過隙、則謂馬也。小顔云、白駒謂日影也。隙壁隙也、以言速疾若日影過壁隙也。」とある。

※振分髪 古の小兒の結髪形の名。八歳頃まで髪

末を肩に比べて切り、頂から左右にかき分けて垂れたもの。伊勢物語に「比べ來し振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき。」

※うなぬ子 髪を項の邊で切つて垂れてゐる兒童。「うなぬ」は項居の義であるといふ。髻髪また垂髪と書く。同様の女兒を「うなぬをとめ」といふ。ここで

は前に「振分髪」といふ語があるから、幼童の意に解して置いてよ。

※大人しくなりぬ おとなしくなつた。「大人しく」は大人らしくの意。

※やがて老のはじめにて 即ちそれが老年になる出發點であつての意。

※つくづく思ひ比べて よく／＼少壯の時と比較し考へての意。「しも」は感動詞「も」に、語勢を強め

るため「し」を添へた助詞。

※埋火 灰の中に埋めてある炭火。

※さこそ見苦しと思ふらめ さぞ見にくいと思ふことであらう。

※我もまたしかぞありし 我も少壯の時にはかうした老人の姿を見て、そのやうに見苦しいと感じた経験があるの意。

※少壯いくばく時ぞ云々 これは、漢の武帝のつくつた有名な「秋風辭」の末句である。文選に「上行幸河東、詞后土、顧視帝京、忻然中流、與群臣飲讌、上歡甚、乃自作秋風辭曰、秋風起兮白雲飛、草木黃落兮雁南歸、蘭有秀兮菊有芳、懷佳人兮不能忘、泛樓船兮濟汾河、橫中流兮揚素波、簫鼓鳴兮發棹歌、歡樂極兮哀情多、少壯幾時兮奈老何。漢の武帝は名は徹、景帝の子、位にあること五

十四年、大いに政を整へ、學を好み詩文を善くした人。「少壯いくばく時ぞ云々」は青春は去り易く老境に入ることは何ともしやうがない。老年にならずにゐることは出来ないの意。

※ 唐詩。漢詩。大和歌（和歌）に對する語。

※ 徒に朽果てぬる事 我が身の無爲にして老衰してしまつたことは。

※ 前の車の覆るを後の車の戒 前に行く車の覆つたのを見て後の車がその過失を再び繰りかへさぬ戒とするの意。先人の失敗に鑑て、後人が失敗を繰りかへさぬやうにせねばならぬことの譬で、史記、賈誼傳に、「前者覆、後車戒。」とある。

※ 我にな倣ひ給ひそよ 私の眞似をなさるな。私のやうな、失敗をせぬやうにと、少壯の人に忠言した語。

※ 冬は歳の餘り 冬は一年中に於て讀書に最も適當してゐる季節であるの意。讀書に最も適當してゐる

のは冬と夜と陰雨の時との三つとせられ、これを三餘といふ。これは支那の魏の董遇の言に基づいた語で、魏略に、「或問三餘之意、遇言、冬者歳之餘、夜者日之餘、陰雨者時之餘也。」とある。

※ この頃の雪を集め 支那の古人が雪を集めて讀書したやうに苦學しての意。晉書、孫康傳に「孫康少くして清介、交游雜ならず、家貧にして油なし。嘗て雪に映じて書を読む。後に官、御史大夫に至る。」とある。「螢雪の功」といふ熟語になつてゐるが、螢の方は、晉書に「車胤字は武子、幼にして恭勤博覽、貧にして油を得ず。夏月練囊を以て、數十の螢火を盛り、書を照してこれを読む。夜を以て日に繼ぐ。後に官、尙書郎に至る。」とある。

※ 空しくないね給ひそ 空しく——むだに、何もし

ないで寝給ふ勿れ。 空言はまほし 少壯の人に對して言ひたい。

※ 老いて益々壯なるべしと勇みし人 馬援を指す。馬援は茂陵の人。字は文淵。後漢の光武帝に仕へ、伏波將軍となつて交趾を討つて還り、「男兒かならず邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべし。」と壯語した。武陵五溪蠻の反した時、年八十餘で、自ら出征を請ひ、鞍に據つて顧眄して勇氣の衰へぬことを示すと、帝は「豊饒たるかな、この翁や。」と感歎した。しかし戦利あらず、病んで歿した。後漢書、馬援傳に「少有三大志、嘗謂賓客曰、丈夫爲志、窮當益堅、老當益壯。」

注意

擬古文は難解のため、また生徒の趣味に縁遠いため、恐らく歓迎せられないであらうと思ふ。然し、上級學校の入

※ 己が類にはあらず 私とは全くちがふ。私にはさういふ眞似は出来ぬ。

※ ひたやごもりに ひたすらに家に籠つてゐて。家にばかり籠つてゐるさまにいふ。「ひた」は、ひたすら、「やごもり」は「屋籠り」の意。

※ ねぶりは宵より兆して 宵のうちから睡けがさして来て。宵は夜のはじめ、晝のはじめを朝といふのに對する。

※ 夜深くは 夜更には、夜明にならぬうちに目がさめることをいつたのである。

※ こは老の心をうつすとや言はん云々 これは全文にかゝつていふのである。「こは」はこの文書はの意。「うつす」は寫すの義である。

學試験問題には依然としてこの種擬古文が多く提出される。故に受験に重きを置く學校では、大抵擬古文の抄本を課してゐる。とにかく生徒の實力を附けるには、特に本課の如き教材に於て、解釋と文法に力を注ぎ、應用の利くやうに教授せらるべきであると思ふ。

資料篇

挿入筆蹟

ここには挿入した筆蹟の解説を施すこととした。

山家霰

やまゝとにこぼれる雨のおとなふやふもとに見えししくれなるらむ

濱臣

一首の大意は、山家の窓にばら／＼とやつて来る氷雨、それはある麓に降るしぐれが、ここには氷雨として降るのであらう。

未飽花

らんかむによりてむかふもけふ幾日あかぬころを花もしらなむ

蒿蹊

「らんかむ」は「欄干」。一首の大意は、欄干にかうよりかゝつて今日も花を眺めてゐる。いつたい自分がかうして幾日花を眺めたことであらう。でもまだ花に飽かない、その心は花も知らないであらう。

二三 黄菊 白菊 (俳句)

解説篇

作者

嵐雪——服部氏。幼名は久米助、後彦兵衛と改めた。江戸に住し、蕉門に入つた。別號を黄落庵、雪中庵、不自軒等と稱し、其角と名聲を等しうした。其角の江戸座に對し、その一派を雪門といつた。寶永四年十一月歿、年五十四。著に「其袋」・「或時集」・「杜撰集」、句集に「玄峰集」等がある。

去來——向井氏。名は兼時又は義焉。落柿舎、蘭亭等の別號がある。肥前長崎の儒家に生れ、兄とともに京都に出で、武を以て堂上家に仕へ、中長者町に住した。別莊を嵯峨小倉山の麓に營んで落柿舎と號し、菊亭内府から落柿舎の三字の額を賜はつた。蕉門十哲の一。寶永元年九月十日歿、年五十四。著に「湖東問答」・「花實集」・「落柿舎日記」・「伊勢紀行」等がある。「去來抄」は後人が假託した偽書。

宗因——江戸初期の俳人。談林派の祖。西山氏。通稱二郎作。名は豊一、初め一幽と號したが後宗因と改めた。別に西翁、梅翁、西幽子、梅幽子、梅花翁、野梅子、忘吾子等の號がある。肥後加藤の侍臣といふ。正保年間浪花に住み俳諧談林の一風を起した。天和二年三月歿、年七十八。「蕃椒百韻」・「釋教百韻」・「四人法師」・「津山紀行」等の著

がある。  
几董——京都の俳人。幼名小八郎。父は几圭といひ、蕪村と共に其角の門人巴人に學んだ。寛政元年歿す、年四十九。

季吟——江戸時代初期の國學者で俳人。北村氏、通稱久助。別號は湖月亭又は拾穗軒。近江野洲郡北村の人。初め蘆庵と號して醫を業としたが、後、京都新玉津島の祠官となつた。安原貞室、松永貞徳に歌俳を學んで、幕府の歌學所に補せられ、再昌院法師の號を受けた。寶永元年六月十五日歿、年八十二。著書には「八代集抄」・「萬葉拾穗抄」・「源氏物語湖月抄」・「枕草子春曙抄」・「徒然草文段抄」・「俳諧埋木」等がある。

關更——高桑氏。名は忠保。通稱長次郎。二夜庵、南無庵、半化房の別號がある。加賀金澤の人、醫を業とした。希因に學び、後京都に出て、復古を唱へた。「枯蘆の日にく折れて流れけり。」の句を作つて、枯蘆の關更と稱せられた。寛政五年花の本の號を許された。寛政十一年五月三日歿、年七十三。著に「雪まろげ」・「三冊子」・「芭蕉翁消息集」・「俳諧世説」・「續七部集」等がある。

### 教材

さきに第十七課で夏の俳句を學んだが、ここにはそれに照應させて秋の句を選んだ。爽涼な、澄明な、閑寂な、如何にも日本的な秋を思はせる季節の詩である。作者は大體さきとの同時代の俳人から取つてある。作者と句とのびつたり柄についたこれ等の十一句により、深まりゆく秋をしづかに觀照させたいと思ふ。

### 指導篇

#### 扱方

第十七課の扱方を参照。小學校以來幾つかの俳句に接し、本書に於てもこれで二度目であるから、俳句に對する大體の概念は出來たであらう。この邊で、作文の時間にでも實際に俳句を作らせてみたらどうであらうか。教授者の指導一つで、生徒は生徒なりの天真爛漫な俳句を詠み得るものである。

#### 解釋

※黄菊白菊云々 俳諧古選や俳家奇人談にもあるが、玄峰集秋の部には菊九章の中に、「その三、百菊を描へけるに」と前書して出てゐる。この句は有名で、雪中庵雀志がその集に次のやうに傍註してゐる。「これあまねく世人の知る句にて、當玄峰集にも第一に數へる名吟なり。當席に寶井其角も居りて、この句をきくや嘆賞して曰く、我年來菊の名句を世に遺さんと案じ苦しむといへど今に出ず、又これにこえた

る句向後も出まじ。實にうらやましきかなとて、人其角に菊の句を乞ひ求むれば、かならずこの句をしたためて、嵐雪句、其角書としるせりと。いまもまれに其角の書きたるを見ることあり。さて句意は「いろの名もまぎらはし春の草」と芭蕉翁の申されし如く、いま百菊の名もさまじくあれど、落ちゆくところ黄の白の二つよりほかにはなくもがなとなり云々。」なほ「がな」は語尾に附けて、希望の意を表す感歎詞

である。

※秋風や云々 曠野初秋にある句。去來發句集にもある。秋風が吹くやうになつて、蕭殺の氣を感じ、肌寒さをも感ずるが、又身心ともに引締るやうな感じもする。家藏白木の弓に弦を張つて弓術の練習でもして、秋風の裡に矢音の秋聲を聴きながら、一汗かくのも爽快だらうといふ句意であらう。この句を味はふには、まづ作者たる去來が武士であるといふことを考へねばならぬ。それ故かゝる句も生れるのである。また白は秋の色とせられ、秋に調和する色である。白木の弓といつたので、秋風にふさはしい感じがある。

※名月や云々 其角の續そまぎ虚栗に「草庵の月見」として出てゐるのが最も古く、これには、中句が「池をめぐつて」とあり、支考の葛の松原には「池をめぐりて」とある。深川の芭蕉庵の月見の句で、芭蕉が中秋の名月を賞した時、餘り月がよいので眺め捨てて臥せつてしまふ氣になれないので、夜の池を終夜めぐりながら、天上の月を賞し、池水の月影をも賞しながら、曉に至つたといふやうなことは自然を熱愛した芭蕉にして始めてあり得ること、又眞實のことと受取れるので、自然詩人たる芭蕉の面目躍如たるものがある。

※白露や云々 俳諧温故秋部、俳諧古選等に出てゐる。露を擬人してその無分別を咎めた句である。白露が今にもこぼれて落ちさうに危あやかしく散りやすい草の葉末に置いたのを咎めて、あんまり無分別なき所だと戯れた句。

※又平が云々 又平は浮世又平重起と稱し、土佐光信の門人。近江大津に住し、家貧しく且つ自分は吃り

で不自由なので發憤して畫筆を執つたといふ。光信は遂にその熱心に感じ、土佐又平光起と名乗らしめた。この傳説を基として大近松が書下したのが有名な「傾城反魂香」である。因みにこの吃の又平と、

浮世繪の祖湯淺又兵衛とは混同されるが誤りである。句の意は又平の繪に見るやうな輕妙洒脫な人物がひよこりひよこりと加はつて踊の輪が次第に大きくなつてゆく美しい情景を擷んだものである。

※まぎと云々 俳諧古選秋の部、俳家奇人談等に出てゐる。魂棚に對すると、亡き人の姿がありありとその座に居られるやうに思へるといふ意。論語八佾篇の「祭如在、祭神如神在。」から著想したものであらう。魂祭は死者の靈を祭ること、七月十三日から十六日まで行ふ。祭靈ともいひ、又、精靈祭ともいふ。去來の句に「魂棚の奥なつかしや親

の顔。」

※いなづまや云々 曠野初秋にある句。五元集や俳諧古選にも出てゐる。稻妻が夜々によつてその光る方面の振變ることを詠んだので、たゞそれだけではあるが、それをかく表現し得たところに其角の才氣がある。

※小坊主の云々 何がなし寂寥哀愁を感じさせる句で、人をして得て物思に沈ましめるものである。小僧が自分の修行してゐる寺の門前に立ちながら、秋の夕暮の哀愁に誘れて、今の修行の辛さを思ふにつけ故郷の父母同胞が懐かしまれて、愁はしげに佇んでゐるといふのである。小僧の目は自然故郷の方へ注がれてもゐよう。かうした自然と人事との合一點を捉へ、あはれな小修行者の上に同情をも寄せた句である。

巫水落ちて云々 稻もいよ／＼稔つて、百姓はその黄金の波にほゝゑみながら田の水を落して稻刈りの準備に入る。すると稔りに稔つた稻は頭を重くたれ、案山子がニョキッと空脛を現はしてくる點を詠つた。

巫旅人や云々 宿驛の宿か何かで落ち合った旅人が、知らぬ同士とはいへ、お互ひにめつきり寒くなつたと語り合ふ親しみのある句、「ねぶた聲」が效いていかに静もつた感銘を受ける。

鑑賞

日本の春は櫻が第一である。誰しも口を揃へて櫻をほめる。櫻のどこがよいかと言へば、「花は櫻木人は武士」で、深く散るのを最も善とする。しかし春と秋とはみな秋を採るのが普通である。秋が何故いいかといへば、全體として果敢ない美しさであるからである。春の、全體として鬱勃たる美しさよりも、日本人は秋の果敢ない美しさを探るものである。それはやがて来る冬枯れに先立ち霜を凌いで營む一種莊嚴な様な、少くとも、哀愁を帯びた美しさである。秋の美は非常に清淨である。崇高な位さつぱりとした美しさである。先づ秋の美しさによつて我々は清涼な氣に打たれる。邪念が去つて頭の中がせい／＼する感がある。これは春と趣が違ふ。それが即ち果敢ない美しさであるが、さういふ性質のものを美と観ずるのには宗教的な氣分が根柢を爲してゐるやうである。これには日本の秋の自然が何か神祕なものを感じしめる性質を帯びてゐるのであると見る外はないと同時に、菜食人種たる我々がこの自然に對して一種の畏敬を抱かざるを得ないと見るの外はない。謡曲の紅葉狩などは、紅葉に於て修羅を感じ取つてゐる

が、これはこの間の關係を現はすものと考へてよからう。

資料篇

挿入筆蹟

ここに挿入した筆蹟の解説をして置く。

角力とり並ぶや秋のから錦

嵐雪

炭俵や玄峰集の秋の部にある句。相撲取が化粧まはしをして土俵入したその化粧まはしの美しさを、さまざまの色に染出でた紅葉に見立てたのである。昔は相撲は秋季であつたから、自然かうした譬喩も出たわけである。四方赤良の狂歌に「秋の野の錦のまはしすまひ草、所せきわき小むすびの露。」(萬載狂歌集、秋歌)といふのがある。



## 二四 蘭學開眼

## 解説篇

## 教材

鎖國三百年の夢を食つてゐた日本人の胸にいつとはなしに浸潤してゐたのは西方紅毛人の文化であつた。禁令を犯して行はれた信仰はさて置き、公然と許されたオランダ人との通交の中にいつか耐へ難い懼れを西方文化に持つやうになつた。本課は鎖國令以前の西方との通交に筆を起し、中頃八代將軍吉宗の大英斷を稱へ、そして幾多の先覺が血と涙とを籠めて蘭學開眼の礎石となつた有様を縦横に描いたものである。生徒をして先驅者の並ならぬ辛苦の跡を辿らしめ、それを百年後の今日十分に味ははしめることによつて、學問に精進する人々の不屈の精神と、新しき光を追ふ人間意欲の熾烈さは、到底一箇の禁令を以てしては防ぎ得ないことを痛感せしめ得ると信する。この故に本課は文化史的教材であると同時に、一面から見て精神的教材ともいひ得られるであらう。

## 指導篇

## 扱方

一個の人間の成長の過程を見ても、人は決して孤立して育ち得るものではない。生れる途端から人の間に生れ、人の間に育つて、生きてゆく。一國の文化に就いても、外來文化との接觸なしには文化は成長しなかつた。接觸しない間は昏迷の原始期なので、未だ立てない赤兒に等しい。文化は接觸することによつて成長を區切つてゆく。即ち接觸が文化にとつての母乳であり、滋養である。

古來排他的民族、また他部族と接觸することの少い民族に文化の高いものはないのは、このためである。極北の民族がそれである。或者は北寒の地が文化を生むに適しないと見るかも知れないが、然らざる證據に、ロシアの文化を擧げることが出来る。更にはまた物資に恵まれながら排他的である南方の諸民族を擧げること出来る。ナイルの沿岸といひ、チギリス、ユーフラテスの沿岸といひ、ガンヂスのほとり、黄河のほとりといひ、すべて大陸の河水の運川によつて諸方、諸民族との通交の盛んであつたところに、文化は興つた。この歴史を見て、文化が人と人との接觸といふ事に重大原因をもつことを忘れてはならない。

固よりこれを接受し、これを利用する上に於て、その民族の智能の程度が問題にならう。しかし智能そのものも、實は文化が生み、文化が培養し、規定するのであると見ねばならぬ。然らざれば、教育といふ事も意義がなくなる。今日ヨーロッパの諸民族が互に自らの祖と稱し合つてゐるギリシヤ文化の如きも、東方亞細亞の文化の影響の下に成り立つたものである。

茲に於て、我々日本民族は現在二つに對立する直觀的な東洋文化と論理的な西洋文化とを、綜合する使命をもつ

であるといふことを思ひ起さなければならぬ現時、世界は主としてギリシヤ文化の系統を引ける西歐の科學的思想によつて席捲せられてゐる。そして我々はこれを十分吸収しつゝあるものであり、今や吸収の度が過ぎて飽和しさうにさへなつてゐる。充實のこの時期に當つて、我々がアジア人であることを思ひ、しかも、ヨーロッパ人の思想に對抗し得る能力を具へたアジア人であることを知つたならば、奮つて東西兩思想の綜合の大事業に邁進しなければならぬのである。

この大事業たる、日本民族を措いて他に爲す者はない。このことに要する霸氣と熱情とを汲みとる爲にふり返つて、日本に初めてヨーロッパ思想を採り入れた頃の人々の努力の跡に偲び、その努力に對する尊敬と感激とを新たにしようではないか。日本民族は過去數千年の間、東洋の思想を受け容れて、ほゞよくこれを消化して、世界に誇るべき賢哲をも出して來た。その後ヨーロッパ思想の攝取の時代が來た。これは僅々二百年内のことである。それだけ、我我にとつては親しみが深く、感激させられることも多い。その西歐文化の攝取の初め、何の助力もなく、獨力でこれに著手した先覺者の苦難と、これを押切る情熱を見てみよう。これは、次の、東西兩文化の綜合といふ大使命を擔ふ若き少年達に何等かの感銘と示唆を與へるに違ひない。

### 展 開

**第一節**——王城の地に（から）再生の曙光を見る事となつた。（まで）  
切支丹宗の傳來に伴なつて、我が國文化は西歐文化の洗禮を受けるに至つた。——本文の序である。

**第二節**——けれども（から）四周の海に漂つた。（まで）

幕府は切支丹宗を嫌つてこれを取締り、更に鎖國の方針を立てた。これがため、西洋文化の流入は途絶するに至つた。

**第三節**——しかしながら（から）科學探究に赴かした。（まで）

鎖國令下にあつて、オランダのみは通商を許されたので、我が國民は僅かながらオランダ人を通じて、西洋の文物に接することを得、また西洋文化の刺戟を受けた。

**第四節**——江戸時代の中葉（から）かくてまたおのづから開けたのである（まで）。

八代吉宗の洋書の解禁（但し、キリスト教に關係なき書である）により、洋學の研究が起り、西洋文化流入の途は再び開けた。

**第五節**——一人の偉人出でて（から）慘憺たる辛苦が盡されたのである（まで）。

將軍吉宗の英斷によつて、洋學がはいつて來たが、これを研究する當時の人々には、處女地を開拓する異常な苦心があつた。——以上洋學傳來の外的情勢を述べて來て、いよ／＼これから本題に入る。

**第六節**——當時に於ける洋學は（から）辛酸を具さに嘗めたのである（まで）。

蘭學研究の先覺者、青木昆陽の事蹟。昆陽はオランダ人に就いて横文字を學び、和蘭文字略考を著した。昆陽の斡旋で長崎のオランダ通事は、横文字讀譯の特許を與へられるやうになり、かくて蘭學研究は漸く緒に就くことになる。

第七節 杉田玄白は(から)翻譯の業に著手したのである(まで)。杉田玄白と昆陽の弟子前野良澤との二人が、志を同じうしてオランダの解剖學書(ターヘル・アナトミア)の翻譯といふ劃期的事業に著手する。

第八節 けれども舵のない船が(から)解體新書はかくして出來た。(まで)著手してから完成するまでの言語に絶した苦心。

第九節 今より百五十年前(から)百世長く傳ふべきではないか。(まで)

翻譯事業完成に對する歴史的意義を述べ、著者の熱意と努力とを讀へてゐる。

第十節 文化轉換の鍵は(から)スタートをつけたものであつた。(まで)再び後代文化の先驅者としての功業を讀へ、全文の結論としてゐる。

解 釋

蘭學開眼 「開眼」は大佛開眼などいふあれで、それを蘭學のおこり、起源の意味に借り來つたものである。蘭學の起原といふよりは、積極的に起す意味が含まれるし、洒落れた言ひまはしでもあるので、この語を用ひたものであらう。

王城の地 皇居のある地。帝都。ここは京都を指してゐる。  
南蠻寺 永祿十一年に織田信長が、ポルトガル人を招いて京都四條坊門に建立した天主教の寺院で、初め永祿寺と呼ばれたが、延暦寺からの抗議によつ

て、南蠻寺と改稱されたといふことである。天正十五年、豊臣秀吉が天主教を禁止するに及んで、破壊された。

轉生 方面を變じて新しく發生すること。「文化の轉生」は文化が方面をかへて、新しい文化に進むことをいふ。

一國文化の消長 ある國の文化が盛んになつたり衰へたりすること。

外的刺戟の強弱云々 外部(外國)からの刺戟の強い弱いによつて支配される。即ち強ければ盛んになり、弱ければ衰へるといふ意味である。

切支丹宗 後奈良天皇の天文年中、西洋から渡來したキリスト教。これはキリスト教の一派で、カトリック教ともいはれ、十六世紀以後の宗教改革によつて改革された新教(プロテスタント)に對して舊

教とも名附けられる。我が國では天主教ともいふ。

東洋キリスト教化の意圖 東洋をキリスト教に化してしまはうとする考へもくろみ……。『意圖』は心に抱いてゐるくはだて、將に行はうとしてゐる計畫をいふ。

將來する 持つて來る。もたらす。

廢類の淵 したれくづれる極度。淵は深くて浮ぶ能はざる意味から、廢類の極に達して居ることの譬喩に用ひた語。當時の我が國は、吉野朝五十年の戦亂、下剋上、反服常なき足利幕府、幕府の無力等により、群雄割據の混亂となつた。さうした後を承けて、僅かに足利幕府初期中期の文化を偲ぶ以外、何等見るべきものがなかつたのである。

沈淪する しづむ。おちぶれる。

洗禮を受ける 「洗禮」はバプテスマで、キリスト

の定めた新約の二の禮典の一で、割禮の舊約に於けるやうに、恩惠の契約のしるしである。その式は宗派によつて或は水を首に注ぎ、或は全體を水に浸すなど違ふが、その意味は同じで、すべてこれを受けるとは、キリスト教會に入つて恩惠を受ける契約の利益を得、主イエスキリストに屬するものであることを表し、且印する禮典である。で、この「洗禮を受ける」は、このキリスト教の禮典から轉じて、單に經驗を経るといつたくらゐに用ひられてゐる。

※再生の曙光を見る まさに廢頹の極に達してゐた文化が再び生返つて來るやうな兆を現はすやうになつたとの意。

※政治の當路者 政治の要路に當つてゐる人。爲政者。

※忌諱に觸る いみ嫌ふところとなる。

※布教 教法を弘布すること。もとく佛教の語であるが、一般に宗教の教を弘めることに用ひられてゐる。

※それが鎖國にまで徹底した 初めの間は布教を禁止するだけであつたが、遂にその布教の禁止から鎖國にまで進んだ。天文十二年ポルトガルの商船が大隅の種子島に漂著して、鐵砲を傳へたのが、南蠻人渡來の初めであるが、次いで元龜二年頃からイスパニヤ人も來り、肥前平戸に於て通商交易が行はれてゐるうち、天文十八年、ジェスイット教會のフランシス・ザビエルが鹿兒島に來てその教を弘めた。これが切支丹宗布教の初めである。この教は間もなく九州一圓を風靡し、中國から京都にまで及んだ。織田信長が一向宗を抑へようとして、これが布教を援助し、南蠻寺が京都に建立された事は先に言つた。

かくて、益々この教は廣まつたが、當時のイスパニヤの宣教師はこれを以て國民を欺惑し、國土を蠶食する手段とするものがあつたし、またその教には往我が國民性と相容れぬものがあつて、國民の良風美俗を破壊、惡化するやうなものがあつたので、豊臣秀吉が先づこれを禁止し、南蠻寺を毀ち、宣教師を放逐した。家康も亦これになつた。殊に慶長五年以後和蘭人が渡來し、その商敵たるポルトガル人の陰謀を家康に告げたので、その禁令は一層嚴重となつた。かくして國民は何れも佛教に歸依させ、寺院にその檀家一切の戸籍を司らせる、いはゆる宗門改めを行ひ、踏繪の制を設け、切支丹宗徒を捜し出しては、これを極刑に處した。かうした幕府の政策に憤起した切支丹宗徒は、遂に寛永十四年、肥前島原に據つて一揆を起すに至つた。いはゆる島原の亂

で、幕府は大いにこれに惱ませられたが、翌年これを平定してからは一層切支丹宗の禁制を嚴にした。これに先立つて、寛永十三年鎖國令を出し、邦人の海外渡航を嚴禁し、犯すものは死罪、外國から歸つたものも亦斬罪とした。更に長崎在留のポルトガル人を追ひ、外國船の渡來を禁じ、和蘭だけが、切支丹宗に關係がないといふので、長崎の出島に於てのみ交易を許された。これ以來、幕末維新に至るまでこの制度が保たれたのであつた。

※徒に我が國土を繞る云々 我が國のみは除外して我が四海の外に行き渡つた、四海の外には西洋の文化は普及したが、我が國にのみは上陸普及する事がなかつたといつた氣持である。

※精緻なオランダ更紗 極めて精密に織つたオランダ製の更紗。「更紗」(葡紗)は數色を配合した、

多くは幾何學的中形模様を捺染した金巾で、印度西岸のスラアト、又はシャム國から渡來したといふ。後には本邦でも製出されるやうになつた。南蠻更紗ともいふ。

※日蘭三百年の交渉 日本とオランダとの關係は、徳川家康の慶長五年オランダ商船が泉州境の浦に來た時から今日まで三百有二十餘年の歴史をもつてゐる。

※かびたん ポルトガル語 Capitan の訛で、もの長、當時は、長崎和蘭屋敷の館長をいつた。

※西洋曆 いはゆる太陽曆で、現在施行されてゐるのがそれである。次に吉宗の改曆に意ありし事實を「大日本歴史集成」から引ければ「吉宗は心を天文、曆術の事に用ひ、長崎の醫師西川如見が西洋の推歩術を能くすと聞き、享保六年召して天文方となしぬ。

後、吉宗は紀伊の工人加藤金右衛門なる者をして渾天儀を製せしめ、(元文年間の事なりといふ)自ら天文方の諸吏と共にこれを吹上苑中に試験し、天文臺を神田佐久間町に設けたり。(延享年間の事なりといふ)吉宗は又貞享曆(貞享十年保井春海の改めたもの)の疎謬多きを以てこれを改正せんと欲し、西洋の曆書を求めて、京都の人中根玄圭に命じてこれを譯せしめ、西洋の曆法の天時に合ふを知り、これを採用せんとせしが、民意を驚かさん事を恐れて止めり。吉宗の薨後、寶曆年間に改曆の事ありしは、一にその遺志に出でしなり。」

※先鞭を著けた第一人者 他人に先んじて手をつけた最もすぐれた人。「先鞭を著ける」は人に先んじて事をなすのをいふ。「第一人者」はある社會に於て最もすぐれた人をいふ。

※堅き扉を開いた 厳しい禁制が解かれ、その研究が始められて、その内容がやうやく明らかになつて來たの意。

※一人の偉人出でて堤を切れば云々 ここは文化の流入を河川の流に譬へたので、一人の偉い人間が出て、眞先にそれをやつて見せると、せかれてゐた文化が滔々と流れ入つて、一國に普及するといふので、吉宗が洋書の禁を解き、青木昆陽が洋學研究に始めて手を著けた事が契機となつて、西洋文化が全國に普及して來た事をいつてゐる。

※先人の努力は云々 先に立つた人の努力は、全部この所に力を入れられた。  
※慘憺たる辛苦 血のじみ出るやうな苦心、骨折。  
※カピタンの隨從 オランダ屋敷の館長に從つて來る者。

※オランダ通事 オランダ語の通譯者。  
※冠詞 名詞の前に附ける語で、英語の the など  
がこれである。

※前置詞 名詞、代名詞と、他の品詞との關係を指示する品詞。英語の of, on, in, at, to などがそれぞれある。

※オランダ通事たちは云々 この事情はかうである。寛永十八年、オランダ人が平戸から移されて、商館を長崎に設立することを公認された。それ以來長崎出島のみが西洋と交渉するわが國唯一の門戸となつた。そこにはオランダのカピタンが毎年交替で滞在し、數名の日本通事が附屬した。官憲の嚴重な監視の下に、一般日本人と紅毛人との接觸は禁止された。長い間、通事の家だけが西洋語の貯藏所であつた。併し、通事でも、西洋語を話すことを許され

ながら、西洋文學を読む事は許されなかつた。この不合理な状態が一世紀ほどつゞき、延享元年に至つて初めて青木昆陽の理解ある取りなして、幕府は通事のうち三家（西、吉雄、本木）だけがオランダ文書讀譯の特許が與へられたが、その他の者は依然として西洋文學から遮蔽されてゐた。

※押へられぬ 欺かれた證據をとらへることが出来ない。

※前人未踏の學問の領域に云々 未だ嘗て誰も手を著けたことのない學問の領分の中に足を一步入れてみると、即ち初めて手を著けてみると、その全部が全部解くことの出来ない謎のやうなものであつたの意。「不可解な謎」はその意味を覺り知ることの出来ない謎。

※先覺者 先に道を覺つた人。學問又は知識ある先輩

蘭物産の學にも志ありて、田村藍水、同西湖先生杯とも同志にて、毎春參向せる阿蘭陀通詞共の方にも往來せり。明和八年かとの卯の春かと覺えたり、彼客屋へ到りて、ターヘル・アナトミアとカスバリユス・アナトミアといふ身體内景圖説の書二本を取り出し來り、望む人あらば譲るべしといふ者ありとて持ち歸り、翁に見せたり。もとより一字も讀む事はならざれども、臟腑、骨節、これまで見聞する所とは大いに異にして、これ必ず實驗して圖説したるものと知り、何となく甚だ懇望に思へり。且吾家も從來阿蘭陀流の外科と唱ふる身なれば、せめて書筐の中にもそなへ置きたきものと思へり。然れどもその頃は家甚だ衰々しくして、これを求むるに力及び難かりしにより、我が藩の大夫岡新左衛門といへる人の許に持ち行き、しかくの次第なれば、この蘭書求

の人。ここは先にある事を覺つて、それを一般化しようとした人をいふ。

※蘭學事始 オランダの學問技藝を研究する手はじめ。彼等三名が、いかにこの蘭學の研究に苦心したかは、杉田玄白の著した「蘭學事始」に詳しい。ここに「蘭學事始の辛酸云々」といつたのも、杉田玄白の著書名を心にしていつたものである。

※辛酸 つらく苦しいこと。艱難。

※解剖 動物の身體を解いて、その骨格、筋肉、臟腑などの委細をしらべること。その全身に渉るものと局部に限られたものとある。「解剖の書物」は、「ターヘル・アナトミア」と「カスバリユス・アナトミア」の二書である。玄白がこれ入手するに至つた經過に就いて、「蘭學事始」には次のやうに記してある。「——同藩の醫中川淳庵は、本草を厚く好み、和

め度しと告げたり。然れども力の足らざるは是非なしと語りしかば、新左衛門聞き、それは求め置きて用立つものか、用立つものならば價は上より下し置かるべきやう取計らふべしといへり。その時翁、それは必ずかうといふ目當とははなけれども、是非ともに用立つものにして、お目にかくべしと答へり。傍に小倉小左衛門といふ男ゐたりしが、それは何卒調へ遣さるべし、杉田氏はこれを空しくする人にはあらずと助言したり。依之、いと心易く願も望の如く調ひ得たり。これ翁の蘭書手に入りし始めなり。」

※五臟六腑 「五臟」は漢方で、腹中にある五種の内臟即ち肺臟、心臟、脾臟、肝臟、腎臟をいふ。「六腑」は同じく漢方で、腹内にある六種の内臟即ち大腸、小腸、膽、胃、三焦、膀胱をいふ。「五臟六腑」で人體の内臟諸器官をすべていふ。

※南千住 現在は東京市荒川区内。

※小塚原 維新前まで刑場のあつた所で、當時の遺物一丈の石地蔵が残有してその地點を示してゐる。

※腑分 解剖のこと。

※良澤をも誘つて云々 この邊を「蘭學事始」から抜書してみる。然るにこの節不思議にかの國解剖の書手に入りし事なれば、先づその圖を實物に照し見たきと思ひしに……頃は三月三日(明和八年といふ)の夜と覺えたり。時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ男より手紙もて知らせしは、明日手醫師何某といへる者、千住骨ヶ原にて腑分いたせるよしなり、お望あらば彼方へ罷り越されよかしといふ文をこしたり。……かゝる幸を得し事を獨り見るべき事にもあらず、朋友の内にも家業に厚き同志の人々へは知らせ遣はし、同じく視て業事の益には相

互になしたきと思ひ量りて、先づ同僚中川淳庵を初め、某誰と知らせ遣せし中に、良澤へも知らせ越したり。……その翌朝とく支度整へ、彼所に至りしに良澤参り合ひ、その餘の朋友も皆々参會し、出迎へたり。時に良澤一つの蘭書を懐中より出し披き示して曰く、これはこれターヘル・アナトミアといふ和蘭解剖の書なり、先年長崎へ行きたりし時求め得て歸り、家藏せしものなりといふ。これを見れば、即ち翁がこの頃手に入りし蘭書と同書同版なり。これ誠に奇遇なりとて、互に手をうちて感ぜり。」

※腑分の結果は云々 「契合」はわりふが左右きつかり合ふ意味から轉じて、寸分違はず合ふこと、びつたりと合ふこと、「これより各々打連れ立ちて骨ヶ原の設け置きし觀臟の場へ至れり。……彼老屠が彼の此のと指し示し、心、肝、膽、胃の外にその名な

きものをさして、名は知らねども、己れ若きより數人を手にかけ解き分けしに、何れの腹内を見ても、ここにかやうの物あり、彼所にこの物ありと示し見せたり。……圖によりて考ふれば、後に分明を得し動血脈の二幹、又小腎などにてありたり。……良澤相俱に携へ行きし和蘭圖に照らし合せ見しに、一として聊か違ふ事なき品々なり。古來醫經に説きたる所の肺の六葉兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形状も大いに古説と異なり。……扱その日の解剖事終り、とても事に骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共を拾ひとりて、かすく見しに、舊説とは相違にして、只和蘭圖に差へる所なきに、皆驚歎せるのみなり。」

(蘭學事始)

※讀碎かうと云々 十分會得のゆくまで讀みなさ

うと決心した。「蘭學事始」に「歸路は良澤、淳庵と翁と、三人同行なり。途中にて語り合ひしは、扱々今日の實驗、一々驚き入る、且これまで心附かざるは恥づべき事なり。苟くも醫の業を以て互に主君々々へ仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一月々々この業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞ、この實驗に本づき、大凡にも身體の眞理を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの申譯もあるべしと、共々に歎息せり。良澤もげに尤も千萬、同情の事なりと感じぬ。その時、翁申せしは、何とぞこのターヘル・アナトミアの一部、新たに翻譯せば身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし、いかにもして通詞等の手をからず、讀み分けたきものなりと語りしに、良澤曰く、予は年來蘭書よ

み出し度きの宿願あれど、これに志を同じうするの良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各がた彌々これを欲し給はば、我れ前の年長崎へもゆき、蘭語も少々は記憶し居れり。それを種として共々よみかゝるべしやといひけるを聞き、それは先づ喜ばしきことなり、同志に力を戮せ給はらば、憤然として志を立て、一精出し見申さんと答へたり。良澤これ聞き、喜悅斜めならず。然らば善は急げといへる俗説もあり、直ちに明日私宅へ會し給へかし、いかやうにも工夫あるべしと、深く契約して、その日は各々宿所々々へ別れ歸りたり。」とある。

※舵のない船が云々 「事始」にも、「その翌日、良澤が宅に集まり、前日のことを語り合ひ、先づターヘル・アナトミアの書にうち向ひしに、誠に艦舵なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄る

べきなく、只あきれにあきれてゐたるまでなり云々」とある。

※長崎から求めて來た云々 「事始」には、「長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合せたるにフルヘッヘンドの釋註に、木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘッヘンドをなし、又庭を掃除すれば、その塵土聚まりフルヘッヘンドすといふ様によみ出せり云々」とある。

※鬼の首でも取つた様に 非常に功名を立てたやうに。「事始」には、「その時のうれしさは、何に譬へんかたもなく、連城の玉をも得し心地せり。」とある。※一行の句を呆然と かうしたどうやら判断のつきさうな語はよいとして「シンネン」(精神)などといふ語は全く手のつけやうがなく、そんなのは圓の内十字を引いた符號をつけて後解を待ちつゝ進

んだといふ。

※かくて……數名加はり かうして、苦心してゐるうちに、次第に同好の士が加はつて來たのであつた。かう盛大になつて來たので、遂にこの書を翻譯して世に刊行しようとの決意をしたのであるといふ。

※解體新書 西洋解剖書翻譯の最初のもの。原書「ターヘル・アナトミア」(Tabul Anatomia)はタントシフ王學校大醫學藥醫窮理學者ヨハン・アタンキェルムスの著である。その大體の内容は先に引いた「蘭學事始」の文によつて知られるであらう。「解體新書」に就いて「事始」には、次のやうに記してある。「一日會して解する所はその夜翻譯して草稿を立て、それにつきてはその譯述の仕方を種々に考へ直せし事、四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板

下に渡すやうになり、遂に解體新書翻譯の業成就したり。抑々江戸にてこの學を創業して、腑分といひ古りしことを新たに解體と譯名し、且社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我が東方關州自然と通稱となるにも至れり。これ今時の如く隆盛となるべき最初嚆矢なり。今を以て考ふれば、これまで二百年來、かの外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、この時の創業不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書、その新譯の起り始めとなりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべし。」

※それはやがて我が國の文化に云々 「事始」に於て、玄白は次のやうに述懐してゐる。「一滴の油これを廣き池水の内に點すれば散じて滿池に及ぶとや。



さあるが如し。その初、前野良澤、中川淳庵、翁と三人申し合せ、假初に思ひつきし事、五十年に近き年月を経て、この學海内に及び、そこ彼所と四方に流布し、年毎に譯説の書も出づるやうに聞けり。これは一犬實を吠ゆれば、萬犬虚を吠ゆるの類にて、その中にはよきもあしきもあるけれども、それは姑らく申すに及ばず。かくも長命すれば、今の如く

に開くる事を聞くなり一たびは喜び、一たびは驚きぬ。今この業を主張する人、これまでの事を種々の聞き傳へ語り傳へを誤り唱ふるも多しと見ゆれば、跡先ながら覚えむたりし昔話をかくは書き捨てぬ。」

※筑前の天満天神 筑前國太宰府にある菅原道眞を祀つてある社。

批評

第九節に、良澤の言葉が載せられてゐる。これはほんとの蘭學の精神であり、また同時にわが國民的美風のあらはれである。學問のために働くのであつて、名聞利益のために働くのではない。學問といふ公けのものに私の身命を捧げるのである。學問から利益が生ずるとせば、それは私のものでなくして公けのものである。學問から生ずる幸福は科學者のものでなくして、後世の人々のものである。科學者は、後世の人が取つて味はふ果實を實らすために、樹を植ゑてゐる庭師である。科學者は後の人の中に住むやうにと家を建築してゐる大工である。何のためにか、たゞ植ゑ、建てして働くことが面白いのである。たゞ學の實が知りたいのである。學を以て名聞利益を得る爲の手段とするのではなく、たゞ學を以て學の目的とする、學そのものが目的なのである。かういふ事になつて來ると、日本人の得意の

壇場である。天草の亂を起したと同一の情熱が、この良澤を動かしてゐる。その他かゝる例は數限りなくある。日本史はその精神のあらはれたる現象の繼起とも言はるべきものである。

資料篇

参考文献

解釋の項には「蘭學事始」から必要以上と思はれる程引用して置いた。要するに本課の文はこの書を根柢として書き綴られたものであるからである。ここに吉宗と蘭學との關係を「日本歴史集成」から引いて置かう。

幕府はキリスト教禁絶の必要より禁書の制を設け、和漢文の書と雖も、西教の事を記述せるものは固より、苟くも西洋に關する記事あるものはこれを読むを禁じ、長崎に在勤せる和蘭通詞と雖も、口に蘭語を採れども、眼に蘭文の書を読むを許されざりき。然るに吉宗は心を實用の學問に注ぎ、西洋の學術の取りて以て我れに資すべきもの多きを知り、享保五年、令して教法に關するものの外、天文・地理・數學等の書はこれを読むを許せり。即ちその解禁の書は、いふまでもなく名目、噂の種類に屬するもののみにして、教化に屬するものはこれを嚴禁すること舊の如くなりしなり。尋いで、長崎の通詞西善三郎、吉雄幸作等相謀りて蘭書を読まん事を請ひしに、吉宗またこれをも許したり。但し西教に關するものはこれを読むを許さざるは勿論とす。時に江戸の市人青木教書、學を好むを以て吉宗に用ひられ諸國を巡検して古書を求めしが、吉宗に説くに蘭書をも收藏すべきを以てしたり。吉宗これを許し、教書及び野呂玄丈に命じて蘭文を學ばしめければ、教書は長崎に赴き、善三郎、幸作等に就きてやゝこれを研究したり。是より先、新井君美は西洋紀聞、采覽異言を著し、西洋學術輸入の基を開きたりと雖もたい通詞を経て蘭人

の言を記したるに過ぎず。日本人が自ら蘭文を読むことを得たるは、實にこの時に始まれるものにして、今日文運の隆盛を觀るものは吉宗の時に胚胎せるものといはざるを得ざるなり。

挿畫解説

附筆者略歴

社

畫

報

誌

旅

人

(口繪)

野田 九浦筆

本圖は大正十五年秋の帝展第七回に出品された日本畫である。本文「奥の細道」に對する口繪として挿入したものである。題材はいふまでもなく奥の細道に於ける芭蕉である。本文中にはこの部分を省略してあるが、那須野を野飼の馬で行く旅人芭蕉を描いたものである。旅を棲所と心得、飄々乎として野行き山行く芭蕉の面目躍如たるものがある。

【略歴】

筆者九浦氏は名は道三、明治十二年十二月、東京市下谷區根岸に生れた。日本畫の巨擘故寺崎廣業に學び、野田曲江氏とともに最も古くから門下中雙壁として謳はれた人である。後、大阪朝日新聞に入社して、大阪に移り、北野恒富氏等と大正美術會を起し、大正六年秋東京に歸つた。文展第一回出品の「辻説法」は直ちに二等賞を得、氏の畫名を始めて天下に明らかにした出世作である。續いて第五回に「佛教東に來る」第七回に「天草四郎」を、第八回に「梅妃、楊貴妃」、第九回に「歌壇の人々」等を出して幾度も褒狀を得、第十一回に「妙見詣」を出すに及んで遂に名譽の特選となり、大正十三年帝國美術院の審査員となつた。昭和十年帝展の改組せられるや、展覽會參與に推薦せられ、現在に至つてゐる。

旅

人

栗栖野の里 (一三頁)

中村 岳 陵 筆

本圖は本文中栗栖野の里に題したものである。閑寂な山の庵と、その庭に生えた「大きな柑子の木の枝もたわ、になりたる」との取合はせを巧みに描いてある。

【略 歴】

筆者岳陵氏は本名を恒吉といひ、明治二十三年静岡縣に生れた。初め川邊御楯みかたに就いて土佐派を學び、次に寺崎廣業に師事して更に技を修めた。なほ東京美術學校に入つて明治四十五年に卒業した。大正三年日本美術院の興されるや、第一回に「綠蔭の饗筵」第二回に「薄暮」を出して同人に推され、院展中堅作家として重きをなし、昭和十年帝展の改組せられるや、參與に推薦せられ、現在に至つてゐる。院展出品作には「維盛高野の巻」・「大月氏行」・「千本櫻」・「輪廻物語」・「昏光經」・「動物讚頌」・「荒天睨鷲」・「梳髮」・「貴妃賜浴」等がある。

法 成 寺 (一四頁)

吉 村 忠 夫 筆

本圖は松岡映丘氏の一門が國畫院を結成して、その第一回展を昭和十二年日清ビルに於て催した際に出品された日本畫である。藤原道長が都の東北、加茂川の邊に七寶莊麗を畫した法成寺を造營したことは、「榮華物語」・「大鏡」・「御堂關白日記」等に詳しく見えてゐるが、筆者はそれ等の記事によつて、落成に喜悅する道長の生活を想像し、その法成寺に於ける早朝の勤行情景を偲んでこの圖を描いたものである。出品に際しては「朝勤」と題してあつた。

【略 歴】

筆者は明治三十一年福岡縣に生れた。大正八年東京美術學校日本畫科を卒業して後、松岡映丘氏に就いて大和繪の研究に精進した。舊帝展では審査員であつた。現在では帝展指定、國畫院同人、日本畫會及び東臺邦畫會評議員である。

櫻 あ ら そ ひ (一九頁)

山 口 蓼 洲 筆

本圖は狂言「櫻あらしひ」の登場人物、主人公と太郎冠者とを描いたものであることは、説明を俟たずして明らかである。

【略 歴】

法成寺・櫻あらしひ

筆者薺洲氏は本名慶之助、明治二十年京都に生れた。別號を雅慶、士保と稱する。明治三十五年四月上京して、歴史畫の大家谷口香嶠氏の門に入り、十數年畫業を研鑽した。當時畫家の登龍門たりし京都美術協會の展覽會に出品して、再度賞を受けた。明治四十一年頃より、父の遺志を継ぎ、茂山千五郎氏の門に遊び、大藏狂言の奥義を極めた。大正九年頃より金剛護之助翁及び巖氏の指導の下に能畫を専門的に研究し、今日に至る。その間、京都をはじめ、東京、大阪、北陸、四國、北海道等に於て、能畫普及の爲に個人展覽會を開催した。能畫を専門とする外、能樂趣味の工藝品、染織物にも趣味を持ち、これを考案製作してゐる。能畫の大作には「道成寺の圖」・「鏡の間の圖」・「狸々舞の圖」・「松風の圖」・「狂言御田」・「石橋の圖」・「羽衣の圖」・「翁」等がある。著作としては「能具大觀」・「狂言大觀」・「能趣と狂言」等がある。

法隆寺金堂の持國天像 (三七頁)

總丈(光背臺座共)七尺五寸一分、身長四尺四寸、臺高二尺八分。北魏風を摸したもので、我が國に遺存する最古の四天王像である。

東大寺戒壇院の持國天像 (三七頁)

全長五尺四寸、鬼の高さ一尺二分、幅二尺二寸五分。天平勝寶七年七月に成り、銅造であつたが、何時の代にか失せ、現存せるものは塑像で、他から移されたものであらう。由來は明らかでないが、純天平たることは確かである。本像は四天王像中の一である。四軀とも同作で、略等、身大の塑像である。凡て身に甲冑、袴、靴等を装ひ、足下に邪鬼を踏む。凡て雲母地の上に朱、綠青、紺青、褐諸色の岩繪具と金泥、截箔とを以て一面に彩る。頭部と手ともまた彩られ、墨によつて毛描きせられ、腫は嵌入せられた黒耀石によつて表される。持物と臺座とは凡て後期のものである。

阿彌陀如來像 (三九頁)

傳定 朝作

木造漆箔の坐像で、佛身の高さ九尺七寸三分、臺座の高さ四尺九寸。平等院鳳凰堂の内陣中央壇上に定印を結んで結跏趺坐する本尊である。天喜元年三月に落慶供養したこの堂と共に、造立された像であることは既に定説があり、

康平記にその次第を記すこと詳かである。臺座は魚鱗式六遍葺蓮花座、反花、華盤、敷茄子、框座等十重の臺座に成り、二重の反花には雄渾なる寶相華文を鏤刻する。光背は即ち二重圓光を重ね、これに飛雲を周らせ、十三軀の歌舞の菩薩を附して、定朝式飛天光を完成する。現在、佛身、光背共に近世の悪修理によつて燦たる金色に包まれ、堂内の古雅優麗の空氣を亂すものは多いが、伏目勝ちの豐圓な面相も美しく、堂々たる偉軀の上に彫法の淺い衣褶が、宛ら微風を孕む垂れ衣のやうに、靜かにたゆたうて且つ消え行く様は、觀者をして思はずも藤朝藝術なるかなの歎を發せしめる。この像と同様式の遺品に、法界寺、法金剛院の諸佛がある。而して時下ると共に漸くこの流麗の體は失せるが、この佛座の蓮瓣を形づくる曲線の、豊かにも雄勁なるをのみ比しても、尙本像に藤朝盛期の餘韻の高くも匂ふを見ると共に、去にし天喜の陽春の一日、ここに一代の榮華を極めた宇治殿が、百口の高僧を請じ、供養法壇を設けて蝶鳥の菩薩の舞も軽く、華やかに美しく行はれた供養の光景もまさしくと頭に浮ぶのを見るであらう。

この像古來定朝作と傳へ、また田中豐藏氏は嘗て「佛師定朝」をものして、この傳説を彫刻史上に合理化せんことを試みた。當否はともあれ、何れは岩船寺の同像より、法金剛院までに移る彫刻史上の一大金字塔、これを定朝と見んこと固より當然であるが、またこれを「鳳凰堂の佛師」と見るも亦足るであらう。〔美術研究〕第四十三號—田中喜作氏に據る。

## 源氏物語繪卷 (四〇頁)

傳藤原隆能筆

この源氏物語繪卷は今徳川家(舊尾州家)に三卷あり、益田家(實業家)に同類のもの一巻あり、合せて四卷ある。本圖は徳川家本の複寫である。夕霧の大將が柏木の權大納言に昇進したのを聞いて、これを病中に訪ふ所である。畫の筆者は或は隆能、或は隆親と傳へるが明らかでない。ともかく我が古き物語繪中の絶品たるを失はない。

## 東大寺南大門二王像 (四二頁)

この二王像は運慶、快慶合作といはれる。二王といふのは金剛力士、また金剛神ともいはれる佛敎語で、如來の一切の祕密を知り、五百の夜叉と神とを領して千佛の法を護すといふ二つの神。全身を裸出して勇猛悍惡の相をしてゐる。寺院にては多くその像を寺門に建つ。左を密迹金剛といひ、右を那羅延金剛といふ。南大門の二王像は南大門(正治元年上棟)より後れて建仁三年の造立。大佛師運慶と快慶とが小工數十人を率ゐてこれを造つたといふ。鎌倉時代彫刻の特質を最もよく發揮した代表作といはれる。阿吽の兩像相呼應して見るからに力に満ち、身體の均衡も四肢の

作法も巧みなもので、潑刺たる動的表現と共にどつしりとした安定の趣にも缺くるところがない。木彫にして高さ三丈に近い。この姿態に適しく刀法の峻烈なもので、筋肉は隆々と盛り上がり、天衣下襟は髷高く波打つて、颯爽たる威容おのづから人を壓する概がある。而してこの刀法の峻烈さに拘らず、細部も忽せにせず、筋肉にも天衣にも寫實味を有して居り、且つは活動の姿も力の表現も、誇張に過ぎるほどのことなく、よく渾身に氣魄が充實してゐる云々。と田中和氏は評してゐる。

山水圖 (四二頁)

雪 舟筆

京都曼珠院の所藏に係る。紙本墨繪で、竪一尺五寸三分、横九寸七分。雪舟の畫風、變化は三體ある。第一は筆意極めて老勁、墨色極めて蒼重なもの。山水、人物、花鳥に通じていはれる。第二は山水の筆致が頗る柔和で、皴法、樹點稍南宗畫の趣を帯びたもの。第三は即ち草筆破墨の作で、小景山水に多い。この中第一の體は即ち雪舟の最も優れた特色で、遺品中最も多く見る所である。蓋し、入明歸朝の後、その技が最も老熟した所の作風である。本圖はいふまでもなく第一の體に屬する。雪景と對幅をなし、雪舟の筆墨を見るには、絶好の標本である。

【略歴】

指導篇、解釋の項参照。

源氏物語關屋圖 (四三頁)

俵屋宗達筆

この屏風畫は紙本金地着色、縦三尺一寸四分、横九尺、宗達遺作中の名品である。圖は源氏物語關屋の卷の意を寫したものである。即ち、源氏の君が石山寺に御願果たしに詣で給ふ時、常陸守が任期満ちて上京する途上、これに逢坂の關に行き逢ひ、車を停めて道を讓る所を寫したのである。

【略歴】

指導篇、解釋の項参照。

泰西王族騎馬圖 (四四頁)

傳 山田右衛門作筆

耶蘇教の傳來から西洋文化の輸入となり、西洋畫を模倣するに至つた。安土桃山時代から江戸時代初期までの間が

源氏物語關屋圖・泰西王族騎馬圖

著しく西洋文化の影響を受けたのである。この間に西洋畫法をよくする者の出たのも偶然のことではない。その中最も有名な人は山田右衛門作である。それ故、西洋畫法を學んだ徳川初期の油繪風の繪があれば、先づ山田右衛門作の筆と傳へるのである。右衛門作は徳川初期の油繪畫家中で最も有名であるからである。

右衛門作は切支丹宗の信者で、寛永年代の島原の亂には、幕軍に抗して籠城した。落城の時に捕虜となつたが、油繪に妙を得たので、命を助けられて江戸に連れ歸られた。この後、江戸には放火犯人が多かつたので、防犯のために犯人が火あぶりの刑に處せられてゐる所を寫し、四つ辻に掲出したのに、これに恐れて放火が減じたといふことである。かやうな逸事からも右衛門作が有名になつたものであらう。

本圖は果して右衛門作の筆であるかどうかは、容易に定め難いが、繪が頗る面白いので右衛門作の筆に擬するのである。本圖は會津城の襖繪であつたといふ。掲出の分以外になほ二圖を存し、且つこれと同じ組のものと思はれるものが、前原一誠の子孫の家に存在する。この圖は帝王の馬上の英姿を表したもので、本邦初期の洋畫を考へるには最も貴重な資料である。(『世界美術全集』—藤懸靜也氏に據る)

## 雪 松 圖 (四五頁)

圓山 應 舉 筆

三井八郎右衛門氏藏。本圖は應舉の寫生主義を水墨と金泥の裡に驅使し、而も大きな六曲屏風の面に十分な裝飾的效果をも齎した製作であつて、精妙な筆さばきと壯麗な畫致とに應舉の非凡な才華がよく窺はれる。雪景色は應舉以前にも取扱はれてゐるが、彼程に眞に迫るものは未だなかつた。この圖、雪を頂く二株の老松は金泥を刷いた背景からくつきりと浮び出でて、雪新たなる庭上の朝景色も目に見る心地がせられ、清爽の氣のおのづから溢れるのを感じて、庭前囁目の景は圓山四條派の人々の好んで取扱つた所であるが、この圖のやうに大きく景趣を活寫する手腕に於て、應舉はさすがに一流の創始者として丈高き畫家であつた。(『世界美術全集』—田中一松氏に據る)

## 【略 歴】

指導篇、解釋の項参照。

## 源 三 位 (一枚刷)

高 嵩 谷 筆

本圖は、頼政が猪早太を連れてぬえ退治をする場面を描いたもので、現在東京市淺草觀音堂に掲げられてゐる額畫である。大きき七尺——一丈餘りの板に描かれてゐる。筆力賦彩共に雄渾にして嵩谷一代の傑作といはれてゐる。

## 【略 歴】



筆者嵩谷は名は雄、屠龍翁と號した。英一蝶の門人佐嵩之に就いて畫技を學び、人物及び山水をよくした。文化元年歿、年七十五。「樂只齋畫譜」・「屠龍百富士」等の遺作がある。

右大臣實朝 (七八頁)

松岡映丘筆

本圖は昭和七年の作で、帝展第十三回に出品された日本畫である。畫題は承久元年正月二十七日、右大臣拜賀の式を鶴岡八幡宮に擧げた日の實朝——即ち凶刃に斃れる日の實朝を描いたもので、美しい賦彩の中に純白な雪をあしらった極めて藝術味豊かな作品である。

【略歴】

筆者映丘氏は名は輝夫、明治十四年兵庫縣に生れた。九歳の時兩親と共に上京し、橋本雅邦氏の門に入り、次いで山名貫義氏に就いた。古土佐の描法はこの時習得したのが初めである。明治三十七年東京美術學校を卒業し、同校助教を経て教授に就任、大正八年以降帝展審査員を勤め、帝國美術院會員となり、昭和四年帝國美術院賞を受けた。國畫院の盟主として日本畫壇一方の重鎮であつた。昭和十年帝展改組問題にからみ美術學校教授を辭任、新帝院會員に任命され、藝術院會員に選ばれた。歴史人物畫の大家として有名で、特に帝展第十回で美術院賞を授與された

傑作「平治の重盛」は、昭和十二年日伊學會長大倉喜七郎男の手を通じて、ムッソリニ首相に贈られ、日伊文化交流の金字塔として美術國イタリーに永く飾られてゐる。昭和十三年三月二日、病歿した、年五十八。故松岡操氏の五男で、宮中顧問官井上通泰博士、民俗研究の權威柳田國男氏と有名な三兄弟であつた。

佐久間象山 (八一頁)

池上秀畝筆

本圖は昭和五年秋の帝展第十一回に出品された日本畫で、五尺に九尺程の大作、絹地著色のものである。本圖は筆者がその郷土の先覺者を供養する意味で描いたものといふ。佐久間象山が京都三條木屋町に於て刺客に襲はれる最後の場面を捉へて繪にしたもので、白馬に跨り、屹と兇漢を睨んだ一瞬を描いたものである。容貌、服裝、乘馬、すべて根據ある資料に基づき、嚴密な考證が加へられてゐる。乘馬に西洋馬具を用ひてあるが、これは象山が先覺者として進んで用ひてゐたのであつた。象山に對する斬奸狀にも、夷狄の馬具を用ひることを、罪狀の一つとして擧げてある。

【略歴】

筆者秀畝氏は名は國次郎、明治七年十月、長野縣高遠町に生れた。上京して故荒木寛畝氏の門に入り、文展以後帝展に互り、毎回出品し、特選推薦を重ね、遂に審査員となつた。新帝展では指定に擧げられてゐる。氏は現畫壇に於

ける花鳥畫家の泰斗として、また稀に見る麗筆家として知られてゐる。

重盛西八條殿へ赴く

(八四—八五頁)

高橋 廣湖筆

この圖は重盛が父清盛を諫言する爲西八條殿に赴き、今や車を下りて門にかゝる所を題したもので、大きさ六尺一  
一丈二尺、絹本着色の大作で、現在は滿鐵本社の所藏。

【略歴】

筆者は本姓名は浦田久馬記、熊本縣の人。初め天鹿と號し、青年の頃上京して松本楓湖の門に入り、廣湖と號し、  
後高町家を嗣いだ。明治三十八年「都美様圖」を畫き、巽畫會に出品して好評を博した。四十年「蒙古襲來圖」を博覽  
會に出品して銀牌を得た。四十一年文展第一回に本圖を出して未成畫といふので落選したが、非常な傑作で、有志者  
はこれを會場の傍の屋内に陳列した程で、大いに世評を呼び、將來を囑望された。明治四十五年六月歿、年三十八。

芳流閣上の血戦

(二〇七頁)

月岡 芳年筆

この圖は芳流閣上に兩雄の力戦する様を題した綿繪で、縦二枚續、芳年四十歳の時の作、彼の代表作の一である。  
芳年の作は色彩が生剛であり、優艶の趣には缺くる所あるも、霸氣の横溢した點、版畫界の一特質を持してゐる。

【略歴】

筆者は本姓名は芳岡米次郎、一魁齋と號し、大蘇芳年といふ。月岡雪鼎の養子となつた。初め歌川國芳に、後葛飾  
北齋の畫風を學び、更に洋風を加味して一家をなし、モデルを使用した。明治二十五年歿、年五十四。

流泉 啄木

(一枚刷)

齋藤 弓 弦筆

本圖は小堀鞆音の一門で創立した革丙會第八回展の出品作であつて、筆者昭和四年の作。大きさ尺八絹本、天地五  
尺。本文によつて、蟬丸の庵に入る博雅と、庵中の蟬丸とを題したもの。古格の土佐技巧に則して描かれ、色調雅致  
の多いものである。今は男爵陸軍大將奈良武次氏の所藏となつてゐる。

【略歴】

筆者は土佐派の畫家で、文展第八回に「子の日の遊び」、第九回に「つれづれ」、第十一回に「桃の宴」の出品があり、帝展第一回にも「雪月花」の出品がある。

蘭學事始 (一四九頁)

長谷川路可筆

本圖は昭和十一年の秋、開催された文部省美術展覽會に出品された日本畫である。三人の先覺者が額を集めて解剖書翻譯の爲に苦心しつゝある状を描いたもので、向つて右が前野良澤、中が杉田玄白、左が中川淳庵である。

【略歴】

筆者路可氏は本名は龍三、明治三十年神奈川縣に生れた。東京美術學校日本畫科に入り、大正十年卒業した。卒業と同時に、帝展第二回に「エロニモ次郎祐信圖」を出品したが、その年から昭和二年まで、壁畫の研究に歐洲に遊んだ。昭和五年、再び外遊した。

昭和十三年十月五日印刷  
昭和十三年十月八日發行

國語科教授の實際  
—帝國讀本提要卷七—

著書	富山房編輯部
發行者	富山房
代表書	東京市神田區神保町一丁目三番地 會社 富山房
印刷所	坂本守正社 東京市神田區小川町二丁目十二番地

發行所 會社 富山房  
東京市神田區神保町一丁目三番地  
電話神田自二一七一—至二一七八番

終